

南あわじ市埋蔵文化財調査報告書 第13集

上久保遺跡

—市道野田牛内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

はじめに

南あわじ市では、このたび市道野田牛内線道路改良事業に伴う上久保遺跡の埋蔵文化財調査の成果を発掘調査報告書として刊行する運びとなりました。

まだまだ調査結果の公開が不十分な状況ではありますが、今後も文化振興活動の一環として、郷土の歴史や文化を学ぶための環境づくりを進め、文化財保護の更なる理解に努めていく所存ですので、御支援賜りますようよろしくお願いいたします。

本書を作成するにあたり、御指導御協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

南あわじ市教育長
岡田昌史

例言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市賀集野田^{かじゅうのた}に所在する、上久保遺跡^{かみくぼ}の発掘調査報告書である。
2. 1・2次調査（平成14～15年度）は、町道野田牛内線道路改良事業に伴い、旧南淡町の依頼を受け、旧三原郡広域事務組合教育委員会が実施した。3次調査（平成19年度）は、南あわじ市教育委員会（南あわじ市埋蔵文化財調査事務所）が実施した。全ての発掘調査を山崎裕司が担当した。
3. 発掘調査時の写真撮影は山崎が行った。平面・層序図等の実測作業は山崎の指示を受けて安藤政利・宇治田力・新崎都・濱本善美が行い、デジタルトレースを宇治田・白川裕二・豊田亜希子が行った。遺構の掘削作業等は、南あわじ市シルバー人材センターに委託した。
4. 出土遺物の整理作業については第1章に記す通りであるが、遺物の実測作業については豊田・山崎が、デジタルトレースを宇治田・白川・豊田が行った。遺物の写真撮影は山崎が行った。
6. 本書の執筆と編集は山崎が行った。
7. 当調査に関わる写真や実測図面等の資料は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所で保管している。
8. 発掘調査にあたり、兵庫県教育委員会、南あわじ市シルバー人材センターの諸機関から御協力や御指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。
9. 凡例は下に示す通りである。
 - ・本書に記される標高は東京湾平均海水準を基本とする。
 - ・各調査区の平面図の方位は座標北を示す。
 - ・層序図の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究会監修）を参照した。
 - ・遺構番号は調査時、調査区毎に遺構の種類によらず1から通し番号を付したもので、本書では報告・編集上必要な番号以外は割愛した。遺構は可能な限り柱穴・土坑等の言葉に改めたが、性格の明らかでないものはそのまま遺構とした。復元した建物については1～11の番号を付した。
 - ・本書収録の遺物は、ゴシック体で通し番号を付した。
 - ・土器実測図の断面は、土師器・黒色土器が□、輸入・施釉陶磁器が■、瓦器・瓦質土器が■、須恵器・国産陶器が■とし、縮尺は土器・石製品・瓦が1/4、鉄製品は1/2とした。

本文目次

はじめに

例言

第1章 調査の経緯と経過…………… 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… 3

第2節 歴史的環境…………… 4

第3章 調査成果

第1節 A地区…………… 7

第2節 B地区…………… 14

第3節 C地区…………… 26

第4節 D地区…………… 32

第5節 E地区…………… 36

第4章 総括

第1節 土師器供膳具の分類と時期について…………… 39

第2節 中世遺構の年代と変遷について…………… 44

第3節 大型建物と祭祀土坑の性格について…………… 46

挿 図 目 次

図1 調査区設定図 (S=1/2,000) …………… 2	図25 C地区の位置…………… 26
図2 南あわじ市の位置 …………… 3	図26 C地区 北壁層序図 (S=1/80) …………… 26
図3 淡路島南部の地形と調査地の位置 (S=1/400,000) …… 3	図27 C地区 第1遺構面 平面図(S=1/200)… 27
図4 調査地周辺の遺跡 (S=1/25,000) … 4・5	図28 C地区 第2遺構面 平面図(S=1/200)… 27
図5 A地区の位置 …………… 7	図29 C地区 建物8 平面・層序図(S=1/100) 28
図6 A地区 北・東壁層序図(S=1/80) …… 7	図30 C地区 遺構出土遺物 (S=1/4) …… 29
図7 A地区 第1遺構面 平面図(S=1/200) 8	図31 C地区 包含層出土遺物 (S=1/4) …… 30
図8 A地区 第2遺構面 平面図(S=1/200) 8	図32 D地区の位置…………… 32
図9 A地区 建物1 平面・層序図(S=1/100) 9	図33 D地区 北壁層序図 (S=1/80) …………… 32
図10 A地区 建物2 平面・層序図(S=1/100) 9	図34 D地区 平面図 (S=1/200) ・ 流路361 層序図 (S=1/40) …… 33
図11 A地区 土坑232 遺物出土状況 平面・断面図(S=1/20) 10	図35 D地区 遺構出土遺物 (S=1/4・1/2) … 34
図12 A地区 遺構出土遺物 (S=1/4) …… 11	図36 D地区 包含層出土遺物(S=1/4) …… 35
図13 A地区 包含層出土遺物 (S=1/4) …… 13	図37 E地区の位置 …………… 36
図14 B地区の位置 …………… 14	図38 E地区 南壁層序図(S=1/80) …………… 36
図15 B地区 北壁層序図 (S=1/80) …… 14	図39 E地区 平面図(S=1/200) …………… 37
図16 B地区 平面図 (S=1/200) …………… 15	図40 E地区 建物9・10 平面・層序図(S=1/100) 37
図17 B地区 建物3 平面・層序図(S=1/100) 16	図41 E地区 建物11 平面・層序図(S=1/100) 38
図18 B地区 建物4 平面・層序図(S=1/100) 17	図42 E地区 遺構・包含層出土遺物(S=1/4) 38
図19 B地区 建物5・6・7 平面・層序図(S=1/100) 18	図43 土師器皿a類の法量分布…………… 40
図20 B地区 土坑44・80・101・164 遺物出土状況 平面・断面図(S=1/20) … 19	図44 土師器皿b類の法量分布…………… 41
図21 B地区 遺構出土遺物1 (S=1/4) …… 20	図45 土師器皿c類の法量分布…………… 42
図22 B地区 遺構出土遺物2 (S=1/4) …… 22	図46 土師器小皿の法量分布…………… 43
図23 B地区 遺構出土遺物3 (S=1/2) …… 24	図47 賀集地域の中世供膳具(S=1/8) …… 44
図24 B地区 包含層出土遺物 (S=1/4) …… 25	図48 中世建物の床面積分布…………… 48
	図49 祭祀遺構B型(S=1/10)…………… 50
	図50 祭祀遺構C型(S=1/50) …………… 50

表 目 次

表1 土師器皿a類の法量 …………… 40	表5 中世古段階・新段階の遺構と出土遺物… 45
表2 土師器皿b類の法量 …………… 41	表6 建物群の変遷 …………… 46
表3 土師器皿c類の法量…………… 42	表7 中世建物の規模 …………… 47
表4 土師器小皿の法量 …………… 43	表8 祭祀関係遺構一覧 …………… 49

写真図版目次

- 写真図版1 上段：調査地近景（東より）
中段：A地区 土坑232 遺物出土状況（東より）
下段：A地区 第1遺構面 全景（西より）
- 写真図版2 上段：A地区 第2遺構面 全景（西より）
中段：B地区 土坑44 遺物出土状況（南東より）
下段：B地区 土坑80 遺物出土状況（北より）
- 写真図版3 上段：B地区 土坑101 遺物出土状況（西より）
中段：B地区 土坑164 遺物出土状況（東より）
下段：B地区 土坑164 遺物出土状況（西より）
- 写真図版4 上段：B地区 全景（東より）
中段：B地区 建物4（北より）
下段：C地区 第1遺構面 全景（西より）
- 写真図版5 上段：C地区 第2遺構面 全景（西より）
中段：D地区 全景（西より）
下段：E地区 全景（西より）
- 写真図版6 上段：A地区 遺構出土遺物（1～10）
中段：A地区 遺構出土遺物（11～13）
下段：A地区 遺構出土遺物（14～25）
- 写真図版7 上段：A地区 遺構出土遺物（26～34）
中段：A地区 包含層出土遺物（35～41）
下段：A地区 包含層出土遺物（42～50）
- 写真図版8 上段：B地区 遺構出土遺物（51～63）
中段：B地区 遺構出土遺物（64～73）
下段：B地区 遺構出土遺物（74～86）
- 写真図版9 上段：B地区 遺構出土遺物（87～89・94～99）
中段：B地区 遺構出土遺物（90～93）
下段：B地区 遺構出土遺物（100～107）
- 写真図版10 上段：B地区 遺構出土遺物（108～117）
中段：B地区 遺構出土遺物
（111～113・119～122）
下段：B地区 遺構出土遺物（118）
- 写真図版11 上段：B地区 包含層出土遺物（123～130）
中段：B地区 包含層出土遺物（131～137）
下段：B地区 包含層出土遺物（138～145）
- 写真図版12 上段：C地区 遺構出土遺物（146～153）
中段：C地区 遺構出土遺物（154～165）
下段：C地区 包含層出土遺物（166～169）
- 写真図版13 上段：C地区 包含層出土遺物（170～181）
中段：C地区 包含層出土遺物（182～191）
下段：C地区 包含層出土遺物（192～200）
- 写真図版14 上段：D地区 遺構出土遺物（201～213）
中段：D地区 包含層出土遺物（214～221）
下段：D地区 包含層出土遺物
E地区 遺構・包含層出土遺物（222～228）

第1章 調査の経緯と経過

旧南淡町建設課により町道野田牛内・賀集御陵線道路改良事業が計画され、平成8年度に旧南淡町教育委員会を調査主体として分布調査が行われた。その結果を基に、平成14年度に確認調査を行った。2×2mの調査区を9ヶ所設定し、本報告のA・B・E地区内に設定した計3ヶ所（図1①～③）において埋蔵文化財の包蔵が確認された。

平成15年度に土地の買収を終えていたA・B地区において1回目の本発掘調査^(註1)を行い、年度内に基本的な整理作業を終えた。平成17年に旧三原郡4町が合併すると、事業は市道野田牛内線道路改良事業として南あわじ市に引き継がれ、平成19年度に残りのC～E地区の調査区で2回目の本発掘調査^(註2)を行い、年度内に基本的な整理作業を終えた。平成26～27年度には報告書発行に向けて、原稿の作成や編集作業を行っていった。

・分布調査

調査期間：平成9年3月10・12日

調査面積：約4.2ha

担当者：旧南淡町教育委員会 藤平明・
旧三原郡町村会 中島薫



分布調査風景

・確認調査（1次調査）

調査期間：平成14年10月31日～11月6日

調査面積：36㎡（2×2mの調査区9ヶ所）

調査担当者：旧三原郡広域事務組合教育委員会 山崎裕司
外業補助員：作田利美

・本発掘調査（2次調査）

調査期間：平成16年2月2日～3月16日

調査面積：約890㎡

担当者：旧三原郡広域事務組合教育委員会 山崎裕司
外業補助員：安藤政利・宇治田力・新崎都・濱本善美



発掘調査風景

・整理作業（平成15年度）

作業内容：出土遺物の洗浄・接合・整理・写真整理

担当者：山崎裕司

内業作業員：宇治田力・垣脇美奈子・新崎都・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗

・本発掘調査（3次調査）

調査期間：平成19年11月20日～平成20年1月5日

調査面積：約850㎡

担当者：南あわじ市教育委員会 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所 山崎裕司
外業補助員：宇治田力

・整理作業（平成19年度）

作業内容：出土遺物の洗浄・接合・整理・写真整理

担当者：山崎裕司

内業作業員：赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・
筒井健司・富岡美早子・豊田亜希子・濱崎真紀・
濱本善美・榎本早苗・三宅靖子

・報告書作成・編集作業（平成26～27年度）

作業内容：出土遺物の実測・トレース・写真撮影、
遺構図面のトレース、執筆、編集

担当者：山崎裕司

内業作業員：宇治田力・白川裕二・豊田亜希子

・事務局（平成27年度）

教育長：岡田昌史

教育次長：藤岡崇文

社会教育課長（埋蔵文化財調査事務所長兼務）：福原敬二・課長補佐：福田龍八



整理作業風景

第1章の註

- 『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 2000～2004年度 埋蔵文化財発掘調査』南あわじ市教育委員会 2008
- 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 2007年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2011

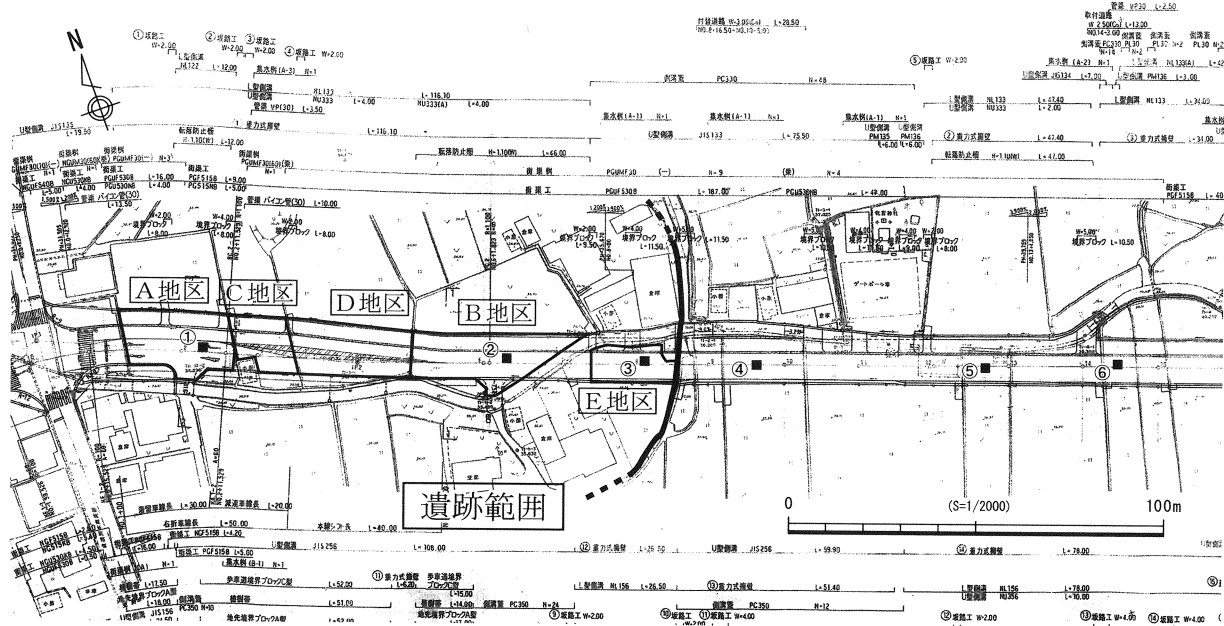


図1 調査区設定図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 淡路島南部の地形と気候

淡路島は、周囲209km、総面積595km²を有する瀬戸内海最大の島である。北は明石海峡、東は紀淡海峡、西は鳴門海峡により画され、古来より瀬戸内海の海上交通において重要な位置を占めてきたと思われる。

地質・地形的には、花崗岩から構成される北部の津名山地と和泉砂岩や頁岩から構成される南部の諭鶴羽山地に大別される。諭鶴羽山地の北西側には島内最大の三原平野が広がっており、大日・三原・成相川などの各河川が、平野内を南東から北西方向に播磨灘へ流れ込む。

淡路島南部の気候は、瀬戸内海性気候に外洋性気候が加味された温暖な気候で年平均気温15～16℃、年平均降水量は全国平均よりやや少ない1,407mmを測る。



図2 南あわじ市の位置

2. 遺跡周辺の地形

上久保遺跡は南あわじ市賀集野田に所在する。

賀集地区は三原平野の南西端に位置し、東側には上述の諭鶴羽山地、西側には南辺寺山塊が広がる。

遺跡は三原平野を流れる主要河川の一つである大日川の支流牛内川左岸の河岸段丘に立地する。調査地の標高はおよそ33～35mを測り、東から西方向に緩やかに傾斜する。

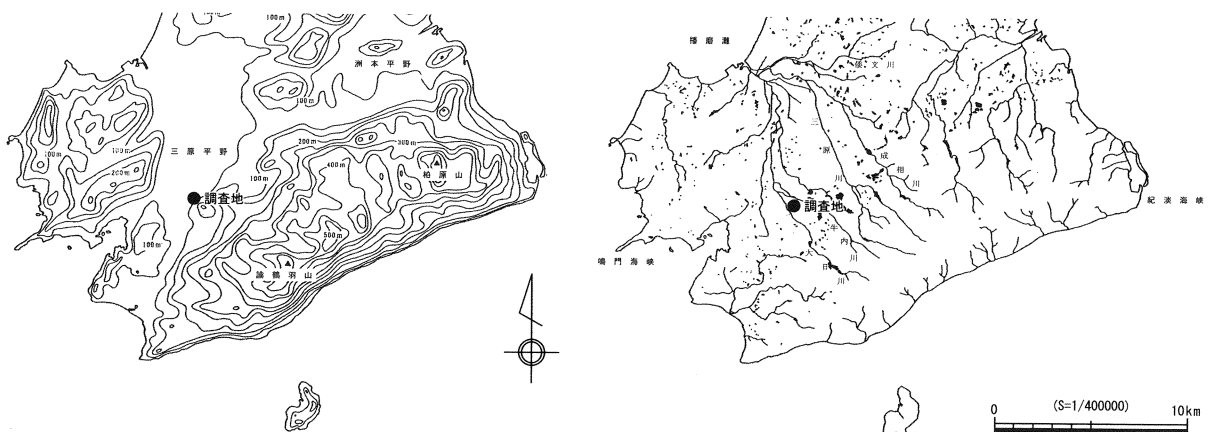


図3 淡路島南部の地形と調査地の位置

第2節 歴史的環境

①上久保遺跡（賀集野田）^{（註1・2）}が所在する賀集地区では近年、圃場整備や下水道整備、オニオン道路・洲本灘賀集線（阿万バイパス）などの道路整備が行われ、大規模な開発事業が進展した。その結果、新しい遺跡の発見が相次ぎ、中には淡路島を代表するような重要な発見もあった。これらの新しく得られた知見を交えながら、賀集地区を中心とした歴史的環境を見ていくことにしたい。

1. 旧石器・縄文時代

大日川支流牛内川流域の②長原遺跡（賀集牛内）と③楠谷遺跡（賀集野田）^{（註3）}ではサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。長原遺跡は散布地で、数点が表面採集されており、楠谷遺跡では確認調査時に1点が出土している^{（註3）}。

諭鶴羽山地北～西側の三原平野と接する緩斜面の地帯では、旧石器から縄文時代の早い段階での遺跡が比較的多く分布する。

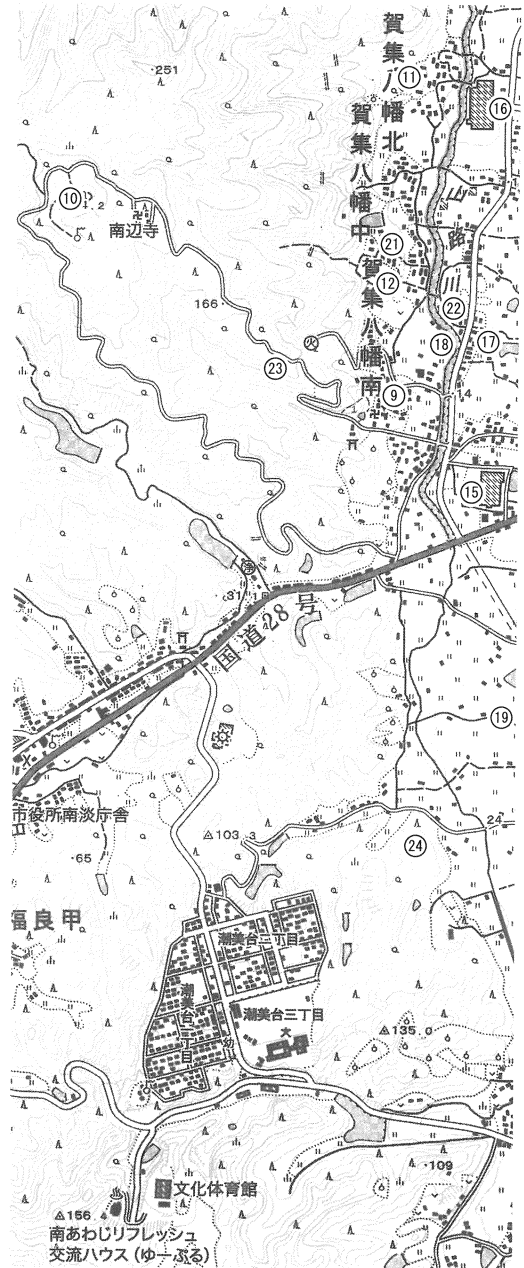
また兵庫県教育委員会によって行われた④神子曾遺跡（賀集鍛冶屋）^{（註4）}の発掘調査で、縄文時代中期の廃棄土坑が検出されており、遺跡周辺の分布調査では縄文時代のサヌカイト製の石鏃が多数採集されていることから^{（註1）}、周辺にこの時期の集落が展開していた可能性が高い。

2. 弥生時代

平成16年度の⑤嫁ヶ渚遺跡（賀集立川瀬）^{（註5）}の発掘調査では、弥生時代前期末～中期初頭頃の土器や木製農耕具等が溝から出土した。平成14～15年度の発掘調査では、弥生時代中期前葉頃と考えられる円形竪穴住居が検出されており、前～中期において継続して集落が営まれていたと推定される^{（註1）}。

弥生時代中期には、上述した神子曾遺跡において、島内最大規模の周溝墓群が検出されており、周辺に三原平野でも中心的な集落が展開していた可能性が高い。また後・終末期の遺構も検出されている^{（註4）}。

三原平野周辺の河川の中・上流域において、弥生時代中期～終末期に属する小規模な遺跡の発見事例が増えつつある。賀集地区においては、大日川上流左岸に位置し、弥生時代中期後半・中期末～後期初頭頃の小穴や終末期頃の土坑が検出された⑥久保ノカチ遺跡（賀集福井）^{（註5）}、弥生時代中期後半頃の自然流路や弥生時代後期前半頃の竪穴住居が検出された⑦高萩遺跡（賀集福井）^{（註6）}、大日川上流右岸に位置し、弥生時代終末期の土坑が検出された⑧柵つノ木遺跡（賀集生子）^{（註1）}、南辺寺山東側山麓に位置し、後期～終末期の竪穴住居が検出された⑨護国寺東遺跡（賀集八幡南）^{（註3）}、南辺寺山山頂の遺物散布地である⑩西山遺跡（賀集八幡南）などが分布する。



4. 歴史時代

古代三原郡は倭文・幡多・養宜・榎列・神稻・阿万・賀集の7郷から構成されていた。淡路島では古代地名が比較的多く残存しており(註9)、これらの古代地名のほとんどが現在の地区の名称として使われている。賀集郷には嫁ヶ淵遺跡をはじめとして官衙的な遺跡が多く分布することから、淡路国において重要な役割を果たしていた地区と推定される。

嫁ヶ淵遺跡では7世紀末～8世紀前葉頃の大型掘立柱建物群が検出され、蹄脚円面硯をはじめとして各種硯が出土している。三原郡衙関連遺跡でかつ国府的機能の一端を担っており、さらに遺跡のすぐ西側に大日川が流れていることから、港の機能があったと推定されている(註1)。近年の重要な発掘調査成果の一つである。

また大型方形柱穴が検出された⑩石ヶ坪遺跡(賀集八幡北)、円面硯や緑釉陶器が出土した⑪大野遺跡(賀集八幡南)(註2・10)、倉庫と思われる総柱建物群が検出された⑫岸ノ上遺跡(賀集八幡南)(註2)の他、銀製の和銅開珙が表面採集されている賀集鍛冶屋周辺(註3)にも官衙的な遺跡が存在する可能性が高い。⑬才門遺跡(賀集鍛冶屋)は官衙遺跡ではないが、律令期の建物が検出されている(註10)。

⑭戸川池窯跡(賀集牛内)では、8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器が多数表面採集されている(註1)。

護国寺は八木の淡路国分寺や成相寺同様、律令期に起源をもち、現存する極めて長い歴史をもつ寺社であり、護国寺東遺跡では10世紀頃と思われる軒平瓦が出土している(註3)。

賀集郷は中世になると賀集庄となり、賀集寺とも呼ばれた護国寺は賀集八幡神社の神宮寺として繁栄し、多くの院坊(塔頭)をもっていたことがわかっている。護国寺東遺跡では、その位置から院坊の建物ではないかと思われる14～15世紀頃の掘立柱建物等が検出されている(註3)。

賀集地域には中世城館も極めて多く、⑮佐々木土居城跡(賀集八幡南)・⑯西山南土井館跡(賀集八幡南)・⑰城が丸城跡(賀集八幡)・⑱古城山城跡(賀集鍛冶屋)・⑲賀集城の腰城跡(賀集賀集～賀集鍛冶屋)・⑳城の土井城跡(賀集福井)・㉑丹生山城跡(賀集野田)が分布する。

中世の集落跡としては、上久保遺跡の他、久保ノカチ遺跡(註5・11)や高萩遺跡(註6)で掘立柱建物等が検出されており、比較的規模の大きなものが含まれる。

第2章の註

1. 『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 2000～2004年度 埋蔵文化財発掘調査』南あわじ市教育委員会 2008
2. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 2007年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2011
3. 『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 1995～1999年度 埋蔵文化財発掘調査』三原郡広域事務組合2001
4. 『神子曾遺跡・石田遺跡・才門遺跡・曾根遺跡』兵庫県教育委員会2014
5. 『久保ノカチ遺跡』南あわじ市教育委員会2012
6. 『高萩遺跡』南あわじ市教育委員会2011
7. 松下智義「平松遺跡出土の韓式系土器について」『のじぎく文化財保護研究財団 紀要 創刊号』のじぎく文化財保護研究財団1996
8. 定松佳重・谷口梢「南あわじ市出土の韓式系土器について」『韓式系土器研究Ⅹ』韓式系土器研究会2006
9. 武田信一『淡路島の地名研究』兵庫地名研究会1996
10. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅴ 2008年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会2012
11. 『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2013

第3章 調査成果

第1節 A地区

標高は約33m、調査区の面積は450㎡で、最も西側に位置する調査区である。第1遺構面で中世の掘立柱建物が2棟復元できた。

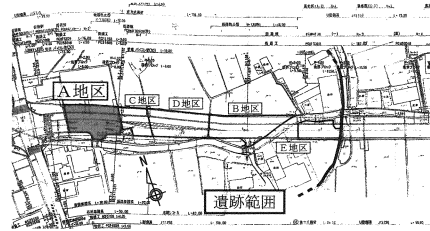


図5 A地区の位置

1. 層序 (図6)

中世と古代の遺構面2面を確認した。隣接するC地区では中世の遺構面が2面に分かれていたが、当地区では1面(第1遺構面)のみである。層序から2度の耕地造成(1・2・4・5層)が観察でき、それらの影響を受けて中世包含層・遺構面が削平を受けたためと考えられる。土色の違いから7・8層がC地区第1遺構面(中世新段階)、9~12層がC地区第2遺構面(中世古段階)に対応する遺構と考えられる。第2遺構面は古代の遺構面で、南東から北西にかけて谷状の落ち(遺構297)が検出され、埋土となる13~19層からはおよそ10~11世紀を中心とする土器が出土している。他地区では古代の遺構面は検出されていない。

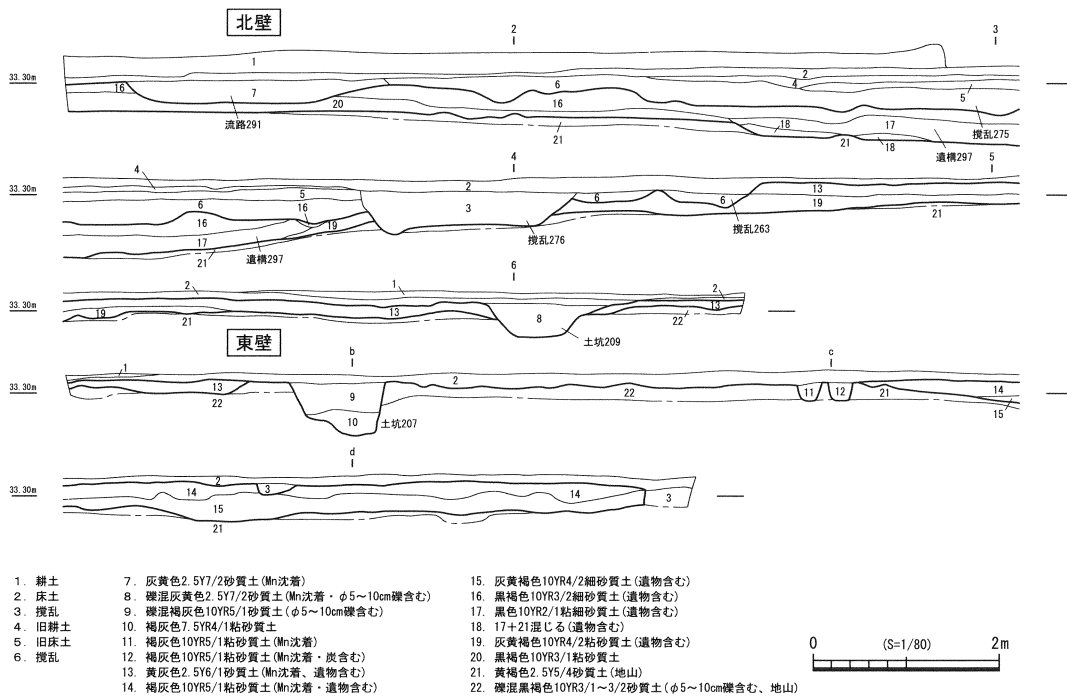


図6 A地区 北・東壁層序図

2. 遺構 (図7・8、写真図版1・2)

第1遺構面からは中世の遺構に加えて近世~近代の攪乱土坑が検出された。地区北東部の中世の柱穴群から、建物1・2が復元できた。層序でも述べたように中世遺構は埋土から2時期に分かれ、隣接するC地区の2つの遺構面に対応する。灰白色(2.5Y7/1・10YR7/1)や灰黄色(2.5Y7/2)等、淡い灰色を示す遺構埋土(建物2柱穴、土坑209・243・271・272、溝291)が中世新段階、褐灰色(7.5YR4/1・10YR5/1)の濃い灰色を示す遺構埋土(建物1柱穴、土坑207・232・241・285)が中世古段階に対応する。

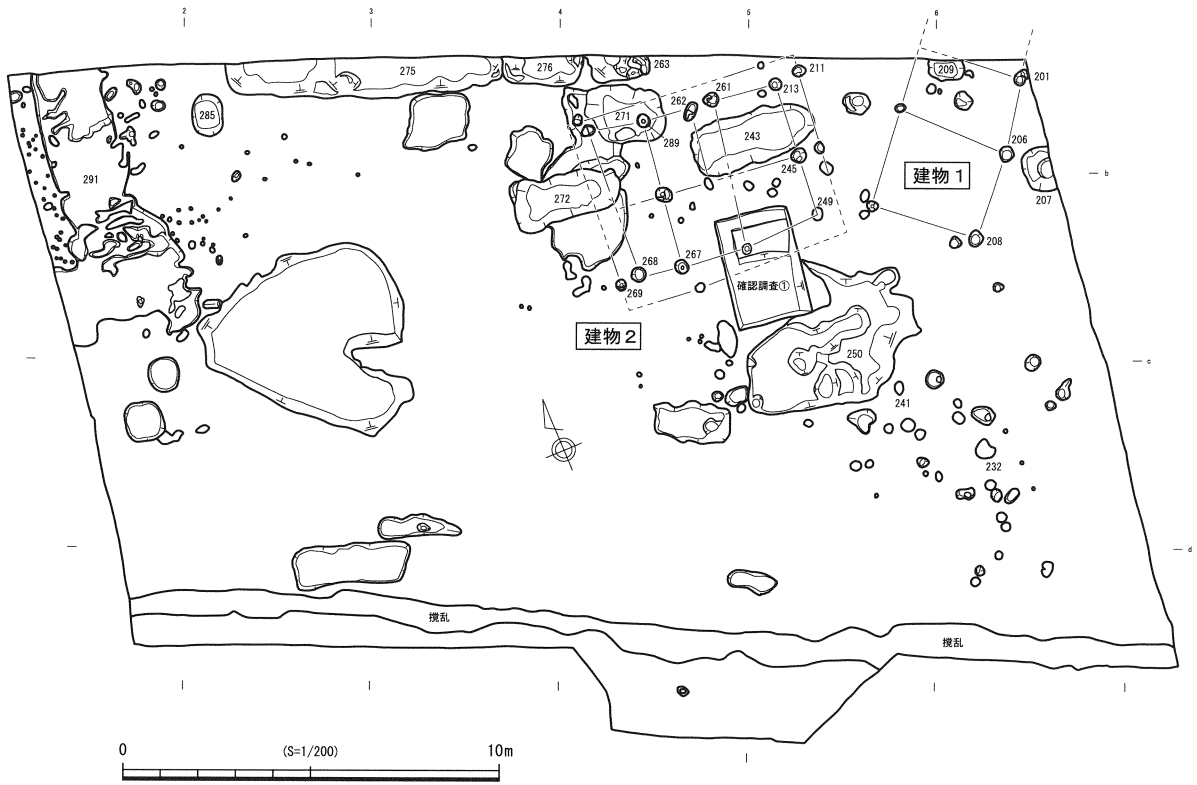


图7 A地区 第1遺構面 平面図

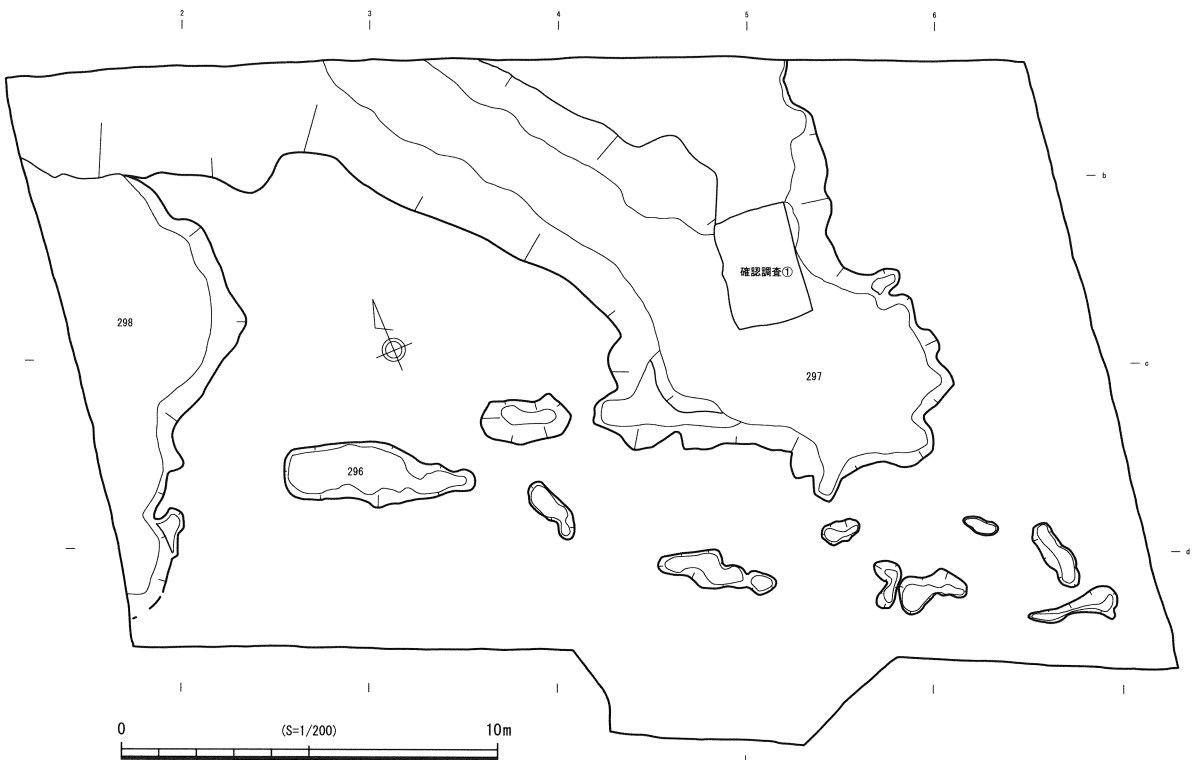


图8 A地区 第2遺構面 平面図

第2遺構面では南東から北西方向に伸びる自然地形の落ち（遺構296～298等）が検出されたが、人為的な掘削と判断できる遺構は検出されなかった。出土土器は周囲からの流れ込みと思われる。

建物1（図9） 梁行1間×桁行2間以上で、調査区外の北東方向へ延びる可能性がある。建物の方位は約N40°Eを示す。

ほとんどの柱穴が褐灰色7.5YR4/1粘砂質土を中心とした埋土で構成されており、中世古段階に対応する。

建物2（図10） 他の遺構による削平等で柱穴の残りが悪い。母屋部分は梁行2間×桁行3間の総柱で、北側に間仕切りと思われる柱穴が見られる。母屋部分の面積は約19.7㎡である。さらに廂柱穴の残りが悪いが、母屋4面に廂を廻らす構造の可能性があり、これを含めた総床面積は約31.7㎡となる。建物の方位は約N87°Wを示す。

ほとんどの柱穴が灰白色10YR7/1砂質土を中心とした埋土で構成されており、中世新段階に対応する。

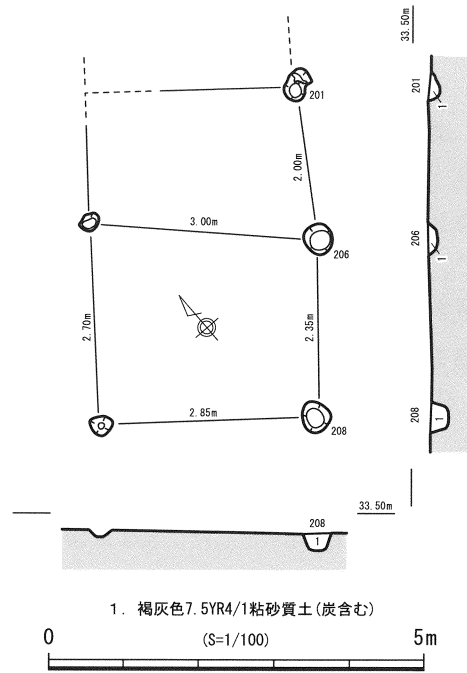


図9 A地区 建物1 平面・層序図

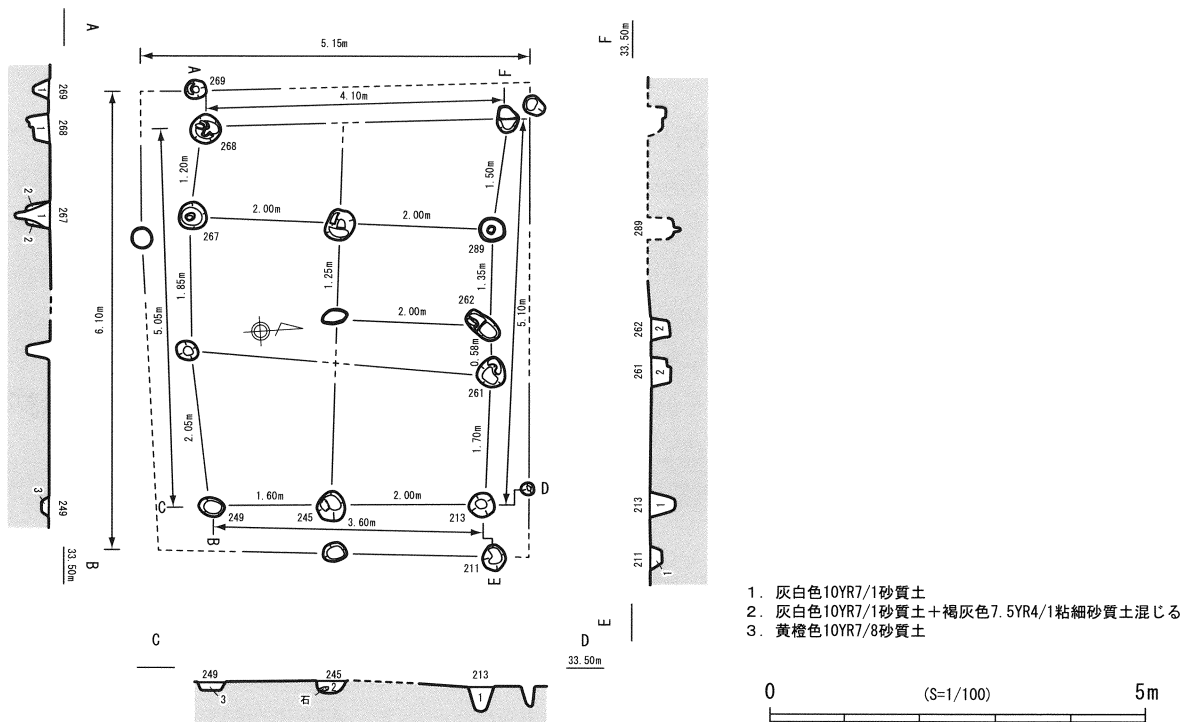


図10 A地区 建物2 平面・層序図

土坑232（図11、写真図版1）完形に近い土師器皿（7）と平坦な板状の石が出土した。埋土は中世古段階に対応する。

3. 遺物

（1）遺構出土遺物（図12、写真図版6・7）

建物2 柱穴213から1の須恵器皿が出土した。体部上半は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.1cmを測る。

土坑207 2～4が出土した。2は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を上方に拡張し、丸くおさめる。3は土師器皿で、体部が少し内湾し、口縁部を外反気味に薄く仕上げ、端部を丸くおさめる。復元口径12.8cmを測る。4は土師器皿で、体部上半が少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径13.0cmを測る。

土坑209 5・6が出土した。5は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を上下に少し拡張し、内側がわずかに凹む。6は土師器小皿で、口縁部が内湾し、端部を尖り気味におさめる。復元口径6.2cmを測る。

土坑232 7が出土した。7は土師器皿で、体部が少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。口径12.6cm・底径7.1cm・器高3.2cmを測る。

土坑241 8・9が出土した。8は土師器皿で、体部上半が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.0cmを測る。9は土師器皿で、体部が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径11.8cm・復元底径6.6cm・器高2.7cmを測る。

土坑243 10が出土した。10は土師器皿で、体部上半は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径10.8cmを測る

攪乱250 11は古代、12は中世、13は近世の出土遺物である。11は東播系須恵鉢で、体部上半が直線的、口縁端部は拡張せず面をなす。復元口径34.7cmを測る。12は東播系須恵鉢で、体部中位でやや内湾、口縁部付近は外反気味で、端部を上下に拡張して内側へ巻き込むような形態である。復元口径27.2cmを測る。13は土師質の焙烙で、口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。復元口径24.6cmを測る。

土坑271 14・15は古代の遺物で、流れ込み等と考えられる。14は平底の須恵器坏で、体部下半がやや内湾し、底部外面は切り離し後ナデを施す。復元底径9.3cmを測る。15は黒色土器碗の底部で、低い断面三角形の高台が付く。内面を黒化してミガキを施す。復元底径7.5cmを測る

土坑272 16が出土した。16は東播系須恵器鉢の口縁部で、少し外反し、端部の上方を大きく拡張し、内側が凹む。復元口径33.0cmを測る。

攪乱275 17・19は中世、18は近世の出土遺物である。17は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を上下に拡張し、内側が凹む。18は磁器皿で、緑白色の釉がかかる。体部は内湾し、口縁部が少し外反する。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.6cmを測る。19は土師器皿で、体部が内湾し、口縁部を外反気味に薄く仕上げる。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.8cmを測る。

土坑285 20が出土した。20は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径8.1cmを測る。

溝291 21～23が出土した。21は土師器皿で、体部下半が内湾する。底部外面は摩耗のため調整不明である。復元底径7.0cmを測る。22は土師器皿で、体部下半が少し内湾し、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径7.0cmを測る。23は須恵器皿で、体部下半が内湾し、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.4cmを測る。

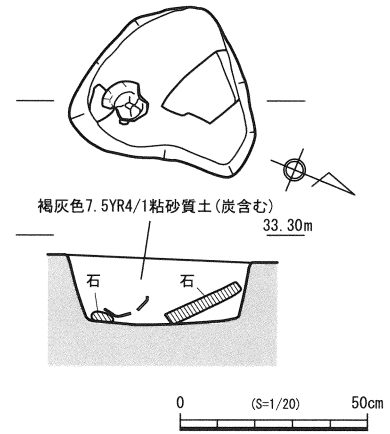


図11 A地区 土坑232 遺物出土状況 平面・断面図

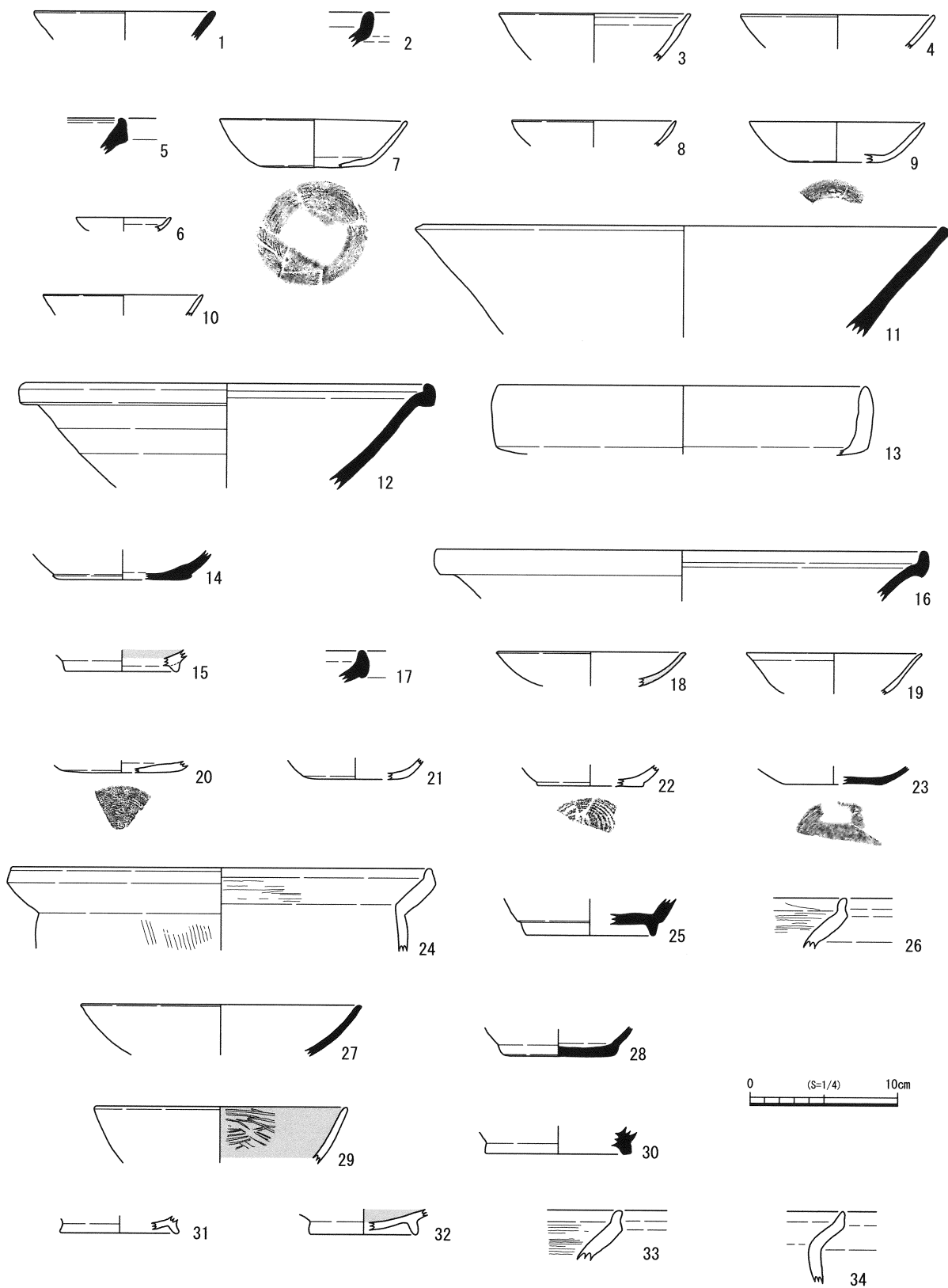


图12 A地区 遺構出土遺物

遺構296 24・25が出土した。24は土師器鍋で、口縁部を「く」字状に屈曲し、端部を上方に少し拡張する。体部外面には縦方向のハケメ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。復元口径28.0cm・復元頸部径24.5cmを測る。25は須恵器坏の底部で、断面三角形の高台が付く。体部下半は直線的である。復元底径8.5cmを測る。

遺構297 26～30が出土した。26は土師器鍋の口縁部で、端部を上方に拡張して丸くおさめる。内面に横方向のハケメを施す。27は須恵器碗で、体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径18.6cmを測る。28は平底の須恵器坏で、外面は切り離し後ナデを施す。体部下半は少し内湾する。復元底径7.4cmを測る。29は黒色土器碗で、体部は内湾し、内面を黒化してミガキを施す。口縁端部を丸くおさめる。復元口径16.8cmを測る。30は器種不明の須恵器の底部で、断面台形の高台が付く。復元底径9.8cmを測る。

遺構298 31～34が出土した。31は土師器碗の底部で、「ハ」字状にひろく高台が付く。復元底径8.0cmを測る。32は黒色土器碗で、少し外にひろく高台が付く。内面を黒化してミガキを施す。復元底径7.2cmを測る。33は土師器鍋の口縁部で、端部を上方に拡張して丸くおさめる。内面に横方向のハケメを施す。34は土師器鍋で、口縁部を「く」字状に屈曲し、端部を上方に拡張して尖り気味におさめる。

(2) 包含層出土遺物 (図13、写真図版7)

35～39は中世、40～49は古代、50は弥生時代の出土遺物と思われる。

35は瓦質の茶釜である。体部上半外面に木の葉等のスタンプ文が見られる。丸みを帯びた体部の中位に鐳が付く。体部下半外面はハケメ後ナデを施し、底部付近にはユビオサエ痕が残る。体部内面はヨコ方向のハケメが施され、所々にユビオサエ痕が残る。口縁部は直立し、端部を丸くおさめる。復元口径17.4cm・復元頸部径17.6cm・復元鐳部外径29.6cmを測る。36は須恵器皿で、体部が内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.0cmを測る。37は土師器小皿で、体部が少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。口径7.5cm・底径5.1cm・器高1.1cmを測る。38は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型A系列^(註1)と思われる。体部外面にタタキを施す。39は東播系須恵器鉢の口縁部で、口縁端部に面をつくり、上方に少し拡張して尖り気味におさめる。

40は須恵器坏もしくは碗の口縁部で、体部上半は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径17.8cmを測る。41は平底の須恵器坏で、体部下半は直線的である。底部外面は切り離し後ナデを施す。復元底径10.6cmを測る。42は須恵器坏の底部と推定され、やや外側にひろく高台が付く。復元底径6.8cmを測る。43は平底の須恵器坏で、体部が内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転ヘラ切痕が残る。復元口径14.8cm・復元底径11.0cm・器高3.1cmを測る。44は須恵器壺等の底部と推定され、底部外面は切り離し後ナデを施す。復元底径10.8cmを測る。45は須恵器坏の底部で、やや外側にひろく高台が付く。復元底径7.6cmを測る。46は平底の須恵器坏で、底部外面に回転ヘラ切痕が残る。復元底径8.0cmを測る。47は土師器鍋の口縁部で、端部を上方に拡張して尖り気味におさめる。内面に横方向のハケメを施す。48は土師器鍋の口縁部で、端部を上方に拡張して丸くおさめる。内面にヨコ方向のハケメを施す。49は土師器鍋の口縁部で、外側にひろく体部から口縁部をさらに外側に屈曲させ、口縁端部を上方に拡張して尖り気味におさめる。体部外面に縦方向のハケメを施す。

50は弥生時代中期の甕で、口縁部が「く」字状に屈曲し、端部に面をもつ。体部外面に斜め方向のハケメ、内面に横方向のハケメを施す。復元口径20.8cm・復元頸部径18.0cmを測る。

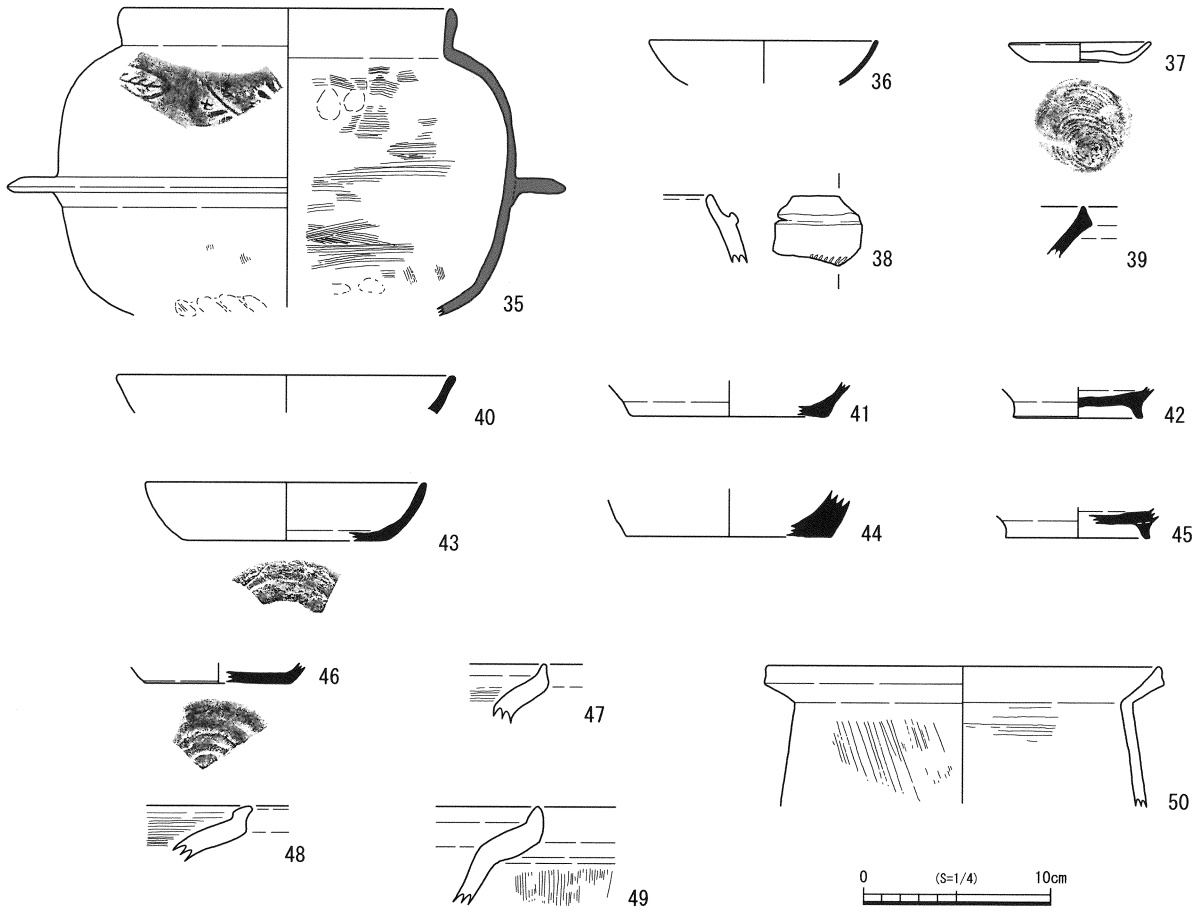


图13 A地区 包含层出土遗物

第2節 B地区

標高は約34m、調査区の面積は440㎡である。今回、最も多く遺構が検出できた地区で、中世の掘立柱建物が5棟復元できた。

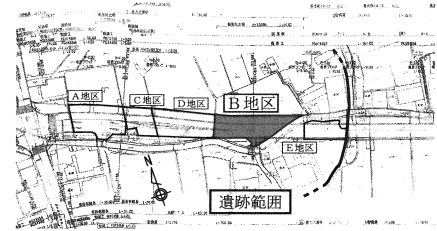


図14 B地区の位置

1. 層序 (図15)

層序では2面の遺構面が確認されるが、検出作業は15・16層上で行っている。上の遺構面はC地区の中世新段階に対応すると推定され、4・5層がこの遺構面上に堆積した包含層、6～9層がこの遺構面に属する遺構である。下の遺構面は中世古段階に対応し、10・11層がこの遺構面上に堆積した包含層、12～14層がこの遺構面に属する遺構である。この調査区については、C地区の中世新段階・古段階に対応する遺構埋土の違いが確認できなかった。また包含層からは弥生時代後期の遺物も少量出土しているが、周囲からの流れ込みと思われる。

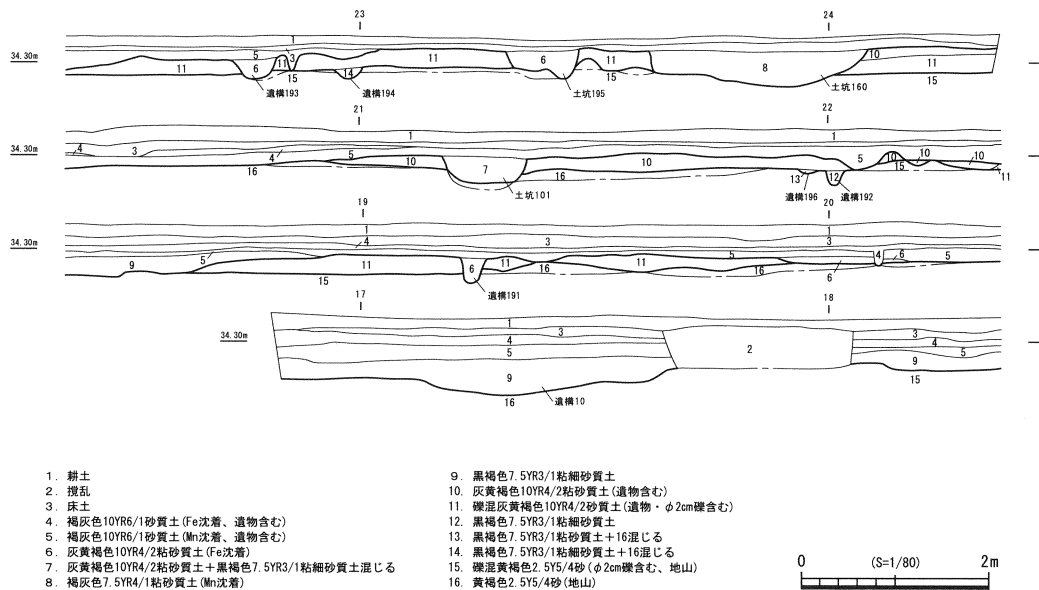


図15 B地区 北壁層序図

2. 遺構 (図16、写真図版4)

先述したように中世の2時期に対応する遺構が検出されたが、土色から時期判別は不可能であった。ただし遺構出土遺物によってある程度、時期判別が可能である。古段階のみ出土したのは土坑82・85のみで、これら以外の遺構出土遺物は基本的に新段階で古段階の遺物がわずかに含まれる程度である。復元した掘立柱建物5棟(建物3～7)の内、建物3～5は出土遺物(建物5については関連する土坑164)から判断して新段階、建物7は建物3と同方位で同時期、建物6は建物3・4と重複し、これらと規模が全く違うことから古段階の可能性が高い。建物3・4は孫廂を備える規模の大きな建物で、集落の中心的な階層の住居と推測される。土坑44・80・164からは、完形のものを含む残りの良い土師器皿等が出土している。後述するが、建物との位置関係から土坑44と建物3、土坑80と建物4、土坑164と建物5の関連が指摘でき、建物と関わる祭祀土坑と推定される。

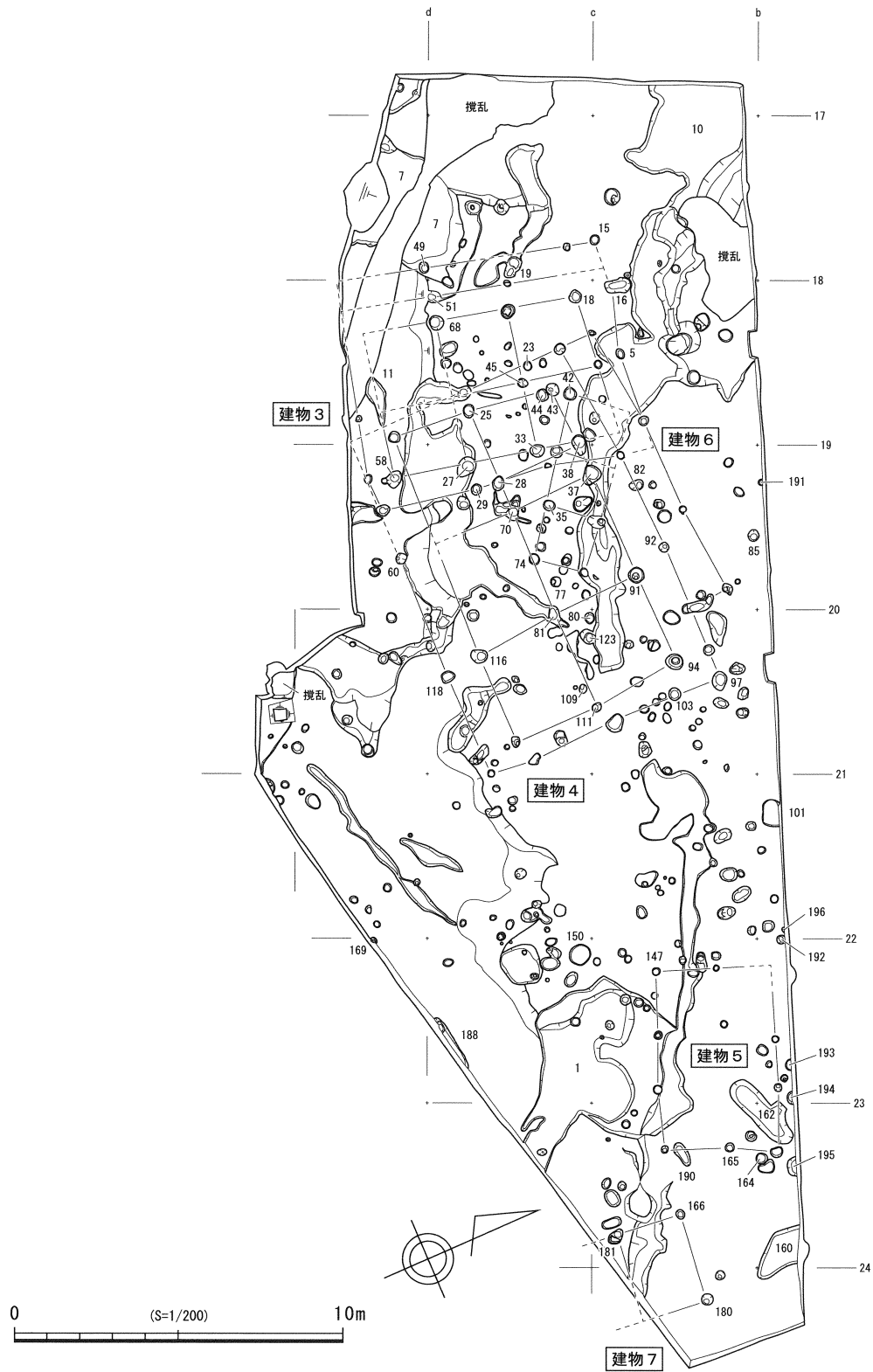


图 16 B地区 平面图

建物3 (図17) 他の遺構による削平等で柱穴の残りが悪い。母屋部分は梁行2間×桁行3間の総柱と推定され、母屋部分の面積は約29.9㎡である。母屋四面に廂を廻らし、西側にはさらに孫廂を付設する構造と推定される。廂部分を含めた総床面積は約56.3㎡の規模となる。建物の方位は約N11°Eを示す。

建物4 (図18、写真図版4) 母屋部分は梁行2間×桁行3間の総柱で、北西側に間仕切りと思われる柱穴が見られ、母屋部分の面積は約49.7㎡である。母屋四面に廂を廻らし、北西側にさらに孫廂を付設する構造と推定される。廂部分を含めた総床面積は約89.2㎡の規模となり、建物群中最大規模を示す。建物の方位は約N90°Wを示す。

建物5 (図19) 梁行2間×桁行3間の側柱建物で、面積は約18.7㎡となる。建物の方位は約N69°Wを示す。

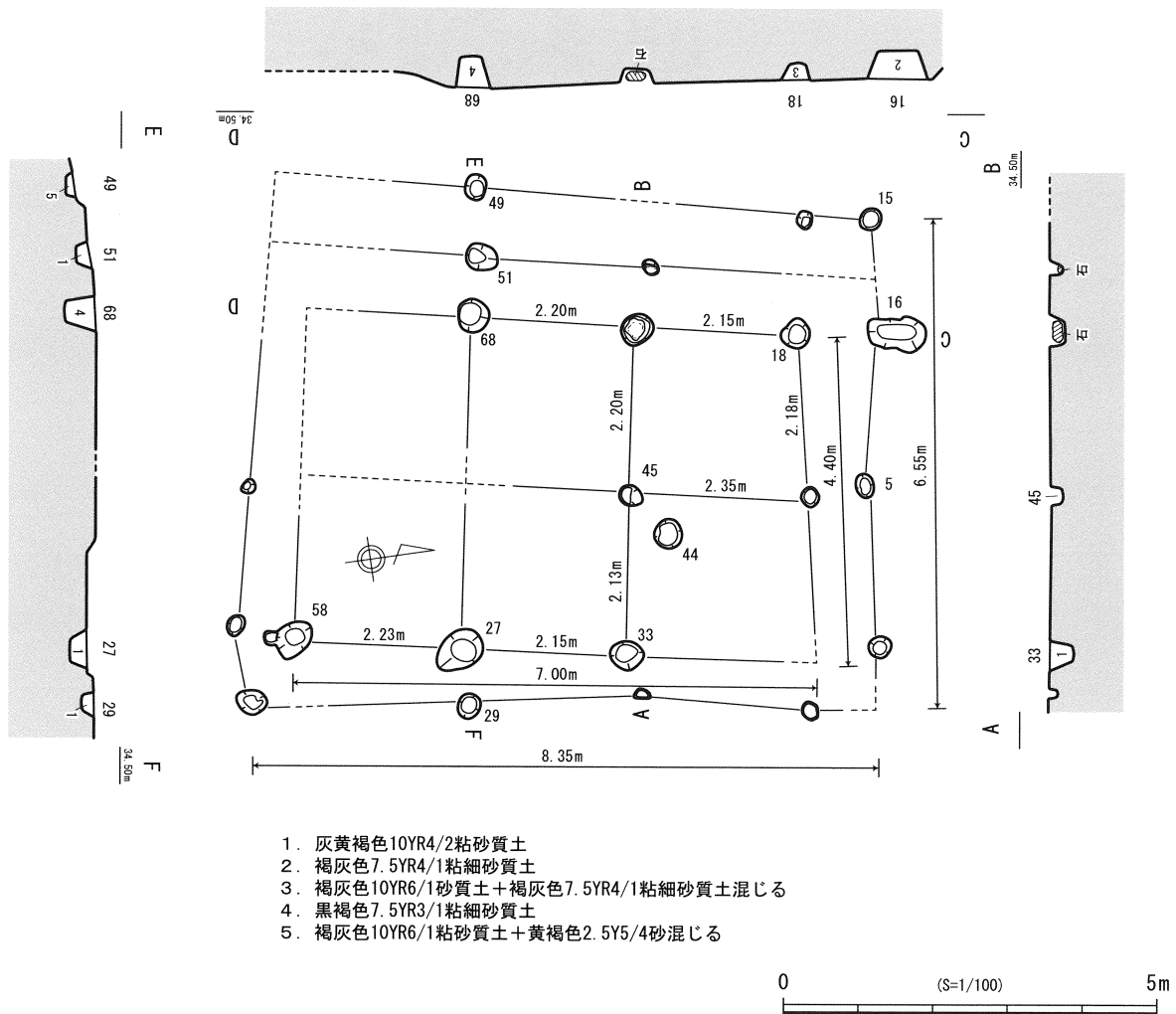
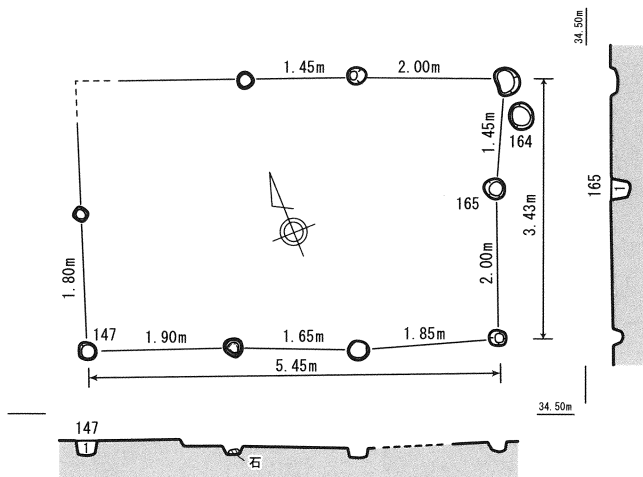
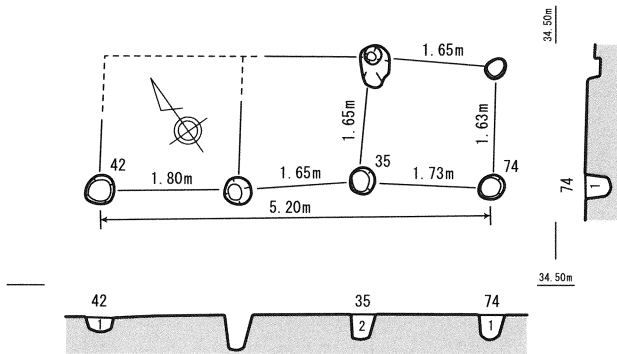


図17 B地区 建物3 平面・層序図



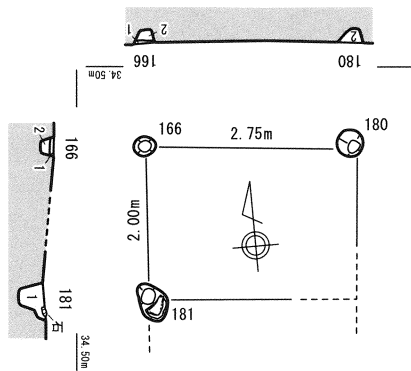
1. 灰黄褐色10YR4/2砂質土 + 黒褐色7.5YR3/1粘細砂質土混じる

建物5



1. 灰黄褐色10YR4/2粘砂質土
2. 褐灰色7.5YR4/1粘細砂質土

建物6



1. 灰黄褐色10YR4/2粘砂質土
2. 黒褐色7.5YR3/1粘細砂質土

建物7

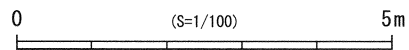


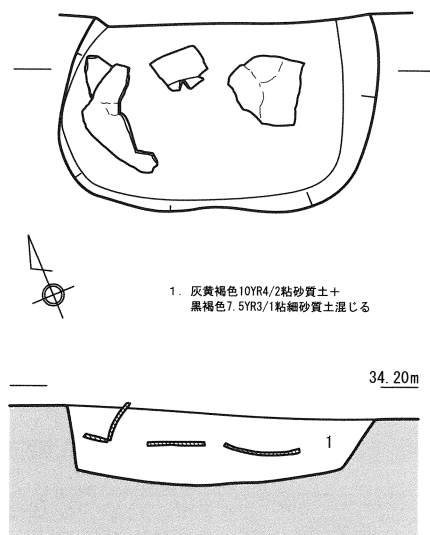
図19 B地区 建物5・6・7 平面・層序図

土坑44（図20、写真図版2） 残りの良い土師器皿・小皿（88～93）が出土しており、祭祀土坑と考えられる。建物3の母屋部分北東に位置し、この建物と関わりをもつと推定される。

土坑80（図20、写真図版2） 残りの良い土師器皿・小皿（97～101）や瓦質羽釜（95）が出土しており、祭祀土坑と考えられる。建物4の母屋部分北東に位置し、この建物と関わりをもつと推定される。

土坑101（図20、写真図版3） 北側は事業範囲外となるため掘削しておらず、土坑の規模は不明であるが、隅丸方形に近い平面形と思われる。破片化した須恵質大甕（118）が出土している。

土坑164（図20、写真図版3） 柱状の石と残りの良い土師器皿・小皿（111～113）が出土しており、祭祀土坑と考えられる。建物外であるが、建物5の北東に位置し、この建物と関わりをもつと推定される。



土坑101

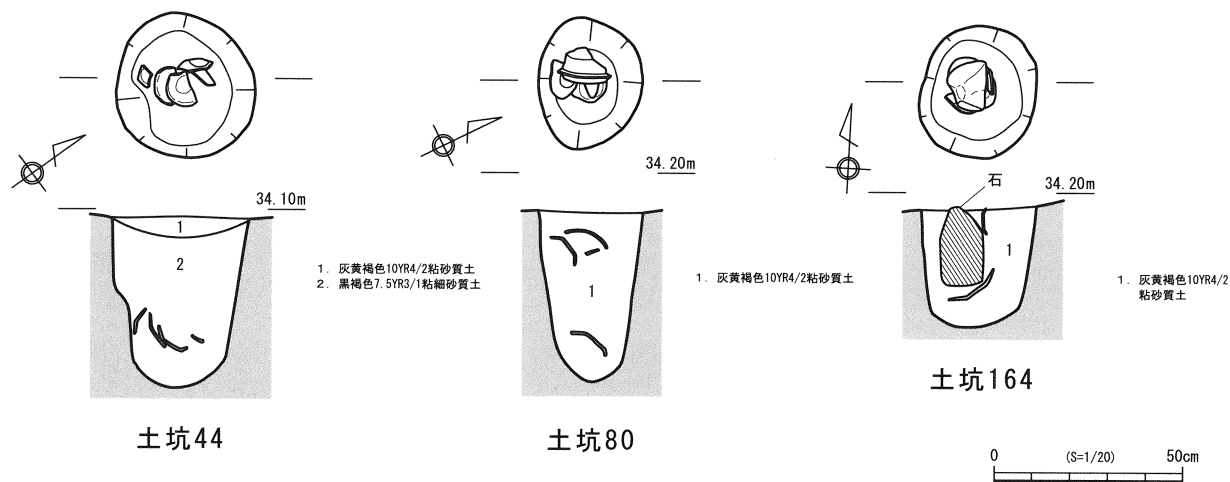


図20 B地区 土坑44・80・101・164 遺物出土状況 平面・断面図

3. 遺物

(1) 遺構出土遺物（図21～23、写真図版8～10）

建物3 柱穴5から119、柱穴15から51、柱穴16から52・53、柱穴49から54、柱穴58から55・56、柱穴68から57が出土した。119は銅銭で、「通」部分の破片である。51は須恵質の甕で、摩耗が激しいが、体部外面の一部に綾杉状のタタキが残る。口縁部は外反し、端部が凸帯状になっている。復元口径24.4cm・復元頸部径22.4cmを測る。52は甕形の土製煮炊具で、口縁部が少し外反し、端部に面をつくる。53は土師器皿で、体部下半が内湾し、底～体部内面に段状のロクロナデを施す。底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径7.1cmを測る。54は土師器皿で、体部上半が内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径13.4cmを測る。55は土師器皿で、体部下半が内湾し、底部外面に回転糸切痕が残る。

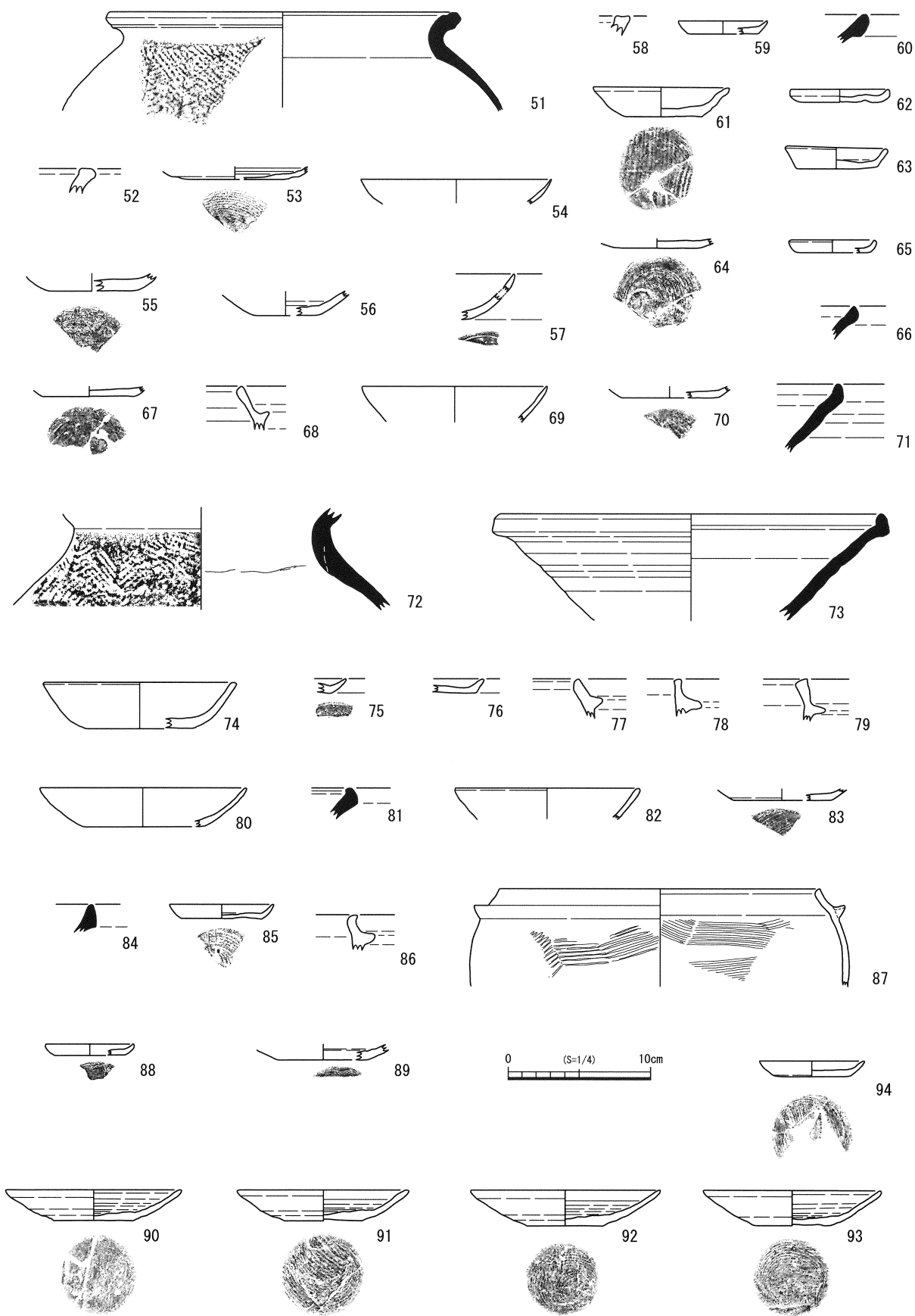


图 21 B 地区 遺構出土遺物 1

復元底径6.4cmを測る。56は土師器皿で、体部下半が少し内湾し、底～体部内面に段状のロクロナデを施す。復元底径5.0cmを測る。57は土師器皿で、体部が内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。

建物4 柱穴25から58、柱穴37から59・120、柱穴43から60～62、柱穴60から63、柱穴70から64・65・121、柱穴91から66・67、柱穴92から68、柱穴97から69・70が出土した。58は甕形の土製煮炊具と推定され、口縁端部に面をつくる。59は土師器小皿で、口縁部が少し内湾し、端部を尖り気味におさめる。復元口径6.2cm・復元底径5.0cm・器高0.9cmを測る。120は断面長方形の鉄製品で、工具等的一部分と思われる。60は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を下方に拡張する。61は土師器小皿で、体部下半が少し内湾、上半が少し外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切後の板状痕が残る。口径9.5cm・底径5.3cm・器高2.1cmを測る。62は土師器小皿で、底部から短い口縁部を内湾気味に立ち上げる。復元口径6.8cm・底径5.1cm・器高0.9cmを測る。63は土師器小皿で、口縁部が直線的、端部を丸くおさめる。底部外面は糸切後にナデを施したと思われる。口径7.3cm・底径5.7cm・器高1.5cmを測る。64は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.0cmを測る。65は土師器小皿で、口縁部が内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面は摩耗のため調整不明である。復元口径6.0cm・復元底径5.2cm・器高0.9cmを測る。121は鉄製の釘である。66は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を下方に少し拡張し、内側が少し凹む。67は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕後の板状痕が残る。復元底径6.4cmを測る。68は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型B系列^(註1)と推定される。69は土師器皿で、体部が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径13.0cmを測る。70は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径7.1cmを測る。

流路1 71～79が出土した。71は東播系須恵器鉢で、体部上半が直線的で、端部を上方に拡張し、内側が少し凹む。72は須恵質の甕の頸～体部で、体部外面に綾杉状のタタキを施す。内面に粘土のつなぎ目が残る。復元頸部径18.0cmを測る。73は東播系須恵器鉢で、体部上半が少し外反する。口縁端部の上方を大きく拡張する。復元口径26.8cmを測る。74は土師器皿で、体部が内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は糸切後にナデを施したと思われる。復元口径13.6cm・復元底径7.4cm・器高3.2cmを測る。75は土師器小皿で、口縁部が少し内湾し、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。器高1.0cmを測る。76は土師器小皿で、口縁部は直線的、端部を尖り気味におさめる。底部外面は摩耗しており調整不明である。器高1.0cmを測る。77は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型A系列と推定される。78は羽釜形の土製煮炊具で、口縁部が直口に近い形状と推定され、端部に面をつくる。79は羽釜形の土製煮炊具で、口縁部を内傾し、端部に面をつくる。

流路7 80～82・122が出土した。80は土師器皿で、体部が内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径14.6cm・復元底径8.8cm・器高2.7cmを測る。81は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を上方に少し拡張し、内側に巻き込むような形態である。82は口縁部内側に薄く重ね焼き痕が残り、焼成不良の須恵器皿の可能性もある。体部上半は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.8cmを測る。122は断面正方形の鉄製品で、工具等的一部分と思われる。

流路10 83～85が出土した。83は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.8cmを測る。84は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を上方に拡張し、内側が少し凹む。85は土師器小皿で、口縁部は少し内湾し、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.2cm・復元底径5.7cm・器高1.0cmを測る。

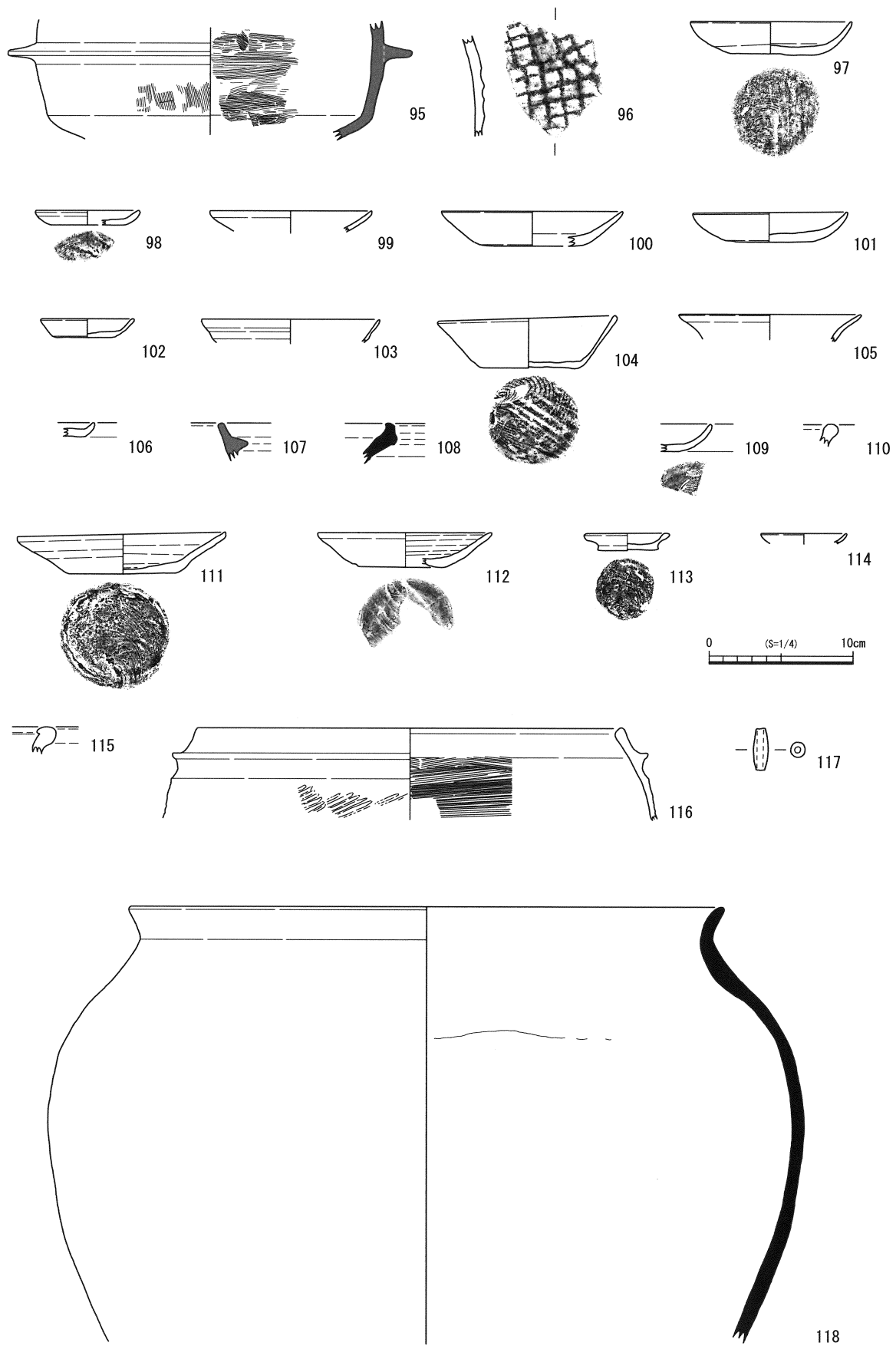


图 22 B地区 遺構出土遺物 2

流路11 86が出土した。86は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型B系列と推定される。

土坑19 87が出土した。87は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型B系列と推定される。体部外面に斜め方向のタタキ、内面に横方向のハケが施される。復元口径22.3cm・復元鏝部外径26.0cmを測る。

土坑44 88～93が出土した。88は土師器小皿で、口縁部が少し内湾し、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径6.2cm・復元底径5.0cm・器高0.8cmを測る。89は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。体部下半は直線的で、内面に段状のロクロナデを施す。復元底径6.2cmを測る。90は土師器皿で、体部が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残り、底～体部内面に段状のロクロナデを施す。復元口径12.1cm・底径5.5cm・器高2.2cmを測る。91は土師器皿で、体部下半が内湾、上半は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残り、底～体部内面に段状のロクロナデを施す。口径11.6cm・底径5.5cm・器高2.2cmを測る。92は土師器皿で、体部が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残り、底～体部内面に段状のロクロナデを施す。復元口径12.6cm・底径5.2cm・器高2.5cmを測る。93は土師器皿で、体部下半が少し内湾、上半は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残り、底～体部内面に段状のロクロナデを施す。口径12.0cm・底径5.4cm・器高2.5cmを測る。

土坑77 94が出土した。94は土師器小皿で、口縁部が直線的、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.4cm・底径5.5cm・器高1.1cmを測る。

土坑80 95～101が出土した。95は瓦質の羽釜で、体部外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメを施す。復元鏝部外径27.8cmを測る。96は土製煮炊具の体部片と推定され、外面に格子状のタタキを施す。97は土師器皿で、体部が内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。口径11.0cm・底径6.0cm・器高2.3cmを測る。98は土師器小皿で、口縁部が内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.2cm・復元底径5.1cm・器高1.0cmを測る。99は土師器皿で、体部上半が少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.3cmを測る。100は土師器皿で、体部が直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.6cm・復元底径7.0cm・器高2.4cmを測る。101は土師器皿で、体部が内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面は糸切後にナデを施したと思われる。復元口径10.7cm・底径6.2cm・器高2.1cmを測る。

土坑82 102・103が出土した。102は土師器小皿で、口縁部が直線的、端部を丸くおさめる。底部外面は回転糸切後にナデを施す。口径6.4cm・底径4.3cm・器高1.3cmを測る。103は土師器皿で、体部上半が直線的、口縁端部を尖り気味におさめる。体部外面に段状のナデを施す。復元口径12.2cmを測る。

土坑85 104が出土した。104は土師器皿で、体部が直線的、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切後の板状痕が残る。口径12.0cm・底径6.5cm・器高3.4cmを測る。

土坑101 105・118が出土した。105は土師器皿で、体部上半は外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.6cmを測る。118は須恵質の大甕で、口縁部は緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。全体に摩耗しているため調整は不明である。復元口径41.0cm・復元頸部径39.7cm・復元胴部最大径52.3cmを測る。

土坑109 106が出土した。106は土師器小皿で、口縁部は少し内湾し、端部を尖り気味におさめる。底部外面は摩耗のため調整不明である。器高1.0cmを測る。

土坑123 107が出土した。107は瓦質の羽釜で、口縁部が短い。

土坑150 108が出土した。108は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を少し上下に拡張し、内面が凹む。

土坑162 109・110が出土した。109は土師器皿で、体部が内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。器高1.9cmを測る。110は甕形の土製煮炊具の口縁部と推定される。端部を丸くおさめる。

土坑164 111～113が出土した。111は土師器皿で、体部が外反し、口縁端部に面をもつ。体部内外面に段状のロクロナデを施す。底部外面に回転糸切痕が残る。口径14.2cm・底径7.4cm・器高2.9cmを測る。112は土師器皿で、体部下半が少し内湾、上半が直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。底～体部内面に段状のロクロナデを施す。底部外面に回転糸切後の板状痕が残る。口径

11.9cm・底径6.1cm・器高2.4cmを測る。113は土師器小皿で、口縁部が外反、端部を肥厚させて丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。口径5.6cm・底径4.2cm・器高1.1cmを測る。

土坑169 114が出土した。114は土師器小皿で、口縁部が内湾し、端部を尖り気味におさめる。復元口径6.0cmを測る。

土坑188 115・116が出土した。115は甕形の土製煮炊具と推定される。口縁部は外反し、端部を内側に巻き込むような形態である。116は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型B系列と推測される。体部外面に斜め方向のタタキ、内面に横方向のハケメが施される。復元口径29.6cm・復元鍔部外径32.9cmを測る。

土坑190 117が出土した。117は有孔土錘で、長さ2.9cm・最大径1.0cm・孔径0.4cmを測る。

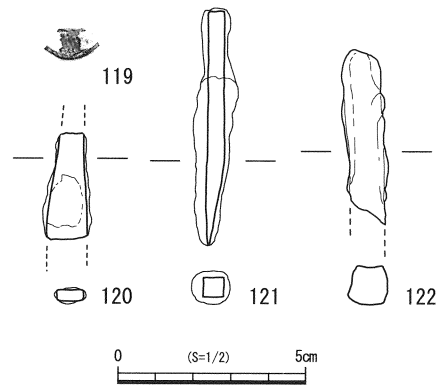


図 23 B地区 遺構出土遺物3

(2) 包含層出土遺物 (図24、写真図版11)

123～143は中世、144・145は弥生時代の出土遺物と思われる。

123は蓮弁文の青磁碗の口縁部で、端部を丸くおさめる。124は青磁碗で、口縁部外面を一周する線が入る。体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.8cmを測る。125は備前焼播鉢で、口縁端部の上方への拡張が顕著で、乗岡編年中世5期(註2)と思われる。126は古瀬戸の平碗で、底部外面から体部下半にかけて無釉である。底部は突出し、体部が緩やかに内湾、口縁部が少し外反し、端部を尖り気味におさめる。復元口径17.6cm・復元底径5.0cm・器高6.7cmを測る。127～129は東播系須恵器鉢の口縁部である。127は端部を上下に拡張し、内側に凹線が形成されている。128は端部の上方への拡張が顕著で、内面が凹む。129は土師質の焼成で、端部を上下に少し拡張し、内面が凹む。130は鍋で、口縁部が「く」字状に屈曲し、端部に面をつくる。体部外面に縦方向のハケメが施される。131・132は甕形の土製煮炊具と思われる。131の口縁部は緩やかに外反し、端部に面をつくる。体部外面に斜め方向のタタキが施される。132は短い口縁部を外側に屈曲させ、端部に面をつくる。133～138は羽釜形の土製煮炊具と思われる。133～136は播磨型B系列、137・138はA系列と推測される。133の体部外面には斜め方向のタタキ、内面には横方向のハケメが施される。136は復元口径26.8cmを測る。137の体部外面は斜め方向のタタキ、内面はナデを施す。復元口径26.8cm・復元鍔部径30.1cm・復元胴部最大径30.3cmを測る。139は器種不明の土製煮炊具で、体部を内傾させ、口縁端部に面をつくる。140は器種不明の土師器の底部で、突出する底部の外面に回転糸切痕が残る。復元底径5.1cmを測る。141は土師器皿で、体部は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に糸切後ナデ、体部内面に段状のロクロナデを施す。復元口径12.4cm・復元底径6.0cm・器高2.2cmを測る。142は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が

残る。復元底径8.2cmを測る。143は土師器小皿で、少し突出する底部の外面に回転糸切痕が残る。底径5.4cmを測る。

144・145は終末期頃の弥生土器と思われる。144は甕の上半部で、口縁部は「く」字状で、体部外面に斜め方向の粗いタタキ施される。復元口径13.4cm・復元頸部径11.0cmを測る。145は底部で、底径3.5cmを測る。

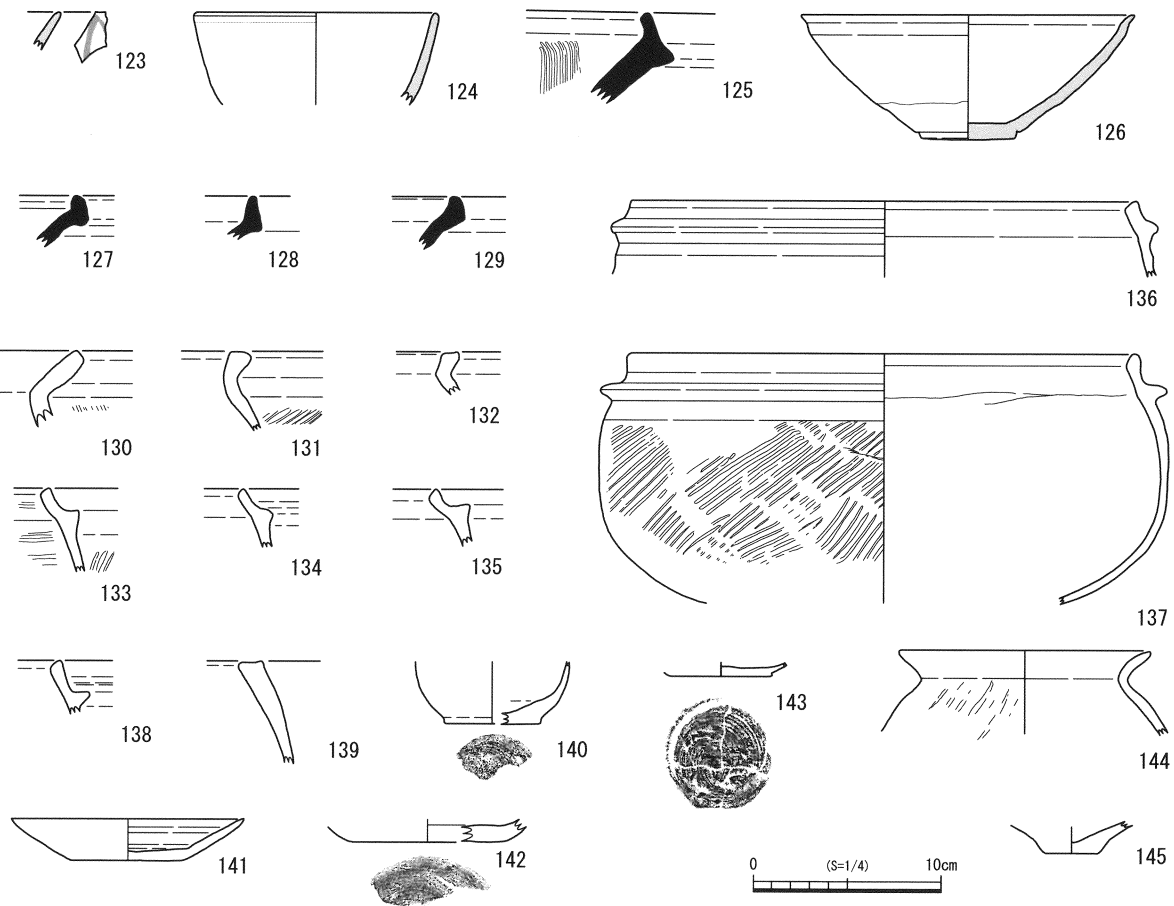


図 24 B 地区 包含層出土遺物

第3節 C地区

標高は33～34m、調査区の面積は260㎡である。当地区では2面の中世遺構面の検出を行うことができ、第2遺構面で掘立柱建物が1棟復元できた。

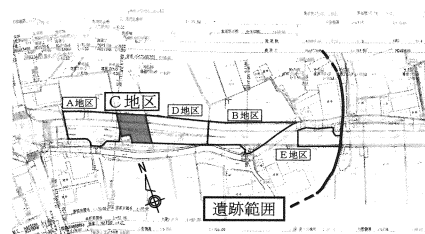


図25 C地区の位置

1. 層序 (図26)

A地区とは畦畔で隔てられ、耕地面が高いことから、A地区より削平の影響が少なかったと考えられる。8・9層は第1遺構面の遺構で、5～7層がこの遺構面上に堆積した包含層である。14層は第2遺構面に対応する遺構で、13層がこの遺構面上に堆積した包含層である。遺構埋土である8・9層と14層、あるいは包含層である5～7層と13層の比較から、第1遺構面に対応する遺構埋土と包含層よりも、第2遺構面に対応する遺構埋土と包含層の土色が濃い色調で明確に区別でき、A地区の埋土についてもこれが確認できたため、時期区分の参考とした。前者を中世新段階、後者を中世古段階とする。

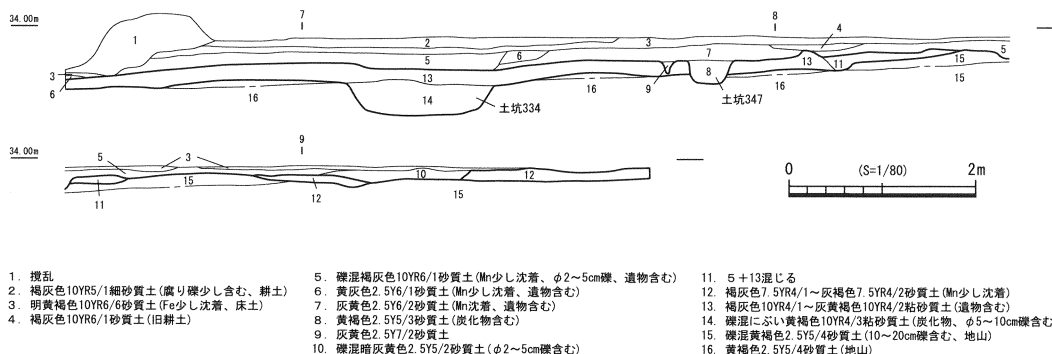


図26 C地区 北壁層序図

2. 遺構 (図27・28、写真図版4・5)

第1遺構面 (中世新段階) では、調査区北西部を中心に土坑等が検出された。

第2遺構面 (中世古段階) では、調査区北西部を中心に土坑等が検出された他、建物8が復元できた。

建物8 (図29) 東西3間・南北3間の側柱建物と推定され、面積は約35.7㎡となる。建物の方位は約N9°Eを示し、柱穴333・341は掘方が大きく、土坑と切り合っている可能性も考えられる。

3. 遺物

(1) 遺構出土遺物 (図30・写真図版12)

146～148は第1遺構面 (中世新段階)、149～165は第2遺構面 (中世古段階) の遺構出土遺物である。

土坑305 146・147が出土した。146は土師器皿の底部で、体部下半は直線的である。底部外面は摩耗で調整不明である。復元底径6.8cmを測る。147は土師器小皿の底部で、体部下半は内湾する。底部外面に回転糸切痕が残る。底径4.3cmを測る。

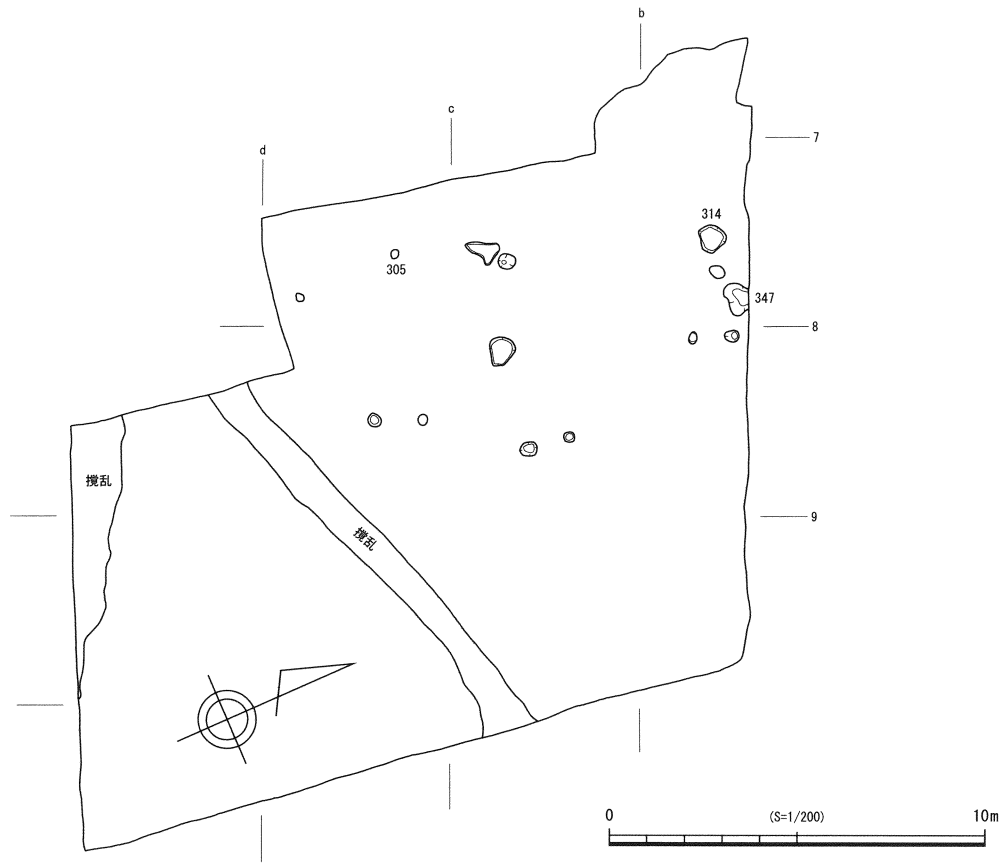


图 27 C地区 第1遺構面 平面図

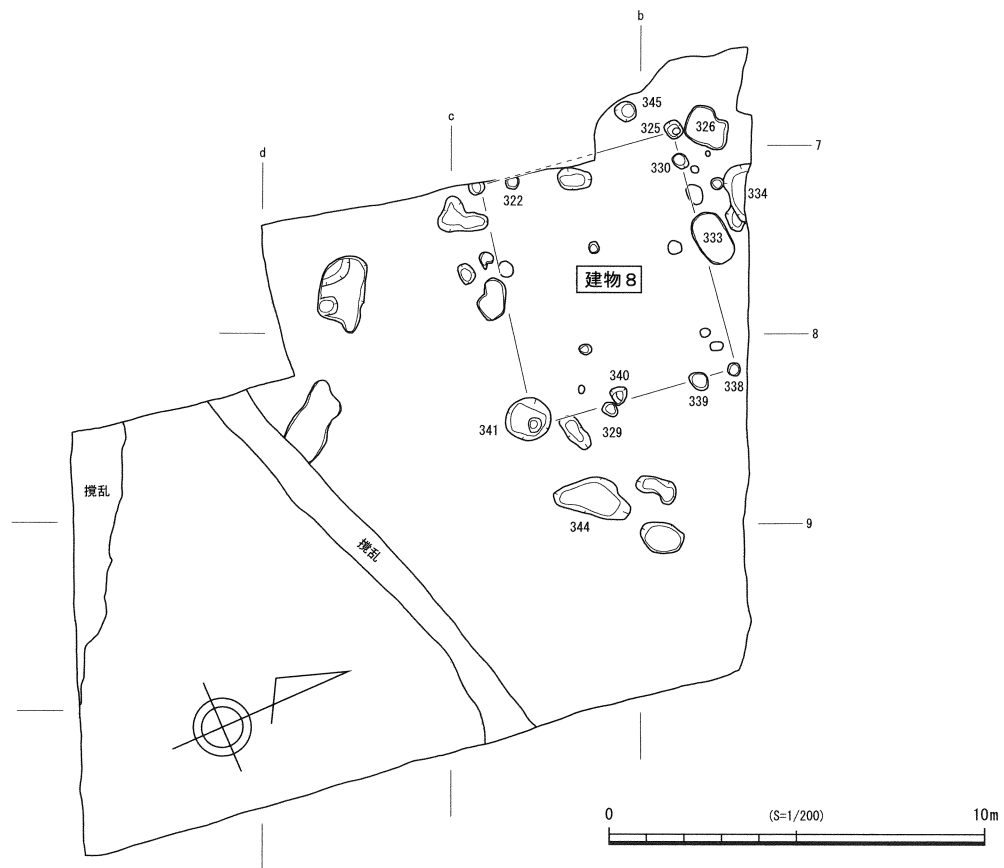


图 28 C地区 第2遺構面 平面図

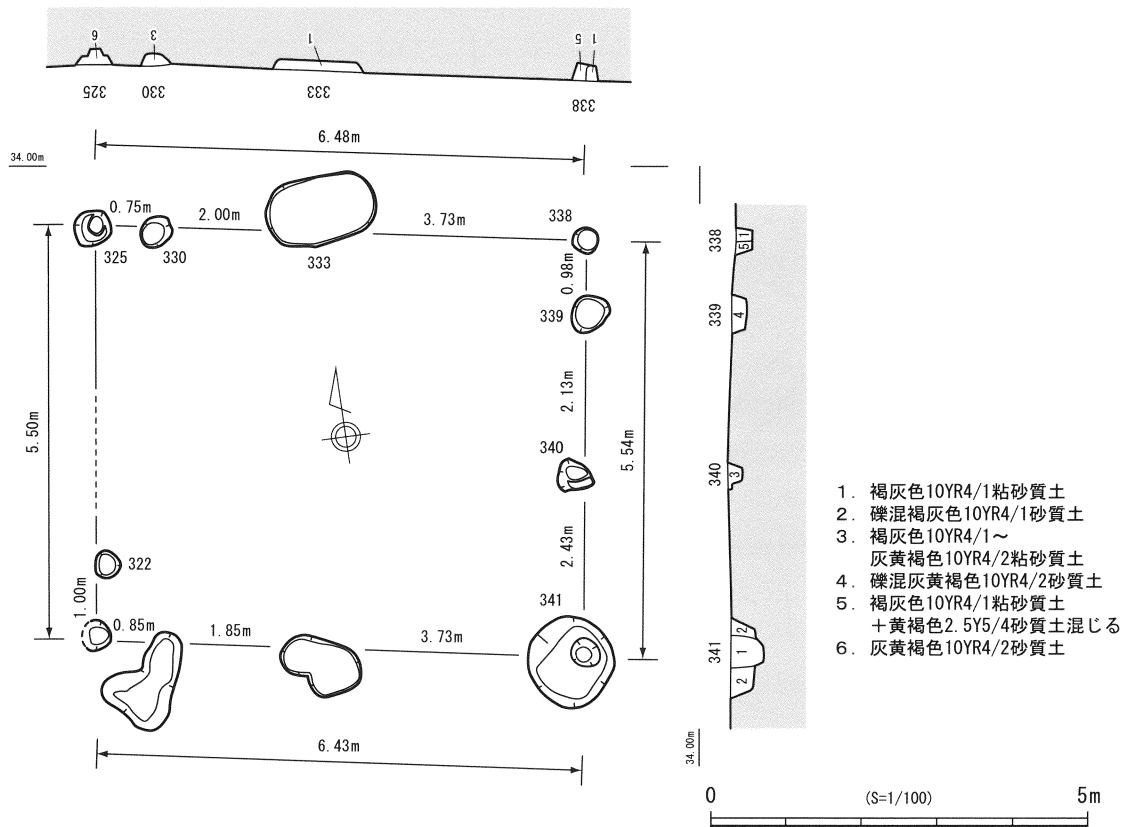


図 29 C地区 建物8 平面・層序図

土坑314 148が出土した。148は甕形の土製煮炊具である。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部を丸くおさめる。体部外面に斜め方向のタタキ、内面に横方向のハケメを施す。復元口径18.1cm・復元頸部径17.2cm・復元体部最大径20.5cmを測る。

建物8 柱穴322から149、柱穴333から150、柱穴340から151・152、柱穴341から153～156が出土した。149は土師器皿の底部で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径5.9cmを測る。150は土製煮炊具と思われる。口縁部を内側に少し屈曲させ、端部を上方に少し拡張する。151は土師器皿で、体部が直線的で、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は摩耗のため調整不明である。復元口径12.2cm・復元底径8.0cm・器高3.1cmを測る。152は土師器皿で、体部が直線的で、口縁部を薄く仕上げ、口縁端部を丸くおさめる。復元口径11.6cmを測る。153は瓦質の甕の頸～体部で、体部外面に格子状のタタキを施す。復元頸部径17.4cmを測る。154は羽釜等の土製煮炊具である。口縁部を「く」字状に屈曲し、端部に面をつくり上方に少し拡張する。紀伊型と推定される。復元口径28.7cm・復元頸部径25.2cmを測る。155は土師器皿の口縁部で、端部を丸くおさめる。復元口径12.4cmを測る。156は土師器小皿で、口縁部が直線的で、口縁端部を丸くおさめる。器高1.3cmを測る。

土坑326 157が出土した。157は土師器皿で、体部下半は少し内湾する。底部外面は糸切後にナデを施す。復元底径7.0cmを測る。

土坑329 158～161が出土した。158は須恵器皿で、体部下半は少し内湾する。底部外面は糸切後にナデを施す。復元底径6.5cmを測る。159は東播系須恵器鉢の口縁部で、口縁端部に面をつくり、尖り気味におさめる。160は土師器小皿で、体部下半は内湾する。底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径5.5cmを測る。161は土師器皿で、体部が少し内湾し、薄く仕上げる。口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。口径11.5cm・底径5.9cm・器高3.9cmを測る。

土坑334 162が出土した。162は須恵器甕の頸～体部と推定され、体部外面に横方向の細かいタタキを施す。

土坑344 163が出土した。163は石製の硯である。長さ9.2cm・幅5.3cmを測る。

土坑345 164・165が出土した。164は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。底径5.7cmを測る。165は土師器小皿で、口縁部は直線的で、端部を丸くおさめる。器高1.2cmを測る。

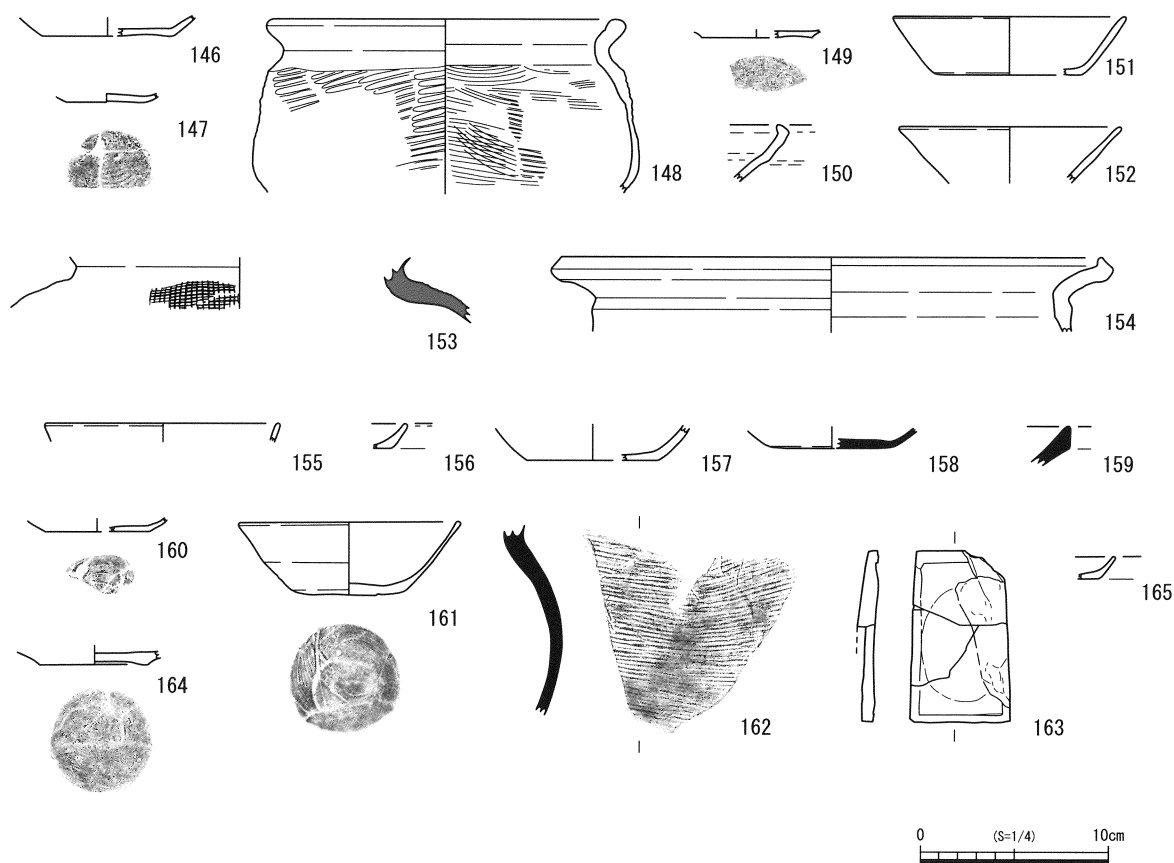


図30 C地区 遺構出土遺物

(2) 包含層出土遺物 (図31・写真図版12・13)

166～191は第1遺構面上の包含層(5～7層)、192～200は第2遺構面上の包含層(13層)出土で、基本的に中世の遺物であるが、180・184～187・193は古代の遺物と思われる。

166は土師器皿である。体部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は糸切後にナデを施す。口径11.8cm・底径6.8cm・器高3.1cmを測る。167は土師器皿である。体部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が薄く残る。復元口径10.9cm・底径6.5cm・器高3.7cmを測る。168は土師器皿である。体部は少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切後の板状痕が残る。復元口径11.0cm・底径6.4cm・器高3.4cmを測る。169は土師器皿である。

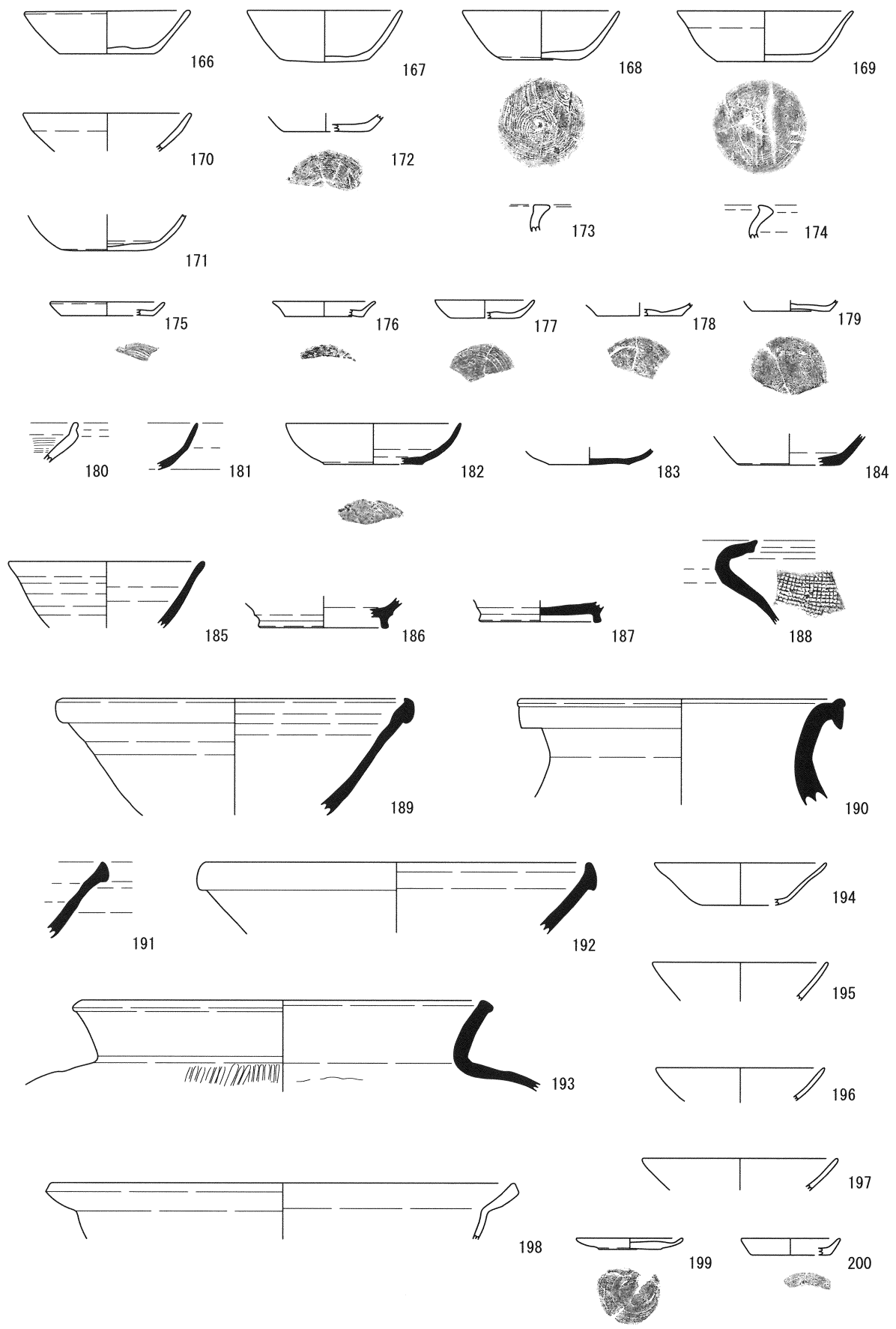


图 31 C地区 包含層出土遺物

0 (S=1/4) 10cm

体部下半は少し内湾し、上半は外反する。口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切後の板状痕が残る。復元口径12.5cm・底径6.8cm・器高3.6cmを測る。170は土師器皿である。体部上半は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径11.8cmを測る。171は土師器皿である。体部は内湾し、底部外面に回転糸切痕が薄く残る。底径6.5cmを測る。172は土師器皿である。体部下半は少し内湾し、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.0cmを測る。173は甕形の土製煮炊具で、口縁端部に面をつくる。174は甕形の土製煮炊具で、口縁部は外反し、端部に面をつくり内側に少し拡張する。175は土師器小皿である。口縁部は少し内湾し、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径8.0cm・復元底径6.5cm・器高1.0cmを測る。176は土師器小皿である。口縁部は外反し、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.3cm・復元底径5.7cm・器高1.1cmを測る。177は土師器小皿である。口縁部は内湾し、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.0cm・復元底径5.0cm・器高1.3cmを測る。178は土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.2cmを測る。179は土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。底径5.5cmを測る。180は土師器鍋の口縁部で、端部を上方に拡張する。181は須恵器皿である。体部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。器高3.3cmを測る。182は須恵器皿である。体部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。口縁部に重ね焼き痕が残る。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径12.4cm・復元底径7.0cm・器高2.9cmを測る。183は須恵器皿である。体部下半は少し内湾し、底部外面は摩耗のため調整不明である。底径5.6cmを測る。184は平底の須恵器坏で、体部下半は直線的である。復元底径7.4cmを測る。185は須恵器坏で、体部が少し内湾し、口縁部は少し外反する。口縁端部を丸くおさめる。復元口径13.8cmを測る。186は須恵器坏の高台部で、復元底径9.0cmを測る。187は須恵器坏の高台部で、底径8.4cmを測る。188は焼成不良の須恵質の甕と思われる。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部に面をつくる。体部外面に格子状のタタキを施す。189は東播系須恵器鉢である。体部下半は内湾し、上半が直線的である。口縁端部を上下に拡張して上方を内側に巻き込むような形態である。復元口径24.4cmを測る。190は常滑焼の甕と推定される。口縁部は外反し、端部に面をつくり上下に拡張する。復元口径22.7cm・復元頸部径18.6cmを測る。191は東播系須恵器鉢で、口縁部は少し外反し、口縁端部を上下に少し拡張する。

192は東播系須恵器鉢である。体部上半は直線的で、口縁端部を上下に拡張し、内側が少し凹む。復元口径27.4cmを測る。193は須恵器甕である。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部に面をつくる。体部外面に縦方向のタタキを施す。復元口径28.4cm・復元頸部径26.2cmを測る。194は土師器皿である。体部は少し外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.2cm・復元底径7.0cm・器高3.0cmを測る。195は土師器皿である。体部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.5cmを測る。196は土師器皿である。体部は少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.0cmを測る。197は土師器皿である。体部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径13.8cmを測る。198は土師器鍋である。外側にひらく体部から口縁部をさらに屈曲させ、口縁端部に面をつくる。復元口径32.8cm・復元頸部径29.3cmを測る。199は土師器小皿である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.6cm・底径4.5cm・器高0.8cmを測る。200は土師器小皿である。口縁部は直線的で、端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径7.0cm・復元底径5.6cm・器高1.2cmを測る。

第4節 D地区

標高は約34m、調査区の面積は約450㎡である。A・C地区とB地区の間に位置し、これらの地区と比べて検出遺構は少ない。

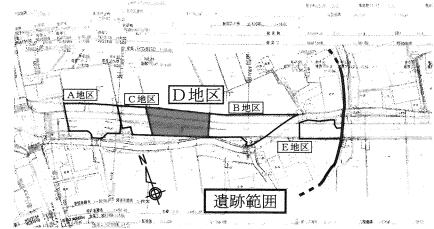


図32 D地区の位置

1. 層序 (図33)

7層はC地区の中世新段階に対応すると推定される包含層で、これが地区全体を広く覆っている。これに対して中世古段階に対応すると推定される包含層8層は、西側の一部にのみ分布する。

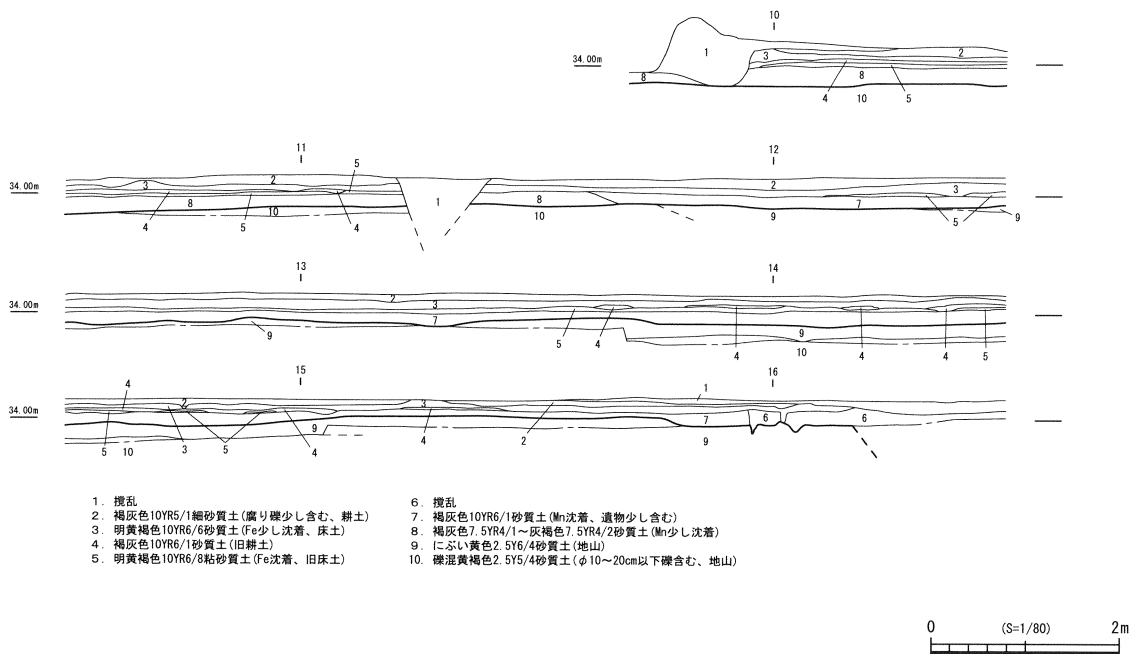
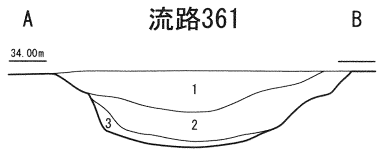


図33 D地区 北壁層序図

2. 遺構 (図34、写真図版5)

検出された遺構群は土色からC地区の中世新段階・古段階に分類が可能である。流路と土坑が検出されたが、建物柱穴は検出できなかった。

流路361 南側が土坑状を呈しており、土坑と切り合っている可能性も考えられる。埋土は中世古段階に対応する。まとまった出土遺物が得られたのは、この遺構のみであった。



1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘砂質土
2. 1 + 黄褐色2.5Y5/3砂質土混じる
3. 褐灰色10YR5/1粘細砂質土 + 黄褐色2.5Y5/3砂質土混じる

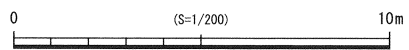
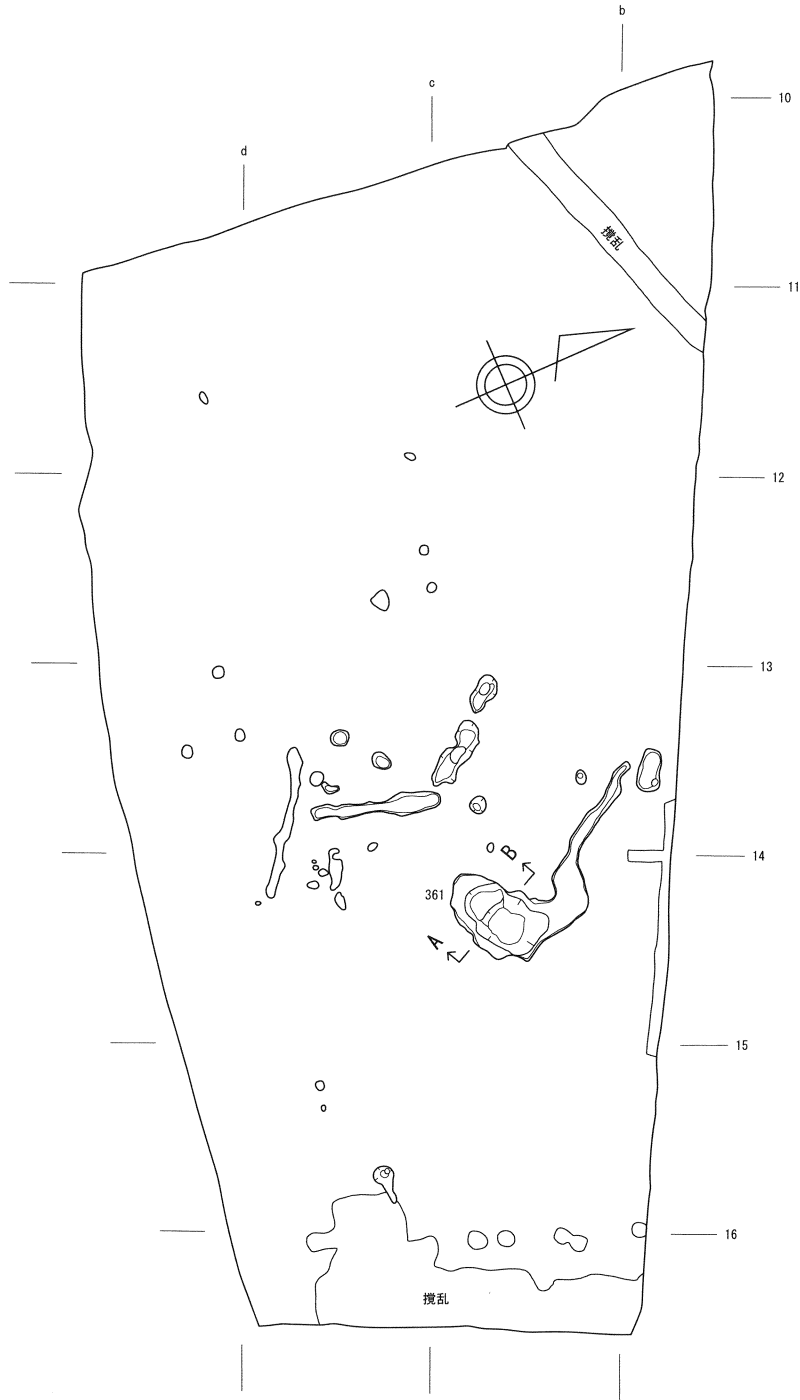
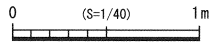


图 34 D地区 平面図・流路 361 層序図

3. 遺物

(1) 遺構出土遺物 (図35・写真図版14)

流路361 201～213が出土した。201は土師器皿である。体部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面は摩耗のため調整不明である。復元口径11.2cm・復元底径6.1cm・器高3.4cmを測る。202は土師器皿である。体部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が薄く残る。復元口径13.3cm・復元底径8.7cm・器高2.8cmを測る。203は土師器皿である。体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.4cmを測る。204は土師器皿である。体部は少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.8cmを測る。205は土師器皿の底部で、外面に回転糸切痕が残る。底径6.8cmを測る。206は土師器皿である。体部下半は直線的で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径6.2cmを測る。207は土師器小皿である。口縁部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は回転糸切痕が残る。復元口径7.3cm・底径5.1cm・器高1.4cmを測る。208は土師器小皿である。口縁部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面は回転糸切痕が残る。復元口径7.7cm・復元底径5.0cm・器高1.0cmを測る。209は土師器小皿である。口縁部は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径6.8cm・底径5.0cm・器高1.0cmを測る。210は土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が薄く残る。底径5.5cmを測る。211は白磁皿である。体部下半は内湾し、復元底径4.1cmを測る。212は東播系須恵器の口縁部で、端部を上下に拡張し、内側が凹む。213は釘で、長さ4.3cmを測る。

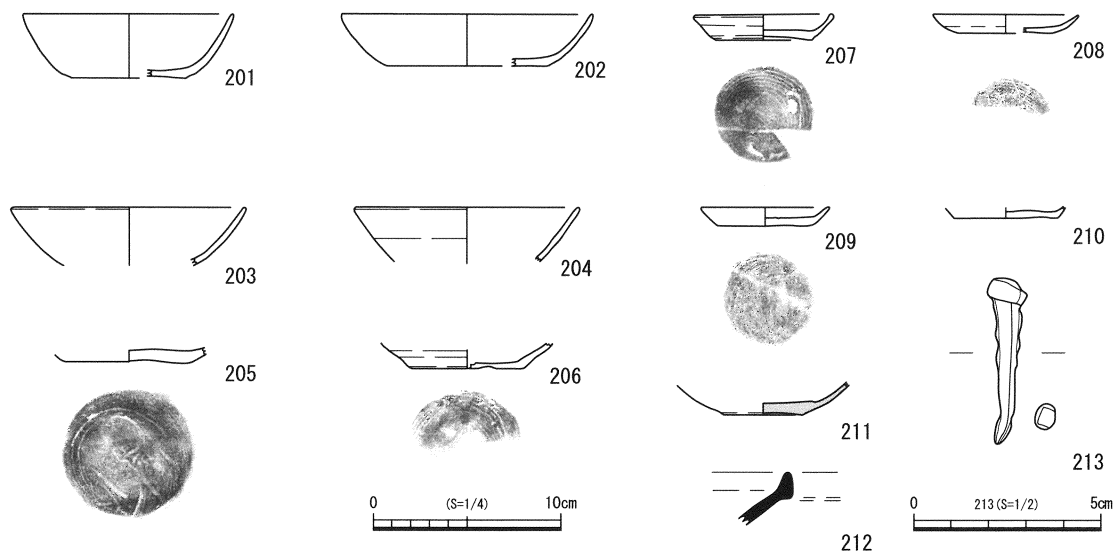


図 35 D地区 遺構出土遺物

(2) 包含層出土遺物 (図36・写真図版14)

基本的に中世の遺物であるが、214は古代の遺物と思われる。

214は土師器小皿である。口縁部は少し内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面に回転ヘラ切痕が残る。復元口径10.3cm・底径8.0cm・器高1.7cmを測る。215は土師器小皿である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面は摩耗のため調整不明である。口径9.0cm・復元底径7.0cm・器高1.4cmを測る。216は土師器小皿である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径9.0cm・復元底径6.4cm・器高1.3cmを測る。217は土師器小皿である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。底部外面に板状痕が残る。復元口径8.5cm・復元底径7.0cm・器高2.0cmを測る。218は常滑焼の甕と推定される。口縁部は外反し、端部に面をつくり上下に拡張する。219は土師器皿である。口縁部は内湾する。底部外面は摩耗のため調整不明である。底径6.2cmを測る。220は東播系須恵器鉢の口縁部で、少し外反する。口縁端部を上下に拡張して上方を内側に巻き込むような形態である。内面が少し凹む。復元口径26.0cmを測る。221は青磁碗の口縁部で、少し内湾し、端部を丸くおさめる。外面に雷文を施す。復元口径13.2cmを測る。222・223は丸瓦で、223は裏面に布状痕が残る。

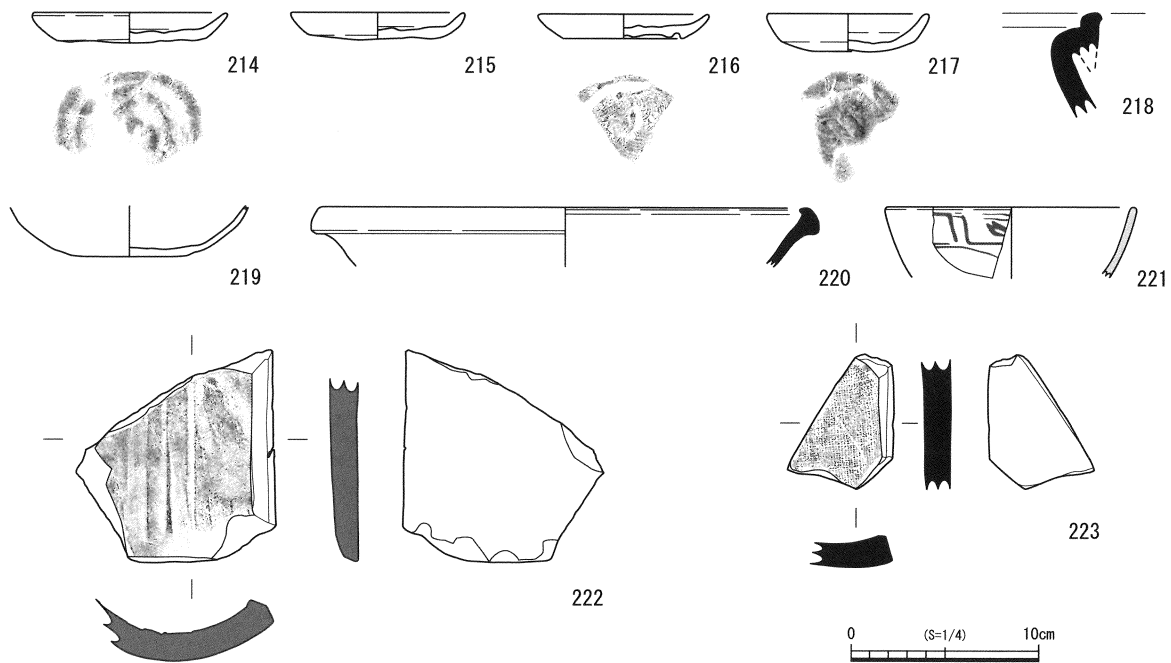


図 36 D地区 包含層出土遺物

第5節 E地区

標高は約35m、調査区の面積は約140㎡で、最も東に位置する調査区である。調査区南側は段丘面で、段丘上は遺跡範囲外となる。中世の掘立柱建物を3棟復元した。

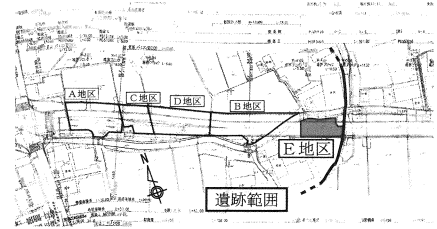


図37 E地区の位置

1. 層序 (図38)

耕地造成の影響を受け、包含層の残りが悪く、8層がわずかに残った包含層と考えられる。14・15層上面で遺構検出を行った。

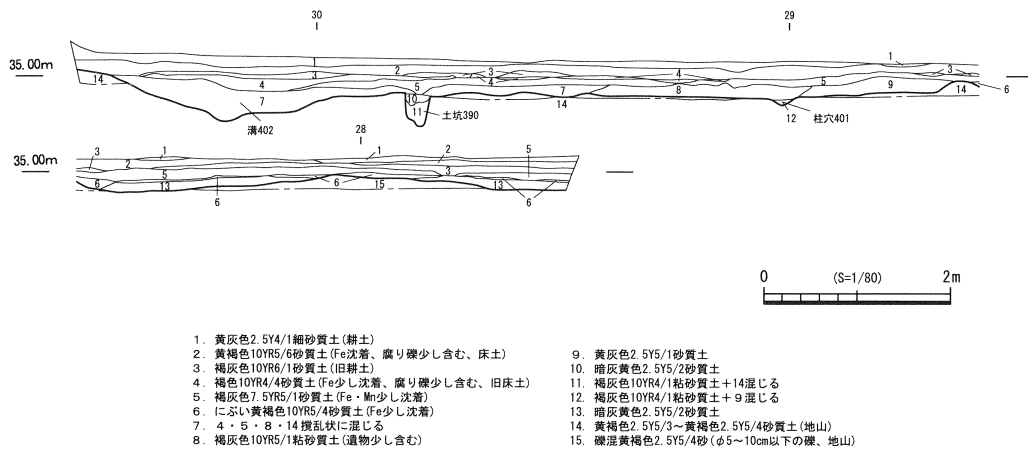


図38 E地区 南壁層序図

2. 遺構 (図39、写真図版5)

調査区の制約のために規模は不明であるが、3棟の掘立柱建物を復元した。柱穴からの出土遺物は無いが、B地区の建物3・7等と比較的方位が似ており、これらと同時期で同じ屋敷地に属する小規模な建物群と推定される。流路402は段丘下に沿って伸びていくことから、水切り等の目的で掘られたと推定される。

建物9・10 (図40) 建て替えが行われたと推定される1×1間の2棟で、切り合いは無く、前後関係は不明である。北側と東側の調査区外に延長する可能性もあるが、東側に段丘面があるために東西2間以上の規模にはならない。共に方位はN78°Wを示す。

建物11 東西1間で調査区外南側に延長する可能性もある。方位はN9°Eを示す。

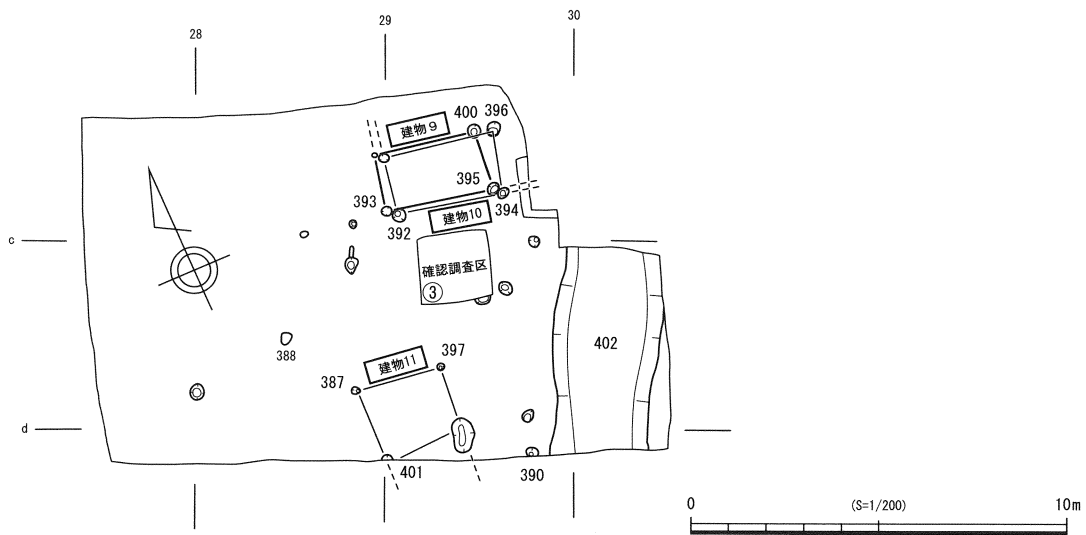
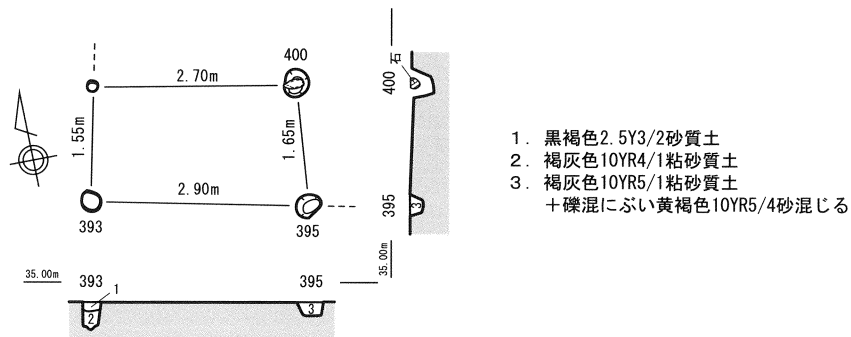
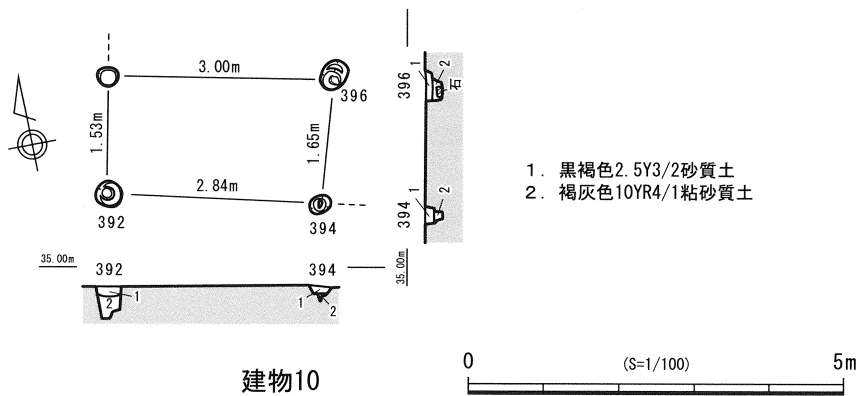


図 39 E地区 平面図



建物 9



建物 10

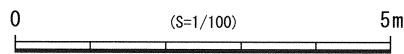


図 40 E地区 建物 9・10 平面・層序図

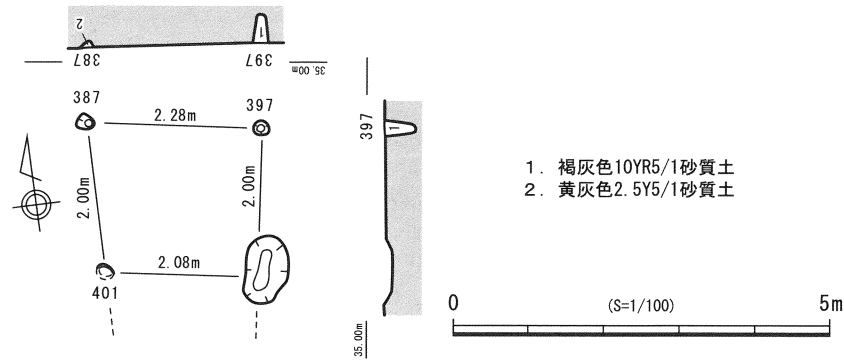


図41 E地区 建物11 平面・層序図

3. 遺物

(1) 遺構出土遺物 (図40・写真図版14)

土坑388 224が出土した。224は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型B系列と推定される。

(2) 包含層出土遺物 (図40・写真図版14)

全て中世の遺物である。

225は羽釜形の土製煮炊具で、播磨型B系列と推定される。226は甕形の土製煮炊具の口縁部で、端部の面はやや丸みを帯びる。227は土師器皿である。体部下半は直線的で、底部外面は糸切後ナデを施したと思われる。復元底径6.7cmを測る。228は蓮弁文の青磁碗の体部で、少し内湾する。

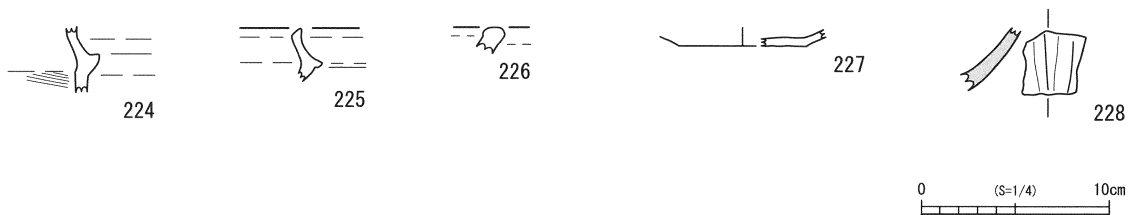


図42 E地区 遺構・包含層出土遺物

第3章の註

- 岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要 第3号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003
- 乗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回 中近世備前焼研究会資料』2000

第4章 総括

第1節 土師器供膳具の分類と時期について

『久保ノカチ遺跡Ⅱ』^(註1)において、淡路島南部出土の中世供膳具についてその形態から a～c 類に分類し、0～4期の時期を設定してその変化を追った。この中で4期については資料不足のため、15世紀末以降として下限を設けていなかった。当調査で15世紀末以降のまとまった資料が得られたため、土師器供膳具をさらに細分し、15世紀末～16世紀初頭を4期、16世紀前葉～後葉を5期、16世紀末～17世紀前葉を6期として変化を追ってみたい^(註2)。また今回は賀集地域の上久保遺跡、久保ノカチ遺跡^(註1・3)・高萩遺跡^(註4)のみに資料を限定する。

a類 b類と同様、体部が内湾する器形であるが、体部内面に段状のナデ痕が見られないこと、赤っぽい発色で焼成が悪いものが多いことが相違点である。c類との相違点は器形のみである。4期以降a類は衰退すると推定されるが、三原平野内で散発的に出土しており^(註5)、完全に消滅する訳ではない。また当調査では流れ込み程度であるところから詳しくは述べないが、土師器皿 a 1 と同様の技法で製作された須恵器皿 a 1 が存在し、2期以降に衰退していく。

1期 当調査で出土した161を新しい資料として加えた。底部は厚く、口縁部を中心に薄く仕上げるのが特徴で、口縁端部を丸くおさめるものと尖り気味におさめるものが見られる。

2期 当調査で出土した7・9・201・202を新しい資料として加えた。a 2 - 5・6は、重根編年ⅣA期^(註6)の備前焼大甕等が共伴する。1期は底部が厚かったが、全体に器壁が薄くなり、口縁端部を尖り気味におさめるものが多くなる。1期から特に口径が大きくなり、体部が開く。

3期 2期より底部が厚くなっており、口径・底径に変化はないが器高が低くなってさらに体部が開く。口縁端部を尖り気味におさめる。

b類 a・c類との大きな違いは、底体部内面に段状のナデ痕が残ることである。正確には、底部内面中心から口縁部に向かって、渦を描きながら^(註7)ロクロナデを行っていく技法により残る痕跡である。a・c類と比べて器壁が薄いものが多いことから、粘土を薄く伸ばしていくための技法と推定される。3期までは体部が内湾し、器壁が非常に薄く、胎土・焼成も良い丁寧なつくりであるが、4期以降は次第に雑なつくりのものが増えていく。

1期 内面に段状のナデ痕が残り、全体を薄く仕上げる。体部は内湾し、口縁部は直口气味で端部を丸くおさめる。

3期 内面に段状のナデ痕が多く残り、全体を薄く仕上げる。体部は緩やかに内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。

4期 B地区土坑44出土90～93をこの時期とした。3期と比べて底部の器壁が厚くなり、焼成が悪くなる。体部はわずかに内湾し、ほとんどが口縁端部を尖り気味におさめる。口径に変化はないが、底径が小さく、器高が低くなるため、より開いた器形となる。b 4 - 5は播磨型羽釜形タイプのⅥ期^(註8)と思われる土製煮炊具が共伴する。

5期 時期のわかる共伴遺物が全く無いが、4期と比べて体部が直線的になり、一部は体部上半が外反する特徴により、4期の次の段階と推定されることから5期とした。4期からの法量的な変化は少なく、ほとんどが口縁端部を尖り気味におさめ、焼成が悪い等、4期と共通

する要素も見られる。B地区土坑164出土111は法量が多いことに加えて、体部内面にb類の特徴である段状ナデが見られるものの、底部内面には段状ナデが見られない。また口縁端部に面をつくり、焼成も良好など、共伴する112とは明らかに違う要素が見られることからb5'とした。

分類	番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量 (cm)			外傾係数	共伴土器・時期*()は法量不明
					口径	底径	器高		
a1	-1	上久保	C地区土坑329	161	11.5	5.9	3.9	1.39	
	-2	久保ノカチ 1~3次	5区SK4	61	11.6	7.2	3.0	1.36	
	-3			62	11.6	6.2	3.0	1.11	
	-4			63	11.5	7.0	3.0	1.33	
				平均値	11.6	6.8	3.0	1.27	
	-5	久保ノカチ 1~3次	8区SK69	112	10.8	7.6	2.7	1.69	c1
	-7	高萩	C-1地区建物1	33	12.0	6.3	3.0	1.05	b1、(c1)
	-8	高萩	C-2地区土坑1	98	12.2	6.5	3.3	1.16	
			平均値	11.6	6.7	3.1	1.30	14C中葉~末	
a2	-1	上久保	A地区土坑232	7	12.6	7.1	3.2	1.16	
	-2	上久保	A地区土坑241	9	11.8	6.6	2.7	1.04	
	-3	上久保	D地区流路361	201	11.2	6.1	3.4	1.33	小皿a2、小皿b2
	-4			202	13.3	8.7	2.8	1.22	
				平均値	12.3	7.4	3.1	1.28	
	-5	久保ノカチ 5次	2地区土坑70・71	48	12.7	7.0	3.0	1.05	(c2)、小皿a2、備前焼大甕14C前葉~15C中葉他
	-6			49	12.6	6.7	3.6	1.22	
	平均値			12.7	6.9	3.3	1.14		
-7	久保ノカチ 5次	4地区遺構84	118	11.8	7.0	3.4	1.42	(c2)	
			平均値	12.3	7.0	3.2	1.21	15C初頭~前葉	
a3	-1	高萩	C-2地区遺構18	93	12.0	7.3	2.4	1.02	b3
	-2			95	11.7	6.7	2.4	0.96	
	-3			97	13.1	7.2	2.1	0.71	
				平均値	12.3	7.1	2.3	0.90	15C中~後葉

表1 土師器皿a類の法量 *網掛けは推定値

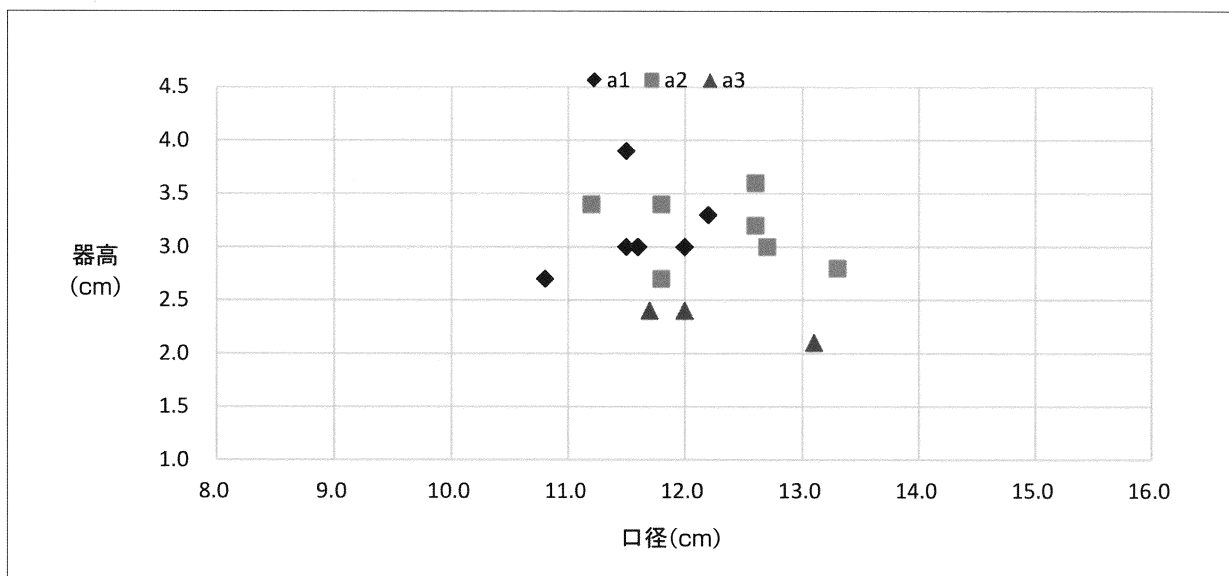


図43 土師器皿a類の法量分布

6期 B地区土坑80出土97・100・101と共伴する96は、格子状タタキを施す土製煮炊具の体部片と思われ、兵庫津遺跡羽釜形皿類（16世紀末葉～17世紀前葉）と推定される。b6-4に共伴する備前焼鉢は兵庫津遺跡Ⅶ～Ⅷ類（16世紀末葉～17世紀初頭頃）と推定される。図面ではわからないが、5期以前では段状であったナデが浅い凹凸に変化しており（註9）、段状ナ

分類	番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量 (cm)			外傾係数	共伴土器・時期*()は法量不明
					口径	底径	器高		
b1	-1	高萩	C-1地区建物1	34	12.6	7.0	2.8	1.00	a1、(c1)
	平均値				12.6	7.0	2.8	1.00	14C中葉～末
b3	-1	高萩	C-2地区遺構18	94	12.3	5.9	2.7	0.84	a3
	-2			96	12.1	6.0	2.6	0.85	
	平均値				12.2	6.0	2.7	0.85	
b4	-1	上久保	B地区土坑44	90	12.1	5.5	2.2	0.67	小皿b4
	-2			91	11.6	5.5	2.2	0.72	
	-3			92	12.6	5.2	2.5	0.68	
	-4			93	12.0	5.4	2.5	0.76	
	平均値				12.1	5.4	2.4	0.71	
	-5	久保ノカチ1～3次	4区SB2	33	11.6	6.0	1.8	0.64	土製煮炊具15C後半～16C初頭
	-6	久保ノカチ1～3次	7区SB2	80	12.2	6.0	2.0	0.65	青磁碗14C初頭～15C前半
平均値				12.0	5.6	2.2	0.68	15C末～16C初頭	
b5'	-1	上久保	B地区土坑164	111	14.2	7.4	2.9	0.85	b5、小皿c5
b5	-1	上久保	B地区土坑164	112	11.9	6.1	2.4	0.83	b5'、小皿c5
	-2	久保ノカチ1～3次	7区P51	86	12.0	6.0	2.2	0.73	
	-3			87	13.2	7.0	2.3	0.74	
	-4			88	12.4	5.6	2.3	0.68	
	-5			89	12.0	6.2	2.1	0.72	
	-6			90	13.0	6.6	2.7	0.84	
	-7			91	12.2	6.0	2.6	0.84	
	平均値				12.5	6.2	2.4	0.76	
平均値				12.4	6.2	2.4	0.77	16C前～後葉	
b6	-1	上久保	B地区土坑80	97	11.0	6.0	2.3	0.92	小皿b6、土製煮炊具16C末～17C前葉
	-2			100	12.6	7.0	2.4	0.86	
	-3			101	10.7	6.2	2.1	0.93	
	平均値				11.4	6.4	2.3	0.90	
	-4	久保ノカチ1～3次	8区SK3	101	11.0	4.9	2.1	0.69	備前焼鉢16C末～17C初頭
平均値				11.3	6.0	2.2	0.85	16C末～17C前葉	

表2 土師器皿b類の法量 *網掛けは推定値

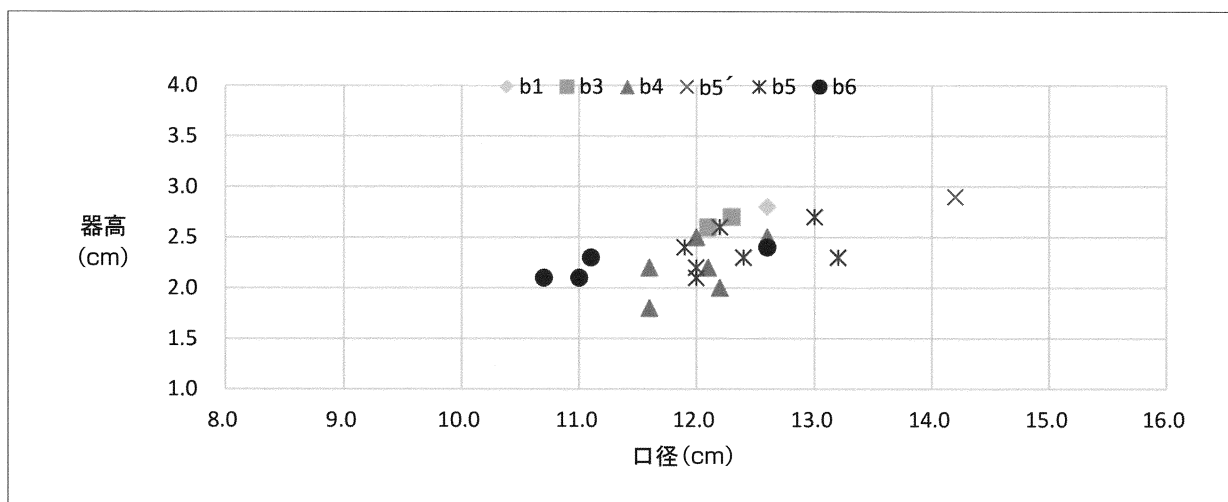


図44 土師器皿b類の法量分布

デの省略化が進む時期と推定され、おそらくこの省略化が原因となってより底部の厚みが増している。b 6 - 1 ~ 3 は焼成が悪いが b 6 - 4 は焼成が良く、前者は口縁端部が尖り気味であるが、後者は面をつくる。また b 6 - 2 は体部が直線的であるが、他は内湾するなど、一律には捉えがたい部分もある。法量的には5期と比べて口径が非常に小さくなっている。見かけの印象が5期と大きく違っているため、この間を埋める段階が存在する可能性も考えられる。

c 類 直線的な体部であること、体部が急角度で立ち上がることが a・b 類と相違点で、古代の坏を継承する器形と言える。それ以外の特徴はほぼ a 類と共通する。中世の初頭は主体となる土師器皿であったが、1期前後に a 類が主体となり、c 類は衰退に向かうと推定される。

1期 口縁端部に強いナデを施すため、体部中位を肥厚したように見える。

2期 当調査で出土した104・151を新しい資料として加えた。1期から2期へ、法量の変化はあまり見られないが、体部中位が肥厚した1期に対して、2期は全体が薄くなるのが大きな特徴である。

土師器小皿は現状では資料不足の観があるが、小皿 a ~ d 類を設定し概観を述べる。1期は個体

分類	番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量 (cm)			外傾係数	共伴土器・時期*()は法量不明
					口径	底径	器高		
c1	-1	久保ノカチ 5次	2地区溝357	24	12.3	6.7	3.8	1.36	須恵器皿a1、小皿1
	-2			25	11.2	6.3	3.7	1.51	
	-3			26	12.3	6.5	3.5	1.21	
	-4			27	11.6	6.6	3.0	1.20	
				平均値	11.9	6.5	3.5	1.32	
	-5	久保ノカチ 1~3次	8区SK69	111	11.6	6.8	2.7	1.13	a1
	平均値			11.8	6.6	3.3	1.28	14C中葉~末	
c2	-1	上久保	B地区土坑85	104	12.0	6.5	3.4	1.24	(a1)
	-2	上久保	C地区建物8	151	12.2	8.0	3.1	1.48	
	-3	久保ノカチ 1~3次	3区SK45	17	11.8	6.8	3.3	1.32	土製煮炊具15C前半~ 16C初頭
		平均値			12.0	7.1	3.3	1.34	15C初頭~前葉

表3 土師器皿c類の法量 *網掛けは推定値

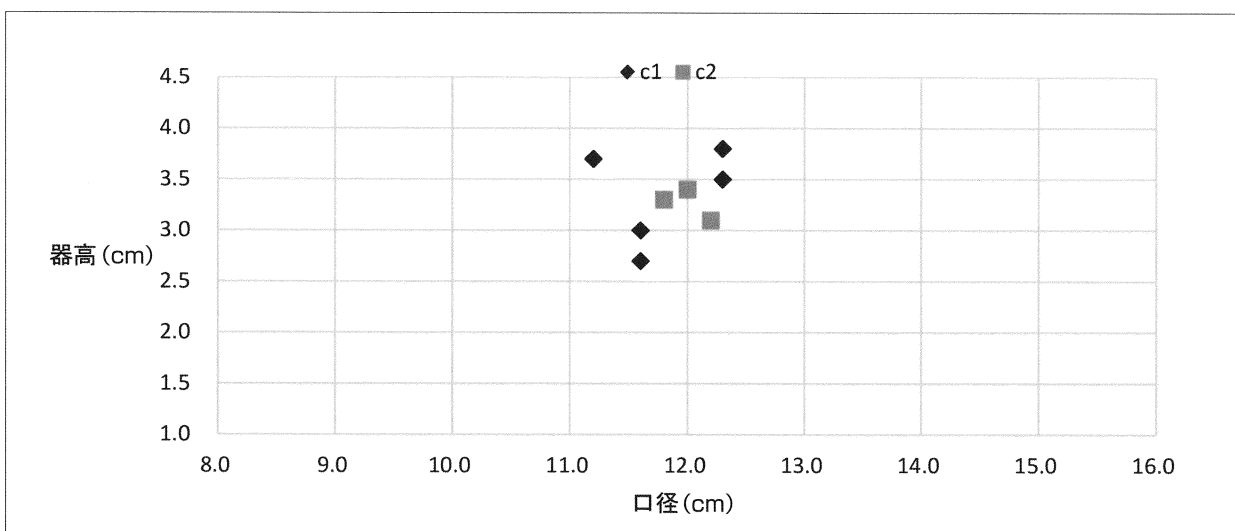


図45 土師器皿c類の法量分布

毎に多様なあり方を示すため分類困難であるが、2期には2種類に分類可能である。小皿a類はb類より器高が高い。また小皿a類は口縁端部を丸くおさめるものが多いが、b類は口縁端部を尖り気味におさめる(註10)。2期以降は小皿b類が主体となって展開すると推定され、6期

分類	番号	遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量 (cm)			外傾係数	相伴土器・時期*(*)は法量不明
					口径	底径	器高		
小皿1	-1	久保ノカチ5次	2地区溝357	28	7.1	5.6	1.2	1.60	須恵器皿a1、c1
	-2			29	7.4	5.3	1.2	1.14	
	-3			30	7.4	5.8	1.3	1.63	
	-4			31	6.9	5.4	1.1	1.47	
				平均値	7.2	5.5	1.2	1.46	
	-5	久保ノカチ5次	2地区溝332	20	7.4	6.0	1.1	1.57	
	-6			21	7.3	5.8	1.4	1.87	
			平均値	7.4	5.9	1.3	1.72		
	-7	久保ノカチ5次	4地区遺構35	111	6.9	5.3	1.1	1.38	a1
	-8			112	7.4	5.3	1.2	1.14	
	平均値			7.2	5.3	1.2	1.26		
		平均値	7.2	5.6	1.2	1.47	14C中葉~末		
小皿a2	-1	上久保	B地区土坑82	102	6.4	4.3	1.3	1.24	(b2)
	-2	上久保	D地区流路361	207	7.3	5.1	1.4	1.27	a2、小皿b2
	-3	久保ノカチ5次	2地区土坑70・71	53	7.1	4.7	1.7	1.42	a2、(c2)
		平均値	6.9	4.7	1.5	1.31	15C初頭~前葉		
小皿b2	-1	上久保	D地区流路361	208	7.7	5.0	1.0	0.74	a2、小皿a2
	-2			209	6.8	5.0	1.0	1.11	
				平均値	7.3	5.0	1.0	0.93	
	-3	高萩	C-2地区流路38	105	6.2	5.0	1.0	1.67	土製煮炊具15C前半
	-4			106	6.2	4.9	1.0	1.54	
			平均値	6.2	5.0	1.0	1.60		
-5	久保ノカチ5次	2地区柵列2	18	6.1	5.2	0.9	2.00		
		平均値	6.6	5.0	1.0	1.41	15C初頭~前葉		
小皿b4	-1	上久保	B地区土坑44	88	6.2	5.0	0.8	1.33	15C末~16C初頭、b4
小皿c5	-1	上久保	B地区土坑164	113	5.6	4.2	1.1	1.57	16C前~後葉、b5、b5
小皿a6	-1	上久保	B地区建物4	63	7.3	5.7	1.5	1.88	16C末~17C前葉、小皿b6・d6
小皿b6	-1	上久保	B地区建物4	59	6.2	5.0	0.9	1.50	小皿a6・d6
	-2			62	6.8	5.1	0.9	1.06	
	-3			65	6.0	5.2	0.9	2.25	
				平均値	6.3	5.1	0.9	1.60	
	-4	上久保	B地区土坑80	98	7.2	5.1	1.0	0.95	b6、土製煮炊具16C末~17C前葉
		平均値	6.6	5.1	0.9	1.44	16C末~17C前葉		
小皿d6	-1	上久保	B地区建物4	61	9.5	5.3	2.1	1.00	16C末~17C前葉、小皿a6・b6

表4 土師器小皿の法量 *網掛けは推定値を示す

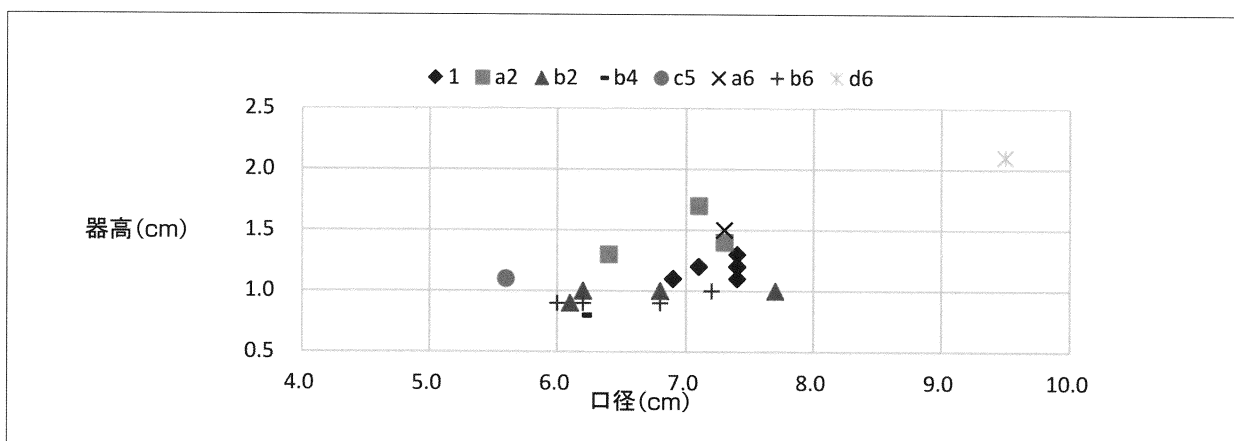


図46 土師器小皿の法量分布

になるとやや厚ぼったい雑な印象のものが増える。少数派として、5期には口縁端部を玉縁状に肥圧させる小型のc類(註11)、6期には小皿a類よりもさらに大型で口縁端部を尖り気味におさめるd類が設定できる。小皿に関しては、地域を限定すると資料不足となるため、将来的には他地域の資料を交えて再考を行う必要がある。

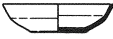
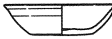
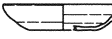
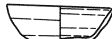


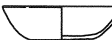



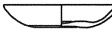
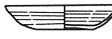


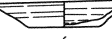
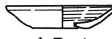





		須恵器皿 a類	土師器皿 a類	土師器皿 b類	土師器皿 c類	土師器小皿
1	14c 中葉 〜 末		 a1-8	 b1-1	 c1-2	 小皿1-1  小皿1-8
2	15c 初頭 〜 前葉		 a2-6		 c2-1	 小皿a2-3  小皿b2-5
3	15c 中 〜 後葉		 a3-1	 b3-2		
4	15c 末 〜 16c 初頭			 b4-1		 小皿b4-1
5	16c 前葉 〜 後葉			 b5'-1  b5-1		 小皿c5-1
6	16c 末 〜 17c 前葉			 b6-4		 小皿a6-1  小皿b6-2  小皿d6-1

図 47 賀集地域の中世供膳具 (S=1/8)

第2節 中世遺構の年代と変遷について

第3章で述べたように、C地区では中世の遺構面を2面検出することができ、その成果からA地区についても遺構埋土から中世古段階・新段階に分けることができた。B地区については遺構出土遺物から古段階と新段階に分けることができた。これまでの成果を表5にまとめておく。

最初に中世古段階と新年代の実年代について検討を行いたい。まず中世古段階であるが、当遺跡では遺構・包含層共に瓦器碗が出土していないことから、14世紀以降と考えて間違いはない。前節で述べたように出土土師器皿について、C地区の建物8柱穴出土土師器皿151はc 2、土坑329出土土師器皿161はa 1、A地区の土坑207出土土師器皿3はa 1、土坑232出土土師器皿7はa 2、土坑241から出土した9はa 2と推定される。中世古段階については14世紀中葉から15世紀前葉頃と推定される。

次に中世新段階であるが、比較的残りの良い土製煮炊具について註8を参考とすると、C地区土坑314出土148は播丹型甕形タイプV類（15世紀後半～16世紀初頭頃）^(註8)、B地区土坑19出土87、B地区土坑188出土116は播磨型羽釜形タイプB系列I B～I C類（15世紀中～16世紀初頭頃）、B地区土坑80出土96は羽釜形皿類（16世紀末葉から17世紀前葉）と推定される。したがって中世新段階は15世紀中葉から17世紀前葉頃、一部近代にまたがる年代と推定される。

	中世古段階	中世新段階
A地区	建物1、土坑207(2～4)、土坑232(7)、土坑241(8・9)、土坑285(20)	建物2(1)、土坑209(5・6)、土坑243(10)、土坑271、土坑272(16)、溝291(21～23)
B地区	土坑82(102・103)、土坑85(104)	建物3(51～57・119)、建物4(58～70・120・121)、流路1(71～79)、流路7(80～82・122)、流路10(83～85)、流路11(86)、土坑19(87)、土坑44(88～93)、土坑77(94)、土坑80(95～101)、土坑101(105・118)、土坑109(106)、土坑123(107)、土坑150(108)、土坑162(109・110)、土坑164(111～113)、土坑169(114)、土坑188(115・116)
C地区	建物8(149～156)、土坑326(157)、土坑329(158～161)、土坑334(162)、土坑344(163)、土坑345(164・165)	土坑305(146・147)、土坑314(148)
D地区	流路361(201～213)	
E地区		土坑388(224)

表5 中世古段階・新段階の遺構と出土遺物

次に建物を中心にさらに詳細な年代の検討を行いたい。第3章で述べたように建物3と土坑44、建物5と土坑164、建物4と土坑80は関連のある遺構と考えられる。土師器供膳具について、土坑44から4期、土坑164から5期、土坑80から6期の土師器皿がまとまって出土している。建物3柱穴の土師器皿53・54・57等、3期が多く含まれるが、56がb 4であることから、土坑44と同じ4期と考えられる。建物5と建物4は良好な出土遺物が無いが、前者が土坑164と同じ5期、後者が土坑80と同じ6期の可能性が高いと考えられる。

次に建物の方位から考察を行う。2期のC地区建物8と4期のB地区建物3は同じような方位を示すことから、2～4期にかけて同じような方位で建物が建てられたのではないと思われる。B地区建物7とB地区に隣接するE地区の建物9～11についても同じような方位を示すため、この時期に含まれると考えられる。古段階のA地区建物1、B地区建物6とは比較的方位が似ているが、2期の建物8とは全く方位が違ふことから、前者が先行する建物群と推定される。A地区建物2はB地区建物4と同じような方位を示し6期と推定する。これらを表2にまとめる。

1～2期	2期	2～4期
14世紀中葉～15世紀前葉	15世紀初頭～前葉	15世紀初頭～16世紀初頭
建物1 (N40°E) 建物6 (N57°W)	建物8 (N9°E)	建物7 (N6°E) 建物9 (N78°W) 建物10 (N78°W) 建物11 (N9°E)
4期	5期	6期
15世紀末～16世紀初頭	16世紀前～後葉	16世紀末～17世紀前葉
建物3 (N11°E) = 土坑44	建物5 (N69°W) = 土坑164	建物4 (N90°W) = 土坑80 建物2 (N87°W)

表6 建物群の変遷

第3節 大型建物と祭祀土坑の性格について

まず規模の大きな建物3・4について、その性格の検討を行いたい。谷町筋遺跡では郷村指導者層(有力名主や侍衆)、高萩・久保ノカチ(5次)遺跡では国人級の住居と推定した大型建物に共通する要素として、①母屋部分の床面積で約25㎡以上、総床面積45㎡以上の規模、②3面ないし4面の廂を備え、孫廂を備えるものもある、③母屋部分が総柱構造を備える割合が高い、という3点を註1で指摘したが、当遺跡の建物3・4もこれらの要素を過不足なく備えており、国人級の住居と推定される。

当遺跡が位置する賀集野田に関する中世の文献資料としては、護国寺文書(註12)の文明2(1470)年の結番定書に割り当てとして、「高萩村」「野田村」の「下総殿」「正木殿」が記載されている。これらの人物の詳細は不明であるが、建物3が文書に近い時期(15世紀末～16世紀初頭)であることから、屋敷主の有力候補と考えることができる。細川氏の滅亡により戦国時代に否応なく巻き込まれることとなった淡路島において、没落していく国人も多かったに違いないが、建物4は三原平野内でも突出した規模を備えており、逆に勢力拡大に成功したと思われるこの一族の屋敷主とはいったいどのような人物なのか非常に興味深い。

次に祭祀土坑44・80・164の性格について考えてみたい。建物柱穴に似た規模の小土坑であるが、建物を構成する柱穴の一部では無い。土坑44は建物3の母屋部分北東、土坑80は建物4の母屋部分北東、土坑164は建物外であるが建物5の北東に位置し、これらの建物と関わりをもつ祭祀遺構の可能性が高い。土坑44と建物3柱穴の出土遺物には同時期のものが含まれ、土坑の掘削時期は建物の建築前か存続時と推定される。出土遺物としては、完形に近い土師器供膳具が複数出土し、土坑44・164は土師器供膳具のみであるが、土坑80は瓦質・土師質の煮炊具が共伴する。遺物は無造作に埋め戻された印象である。後述するB型との比較により、A①供膳具は積み重ねた状態でなく、ばらばらの状態で埋められている、A②銅銭を伴わない、A③小規模な土坑であるが深く掘削されている、A④建物とほぼ同時期で建物の北東に位置する、の4点にまとめることができる。これと同じような特徴を示すのが、表8の9で、④に不確定要素が存在するが①～③の特徴は共通する。これら4例を祭祀遺構A型と仮称する。

上の4例に対して表8の4・10・14・16は、B①法量を揃えた供膳具が積み重ねられている、B②銅銭を伴う、B③浅い土坑か、掘り方を伴わない、B④建物との位置関係が事例毎に違う、というようにA①～④とは極めて対称的で、A型とは祭祀の対象・性格が全く違っていると推定され、これを祭祀遺構B型と仮称する。

A型とB型の祭祀の性格について検討する前に、祭祀の性格が明確なC型として表8の5・6を先に説明したい。これらは建物廃絶後の廃棄土坑で、廃棄の過程で祭祀を行ったと推定され、5は銅銭のみ、6は供膳具のみで、廃棄物とともに無造作に埋められ、廃棄物を埋めるために大型の土坑が掘られている。供膳具が破片で必ずしも祭祀が行われたとは言えないことから表8には入っていないが、当遺跡のB地区土坑101や久保ノカチ遺跡1～3次調査の3区P16等も、大甕の破片が出土しており、廃棄物処理のための土坑と考えられる。

遺 跡	遺 構	母屋（上屋）部分				廂（下屋）部分		総床面積 (㎡)	柱構造	方位 (磁北基準 のものは西 偏7°とし て座標北に 修正)	時 期
		梁 間		桁 行		床面積 (㎡)	床面積 (㎡)				
		規模 (m)	間数	規模 (m)	間数						
上久保	建物2	3.6	2	5.1	3	19.7	12.0(4面?)	31.7	総柱	N87° W	6期
	建物3	4.4	2	7.0	3	29.9	26.4(4面+孫)	56.3	総柱	N11° E	4期
	建物4	5.0	2	9.1	3	49.7	39.5(4面+孫)	89.2	総柱	N90° W	6期
	建物5	3.4	2	5.5	3	18.7	0	18.7	側柱	N69° W	5期
	建物6	1.6	1	5.2	3	8.5	0	8.5	側柱	N57° W	1～2期
	建物8	5.5	3	6.4	3	35.7	0	35.7	側柱	N9° E	2期
久保ノカチ 5次	建物1	3.1	1	4.2	2	13.1	17.6(2面)	30.7	側柱	N74° W	1～2期
	建物2	3.0	1	4.2	2	13.1	19.9(2面)	33.0	側柱	N80° W	1～2期
	建物3	3.3	1	3.6	2	11.8	9.4(2面)	21.2	側柱	N1° W	2～3期
	建物4	4.8	2	6.3	3	30.8	23.2(3面)	54.0	総柱	N88° W	1期
	建物5	4.3	2	6.4	3	27.0	20.1(3面)	47.1	総柱	N88° W	2期
	建物6	3.3	2	4.2	3	14.4	0	14.4	側柱	N86° E	3期
	建物7	3.1	2	5.8	3	17.7	3.0(1面)	20.7	側柱	N87° E	3期
	建物8	2.2	1	5.3	3	12.1	0	12.1	側柱	N11° W	3～4期
久保ノカチ 1～3次	3区SB1	3.3	1	5.9	2	19.5	0	19.5	側柱	N8° E	0～1期
	4区SB2	3.5	2	3.7	2	13.0	0	13.0	総柱	N47° W	4期
	4区SB3	3.5	2	7.2	4	24.8	0	24.8	側柱	N44° W	4期以降
	5区SB1	3.0	1	5.4	3	15.8	1.5(1面)	17.3	側柱	N14° E	1期
高萩	建物1	4.8	2	6.7	3	33.5	31.9(4面+孫)	65.4	総柱	N12° W	1期
	建物2	3.7	2	5.6	4	20.4	0	20.4	一部総柱	N69° E	2期
	建物3	5.1	2	5.9	3	31.1	17.4(3面)	48.5	側柱	N27° E	3期
	建物4	3.4	2	4.5	2	15.4	0	15.4	側柱	N60° W	2期

表7 中世建物の規模

15世紀以降の事例に関しては、8を残して(註13) A～C型として分類が可能である。14世紀以前の事例に関しては一例毎に全く違った状況を示し、現在の資料のみで分類は不可能である(註14)。逆説的な言い方であるが、14世紀頃までは多様であった祭祀の対象・性格とそれらに応じた方法が、15世紀以降になるとしだいに淘汰され、類型化していくことを示しているのではないだろうか。

次にB型が何の祭祀に伴うものか検討したい。B①を補足すると、4は正置、10・16は倒置で、16はさらに3山に分かれ、出土状況は一律ではないものの、積み重ねが可能ないように法量を揃え、特に4はわざわざa類とb類という2つのタイプの皿を互い違いに積み重ねており、さらに4・10は一枚ずつ銅銭を乗せた皿を積み重ねており、積み重ねていく行為自体に重要な意味があることはまず間違いない。さらにB③を補足すると、10は浅い土坑を伴うが、4・14・16は包含層からの検出で、掘削土坑を伴わない事例が多く、後者について屋敷地の盛土整地の際に地鎮祭が行われた可能性が高いと考えられる。A④とB④の違いも、祭祀の対象が建物か屋敷地かの違いに起因すると考えると理解がしやすい。ただしこの場合、祭祀遺物は必ず建物に先行する時期でなければならないが、この4例について前後関係は明らかとなっておらず、今後この確認作業が必要であろう。

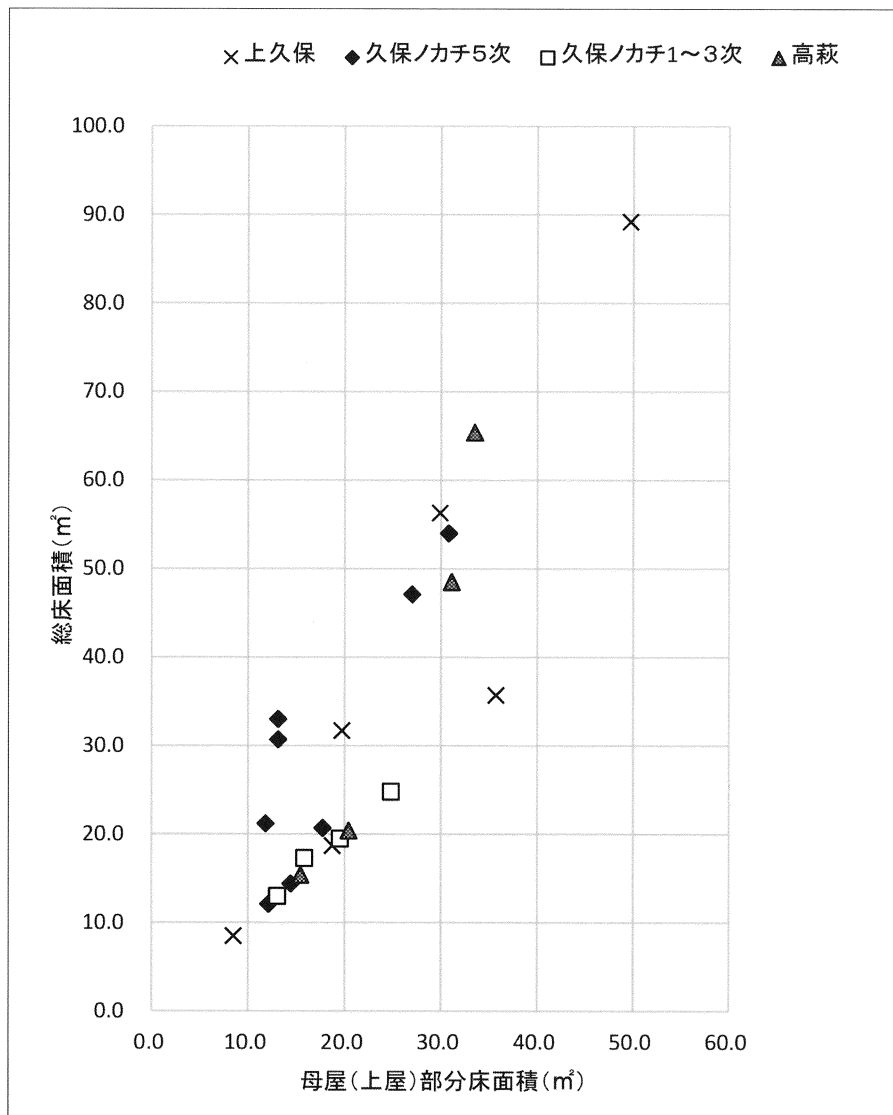


図 48 中世建物の床面積分布

A型が上述のようにB型と祭祀の対象・性格が違う、すなわち地鎮祭祀ではないとしたらどのような祭祀が考えられるか、その判断材料として着目すべき点は、建物における土坑の位置と考えられる。当遺跡ではすべて建物北東に位置するが、これは現在の家相でもよく言われるように鬼門(丑寅)の方角である。民間信仰として、家相や金神信仰が広まっていくのは江戸時代も半ばを過ぎてからだと言われていることから時代的にやや問題があるかもしれないが、一つの考え方として提示しておきたい。

もう一つの考え方としては、土坑80は煮炊具が相伴していることから、火を扱う施設に関連して祭祀が行われた可能性も否定できない。久保ノカチ遺跡1～3次調査5区のSB1内北東に位置する土坑SK9は、石で平坦面をつくり、同じ土坑内に炭化物が集中する窪みが見られることから、土間構造でかつ火を扱う施設が存在したと考えられる。C型として取り上げた表8の5についても、建物北西側の1間分にあわせたような形状の土坑で、炭化物・焼土・被熱した礫が出土していることから、そこにあった火を扱う施設に関係して廃棄を行った可能性が高いと考えられる。建物構造の詳細な説明はここでは省略するが、これらの桁行3間の建物について、久保ノカチ遺跡SB1は北側1間分、高萩遺跡建物1、当遺跡建物3は北東・北西側2間分、当遺跡建物4は北東・南東側2間分が土間構造で、竈等の火を扱う施設が存在したと推定され、竈神や荒神等の火に関係する神に対して祭祀を行った可能性も考えておきたい。

遺跡・調査	地区・遺構	遺構の規模(長辺×短辺×深さ)・平面形状	建物との位置と前後関係	出土遺物・確認数量	遺物出土状況	時期	文献	
1	上久保	B地区土坑44	40×36×47cm・円形	建物3内北東・出土遺物ほぼ同時期	土師器皿5・土師器小皿1	土坑底付近でばらばらに出土。	15C末～16C初	
2	上久保	B地区土坑80	35×28×45cm・楕円形	建物4内北東・出土遺物ほぼ同時期	土師器皿4・土師器小皿1	土坑上下からばらばらに出土。	16C末～17C前葉	
3	上久保	B地区土坑164	35×30×31cm・円形	建物5外北東・前後関係不明	土師器皿2・土師器小皿1・柱状の石	土坑上下からばらばらに出土。	16C前～後葉	
4	高萩	C-2地区遺構18	包含層中で掘り方未検出	建物3内北・建物より先行か同時期	土師器皿5、銅銭6	銅銭を乗せた皿を正置で積み重ねる。	15C中～後葉	註4
5	高萩	C-1地区土坑15	2.0×2.5×0.5m・隅丸方形	建物1内北西・土坑が柱穴を切り、建物廃絶後掘削	焼土と被熱した礫多数、銅銭2	最下層から銅銭出土。	15C初～前葉	註4
6	久保ノカチ5次	2区土坑70・71	1.9×1.5×0.3m・不定形	建物4・5内中央・土坑が柱穴を切り、建物廃絶後掘削	土師器皿4、土師器小皿2、備前焼大甕5、須恵質大甕1、須恵器鉢1、石製硯1、鉄製釘2	大甕は破片化される。	15C初頭～前葉	註1
7	久保ノカチ1～3次	5区SK4	2.0×1.5×0.18m・不定形	SB1建物外東・出土遺物ほぼ同時期?	土師器皿5、須恵器皿1	ばらばらに出土する。	14C中葉～末	註3
8	久保ノカチ1～3次	7区SK44	1.1×0.8×0.17m・楕円形	SB2の柱穴と切り合う、出土遺物建物より後出?	土師器皿2	ばらばらに出土する。	16C前～後葉	註3
9	久保ノカチ1～3次	7区P51	45×45×50cm・円形	SB2内、出土遺物建物より後出?	土師器皿6	土坑底付近でばらばらに出土する。	16C前～後葉	註3
10	後山	SK5	50×26×16cm・楕円形	SB2外南西・前後関係不明	土師器皿17、銅銭4	倒置で重なり合う、皿と皿の間から銅銭出土。	15C末～16C	註15
11	九蔵2次	C-1地区遺構23	包含層中で掘り方未検出	周辺に建物無し	土師器小皿8	正置で積み重ねる。	12C後～13C前半	註16
12	九蔵遺跡(県調査)	2区P70	25×23×10cm・円形	SB10建物外北西・建物より後出	土師器坏1、銅銭3	正置の坏に銅銭を置く。	12C	註17
13	九蔵遺跡(県調査)	2区P71	19×16×10cm・楕円形	SB09建物内北東・前後関係不明	土師器坏2、銅銭5	坏を身と蓋のように合わせて、身に銅銭を置く。	12C	註17
14	おのころ島5次調査	A地区遺構77	包含層中で掘り方未検出	SB02内南東・ほぼ同時期	土師器皿4、土師器小皿2、銅銭9	積み重ねて押しつぶされたような状況で、祭祀当時の状況ではない?	15C末～16C	註18
15	幡多(野水地区)3次	E地区SK78	31×28×23cm・円形	建物4外南東・出土遺物建物に先行する時期	須恵器坏20	積み重ねる。	9C中頃	註15
16	外かち1次	確認No.5	掘り方未検出	確認調査のため不明	土師器皿6、銅銭5	伏せて3つの山に分かれ、銅銭は皿の間から出土する。	15C中葉以降	註15
17	生ヶ坂2次	土坑1	92×43×24cm・楕円形	周囲に建物無し	土師器皿18	積み重ねず、並べて置く。正置9・倒置7・不明2。	14C	註18
18	海棠子2次	D地区包含層	掘り方未検出	周囲に建物は無いが柵列あり	土師器小皿5、銅銭4	正置で銅銭を置き、積み重ねない。	13C	註18

表8 祭祀関係遺構一覧

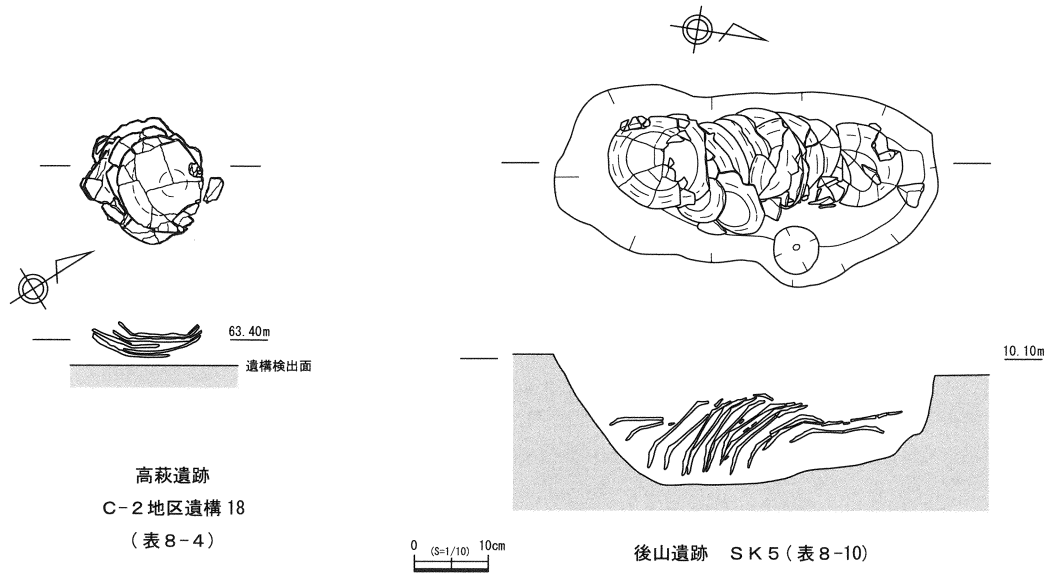
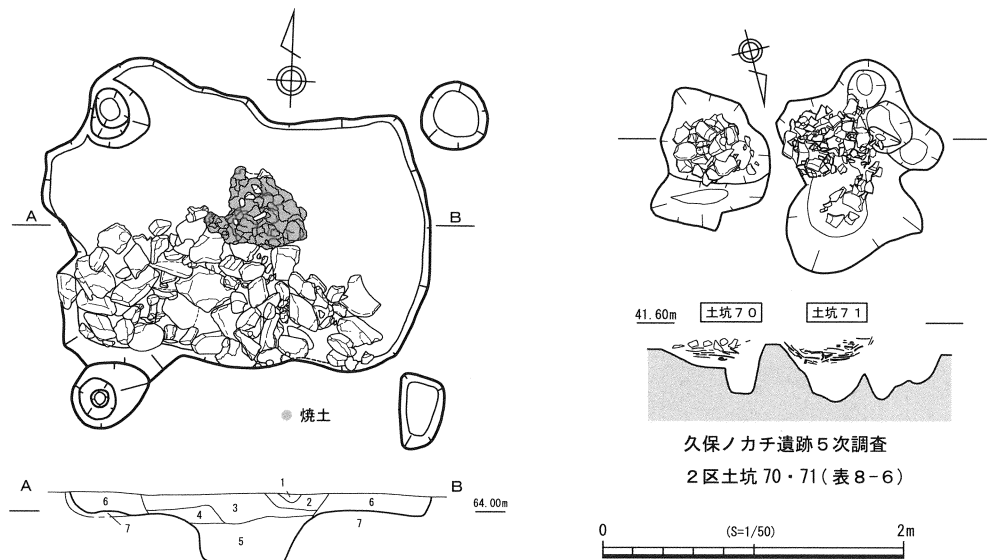


図 49 祭祀遺構 B 型



- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1 5Y4/1 灰色粘細砂質土 (炭含む) | 5 2.5Y4/1 黄灰色粘砂質土 (Mn沈着、腐り礫含む) |
| 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘砂質土 (Mn沈着、炭含む) | 6 2.5Y5/2 暗灰黄色礫混粘細砂質土 (2~5cm大の礫、焼土少し含む) |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色粘砂質土 (Mn沈着、焼土多く含む、炭含む) | 7 10YR5/6 黄褐色粘細砂質土 (Mn沈着) |
| 4 2.5Y5/1 黄灰色礫混粘細砂質土 (5~10cm大の礫) | |

高萩遺跡 C-1 地区土坑 15 (表 8-5)

図 50 祭祀遺構 C 型

第4章の註

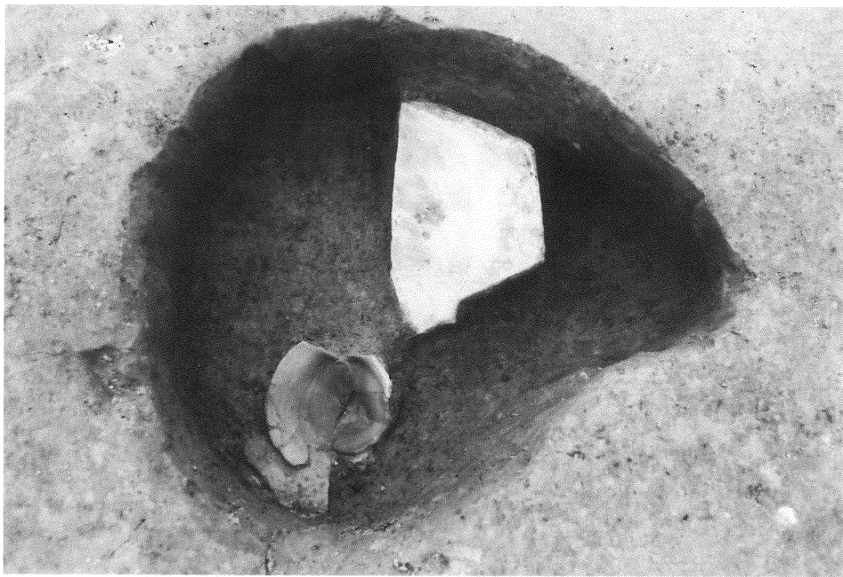
1. 『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2014
2. a～c類および1～3期については註1からの変更は無い。
3. 『久保ノカチ遺跡』南あわじ市教育委員会2012
4. 『高萩遺跡』南あわじ市教育委員会2011
5. おのころ島遺跡5次調査（遺構77）で出土が確認できる。
6. 重根弘和「中世の備前焼」『備前焼研究最前線Ⅱ』備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会2005
7. 現在確認できているものは中心から左回りに渦が広がっていく。
8. 『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会2004
9. b6-4は註1でa類としていたが、本文の特徴から今回b類に変更している。
10. 註1で2期に口径の大きなタイプ・口径の小さなタイプに分類したが、前者が小皿a類、後者が小皿b類に該当する。
11. 当遺跡以外では、松帆西路の後山遺跡の遺構183で出土が確認できる。
12. 中野栄夫編『護国寺誌』護国寺住職 三富義円1996
13. 表8の8は大型の土坑であることを除いてA型に近いように思われるが、近接する表8の9がA型と推定されることから、祭祀目的が違ふと考えられる。また建物柱穴と切り合いがあり、建物とは時期が違ふ。
14. 供膳具の置き方だけを取り上げても、表8の13・17・18のようにA～C型にない特徴を示すものが存在する。
15. 『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』三原郡広域事務組合2001
16. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』南あわじ市教育委員会2009
17. 『九蔵遺跡』兵庫県教育委員会2015
18. 『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』南あわじ市教育委員会2008

報告書抄録

ふりがな	かみくぼいせき							
書名	上久保遺跡							
副書名	市道野田牛内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	南あわじ市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	山崎裕司							
編集機関	南あわじ市埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛1100 TEL0799-42-3849							
発行機関	南あわじ市教育委員会							
所在地	〒656-0472 兵庫県南あわじ市市善光寺22番地1 TEL0799-43-5232							
発行年月日	平成28(2016)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみくぼいせき 上久保遺跡	兵庫県 南あわじ市 賀集野田	28224	970059	34度 16分 7秒	134度 45分 31秒	平成14年10月31日 ～平成20年1月5日	1,776㎡	市道野田牛内線 道路改良事業に 伴う
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
かみくぼいせき 上久保遺跡	集落跡	室町時代・鎌倉時代 平安時代・弥生時代		掘立柱建物 土坑・溝		土師器・須恵器・瓦質土器 陶磁器・黒色土器・弥生土器 瓦・土錘・鉄製品・石製品・古銭		



調査地近景（東より）



A地区 土坑232
遺物出土状況（東より）



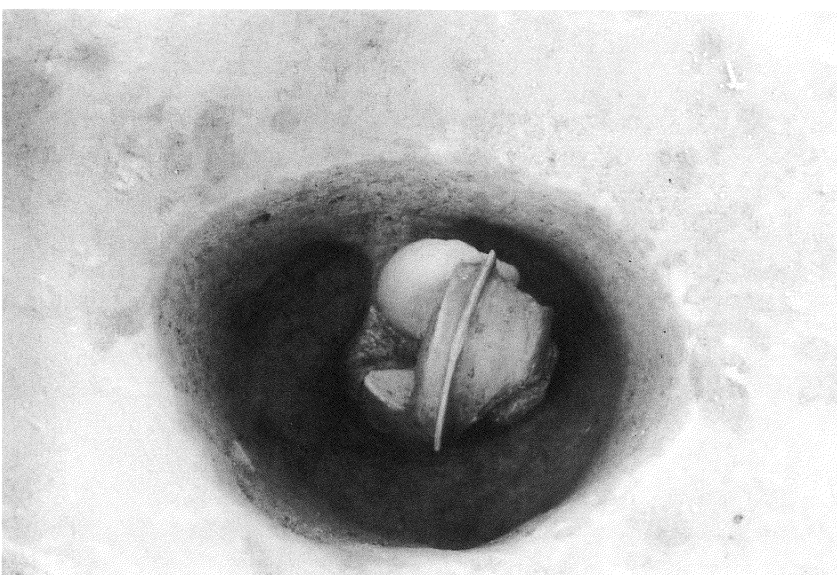
A地区 第1遺構面
全景（西より）



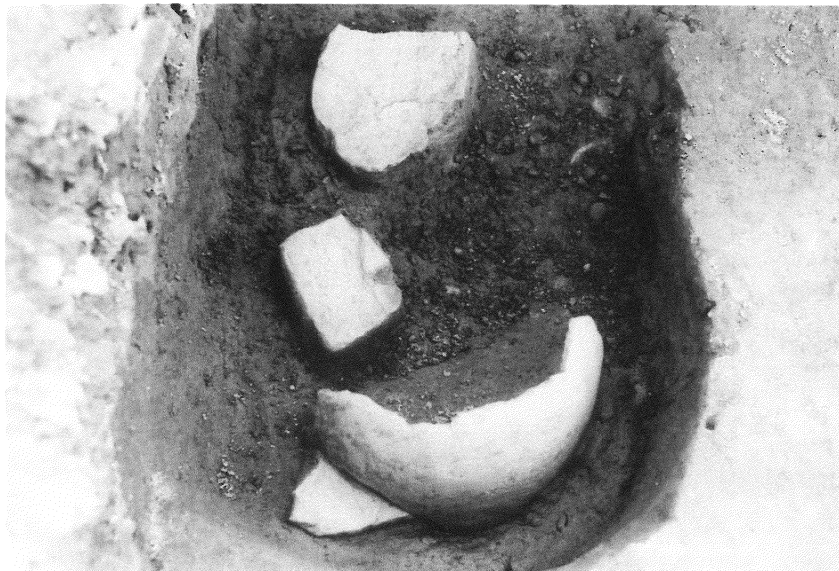
A地区 第2遺構面
全景（西より）



B地区 土坑44
遺物出土状況（南東より）



B地区 土坑80
遺物出土状況（北より）



B地区 土坑101
遺物出土状況（西より）



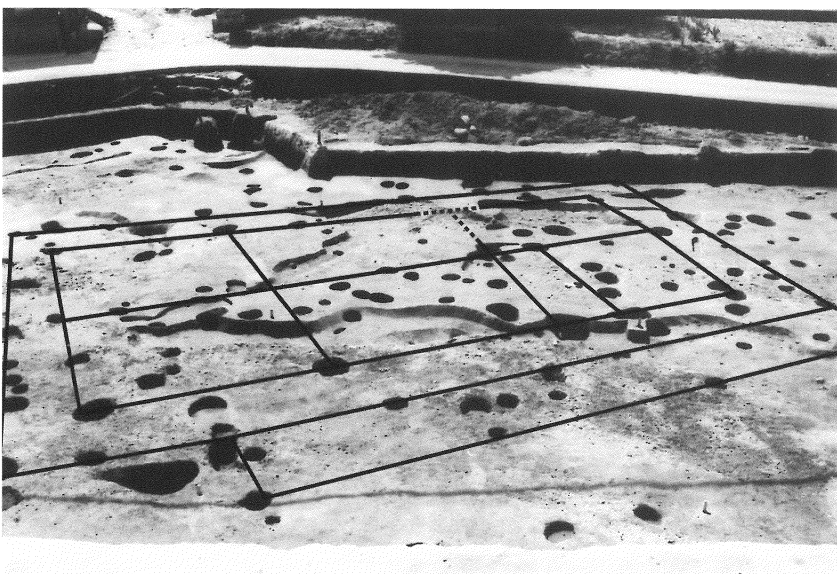
B地区 土坑164
遺物出土状況（東より）



B地区 土坑164
遺物出土状況（西より）



B地区 全景（東より）



B地区 建物4（北より）



C地区 第1遺構面
全景（西より）

C地区 第2遺構面
全景（西より）

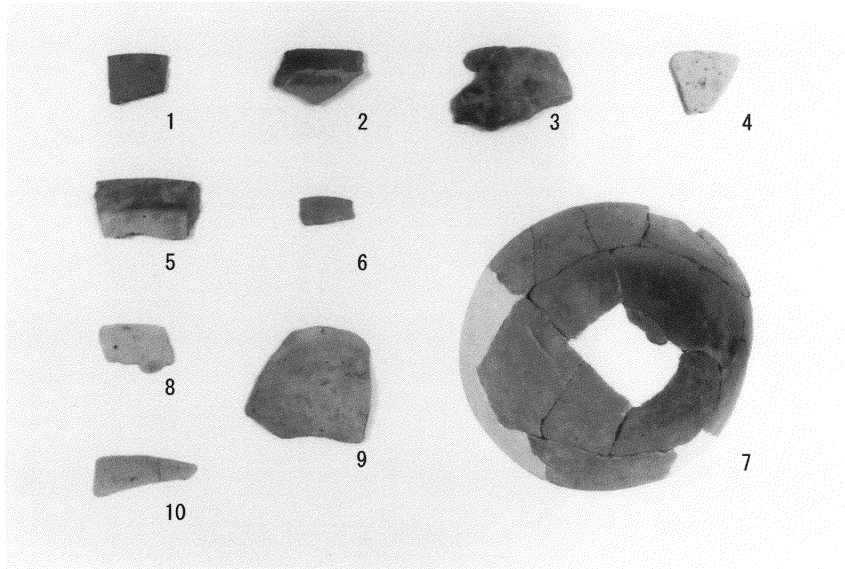


D地区 全景（西より）

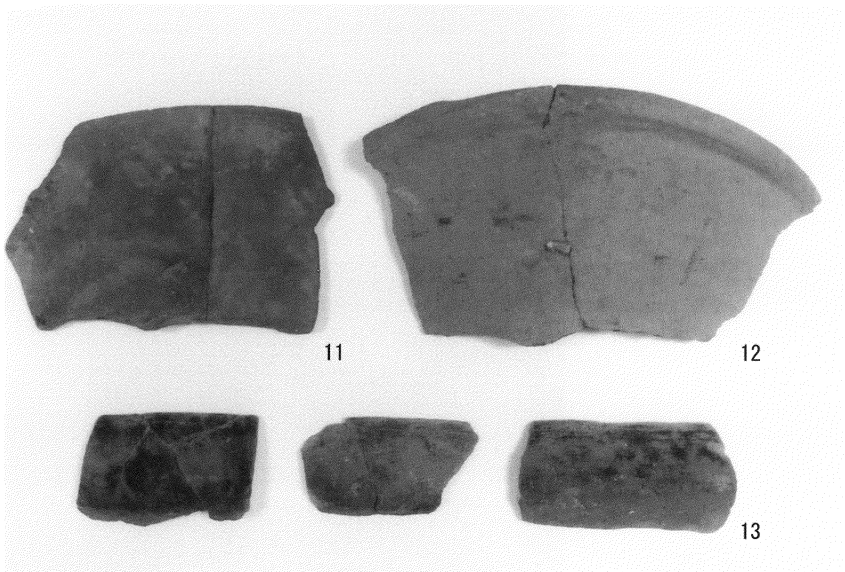


E地区 全景（西より）

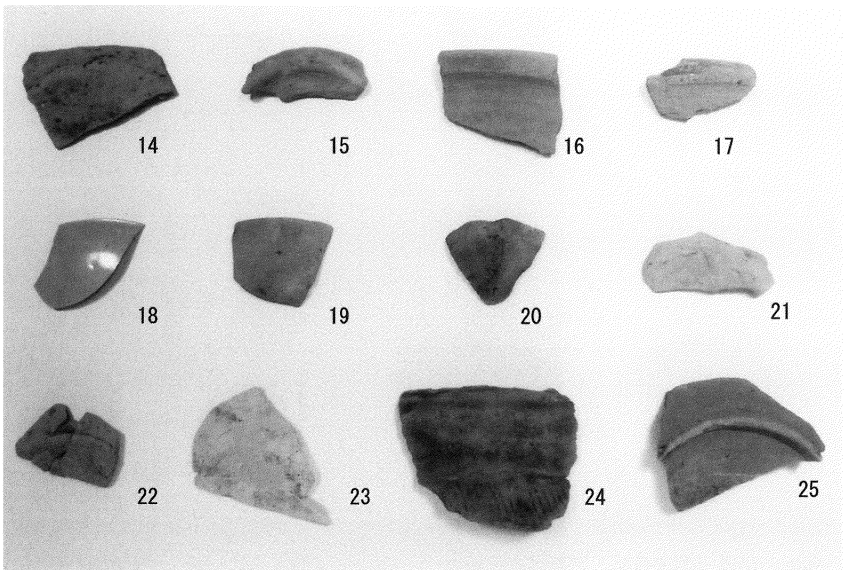




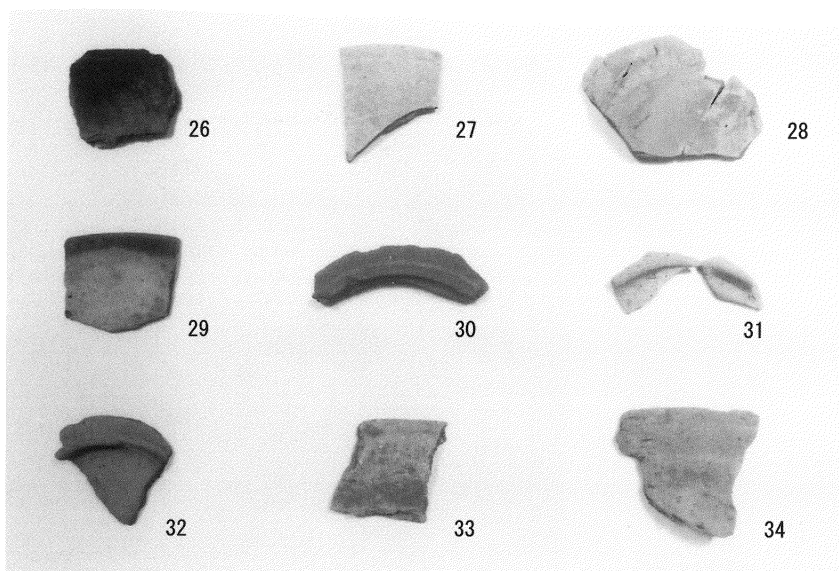
A地区 遺構出土遺物



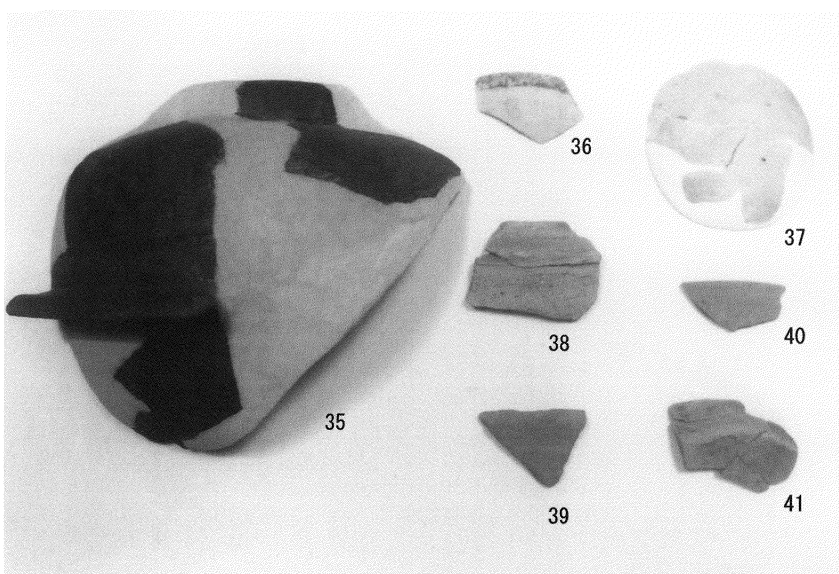
A地区 遺構出土遺物



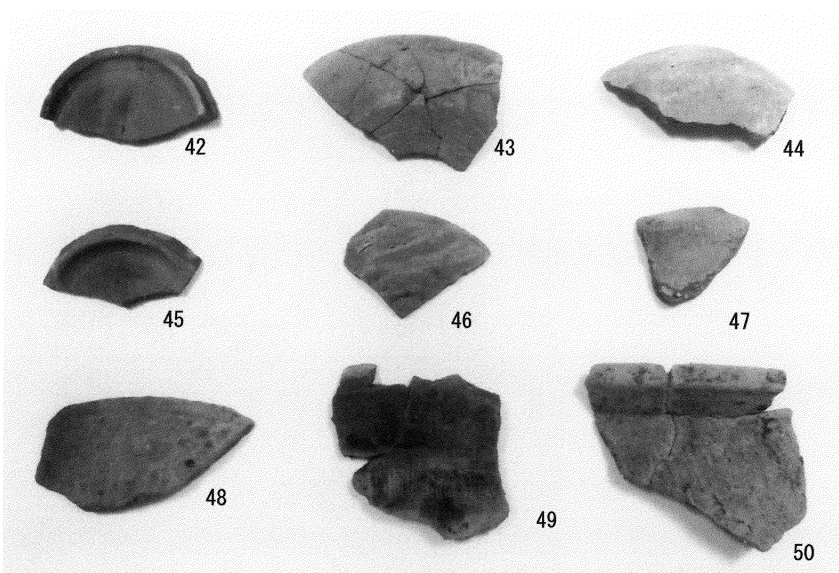
A地区 遺構出土遺物



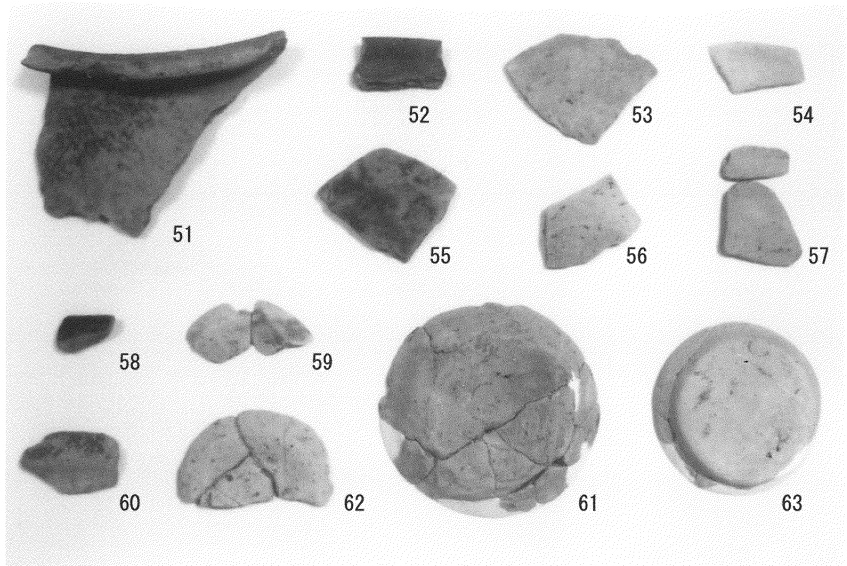
A地区 遺構出土遺物



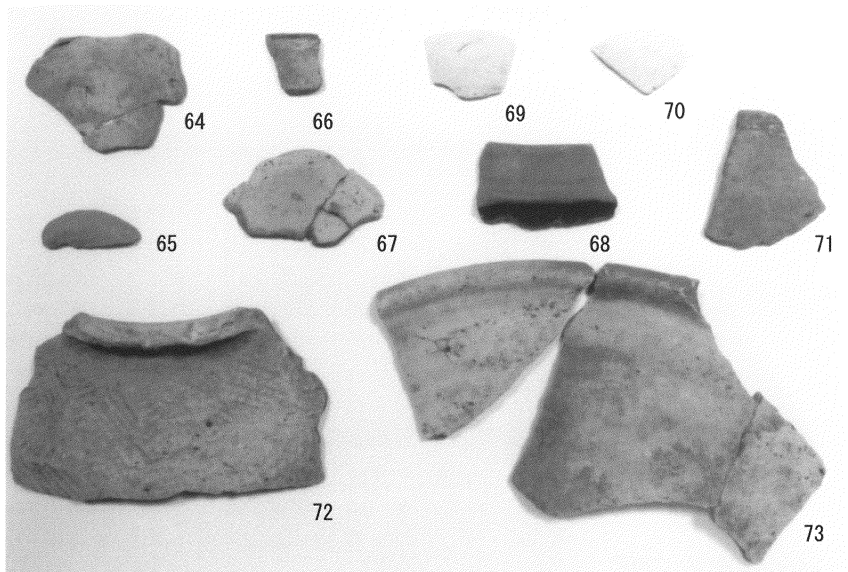
A地区 包含層出土遺物



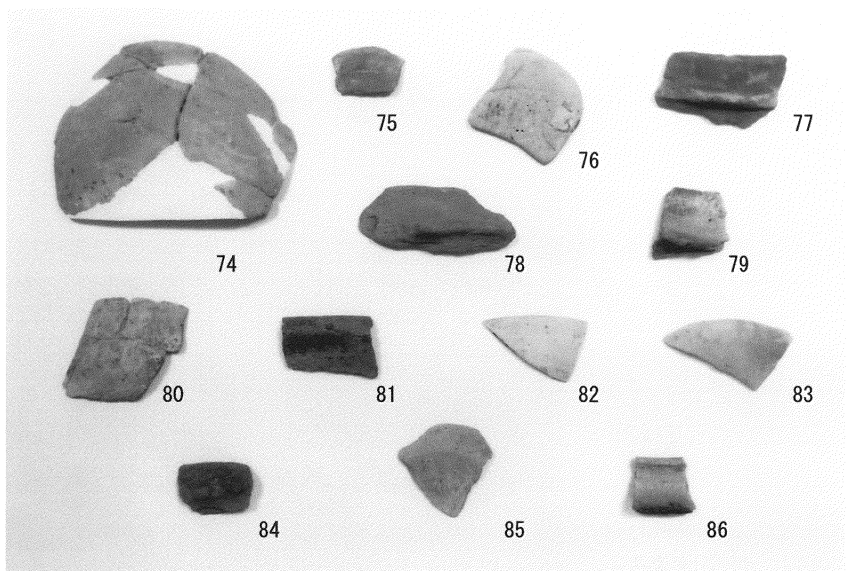
A地区 包含層出土遺物



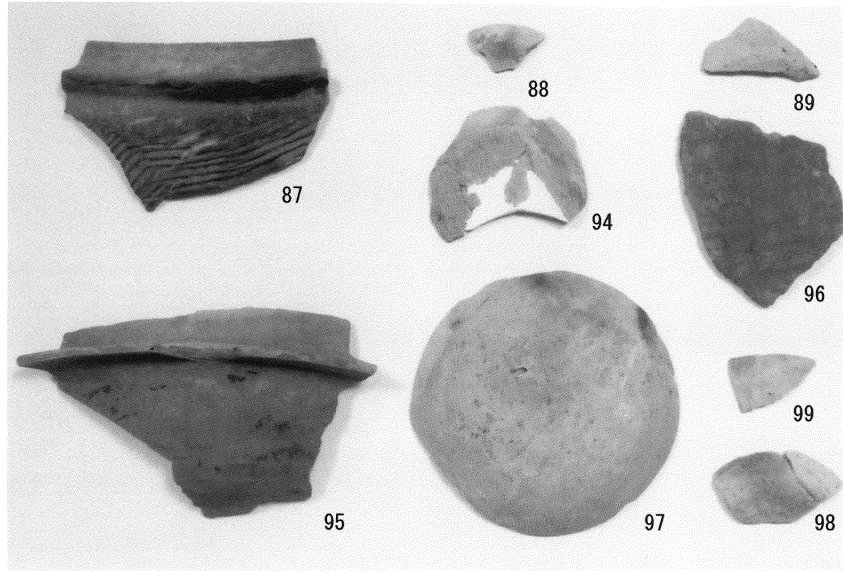
B地区 遺構出土遺物



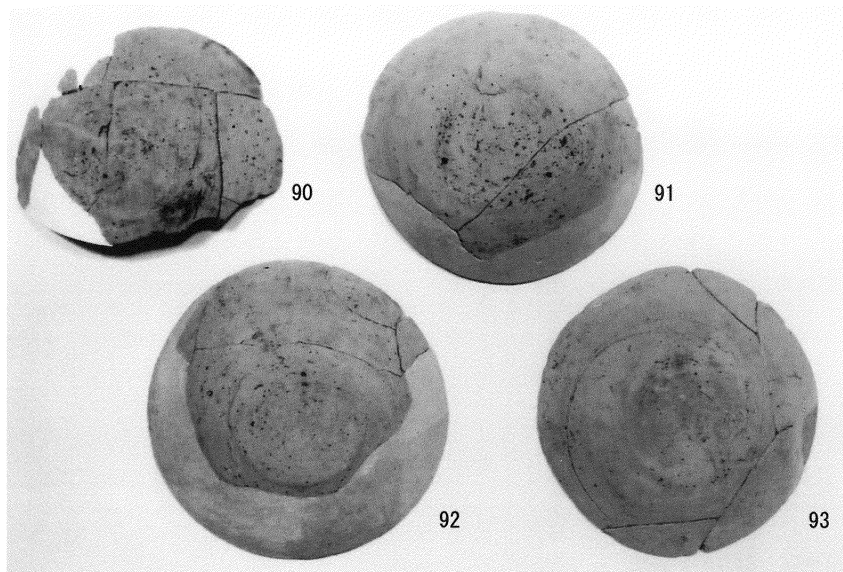
B地区 遺構出土遺物



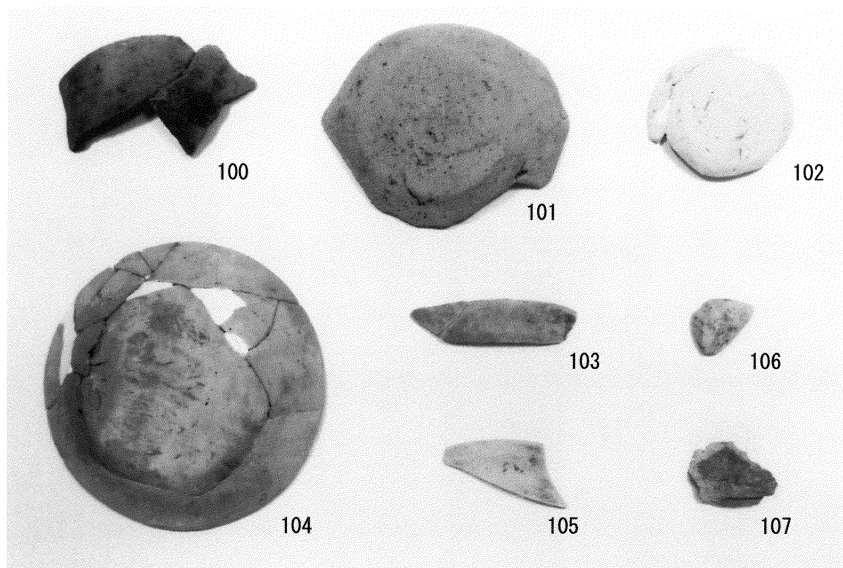
B地区 遺構出土遺物



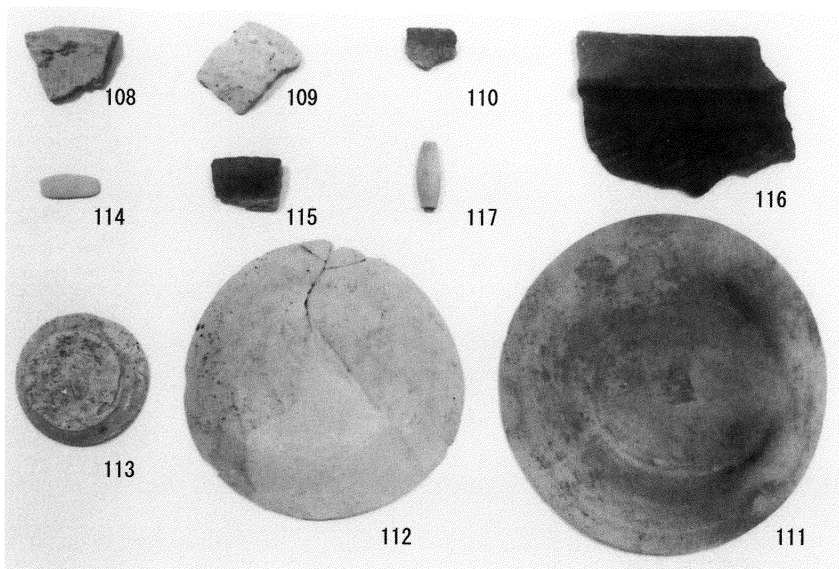
B地区 遺構出土遺物



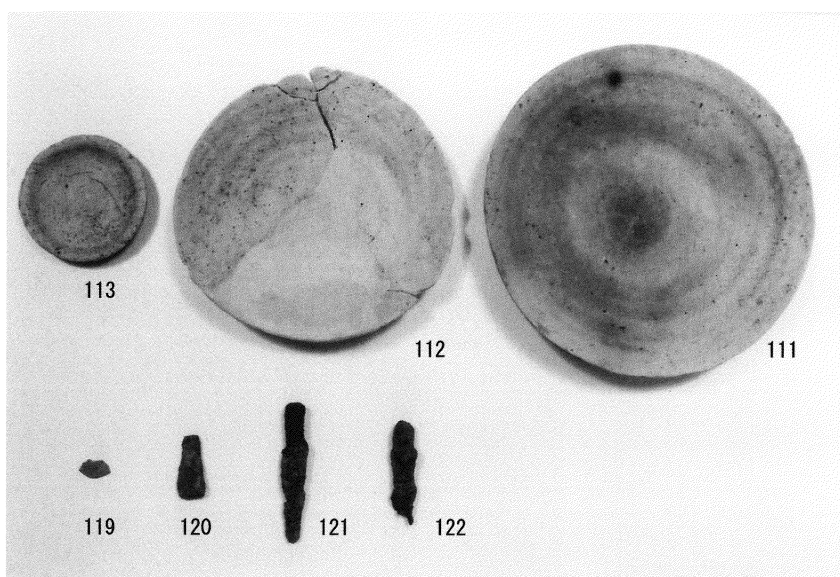
B地区 遺構出土遺物



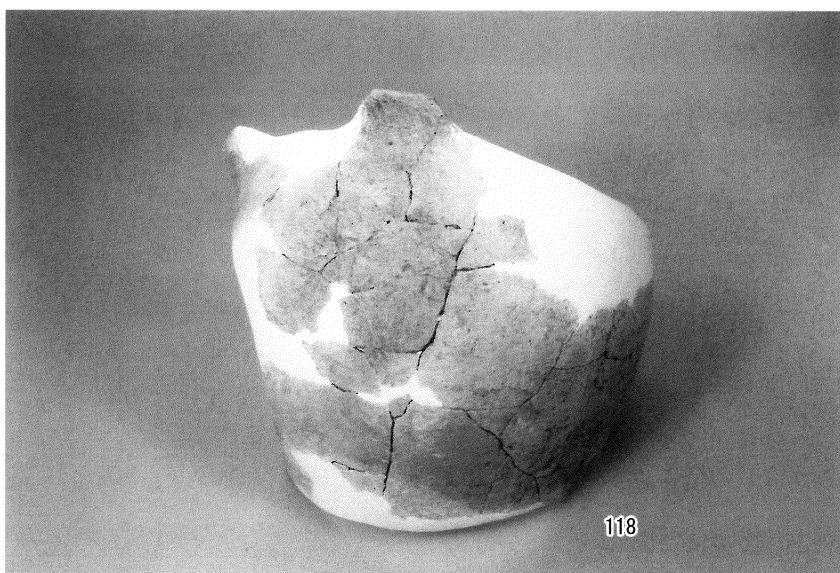
B地区 遺構出土遺物



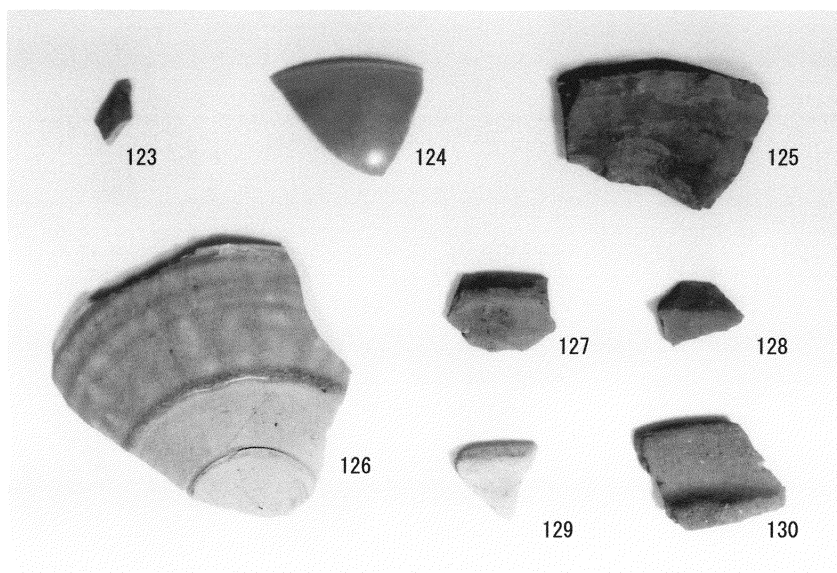
B地区 遺構出土遺物



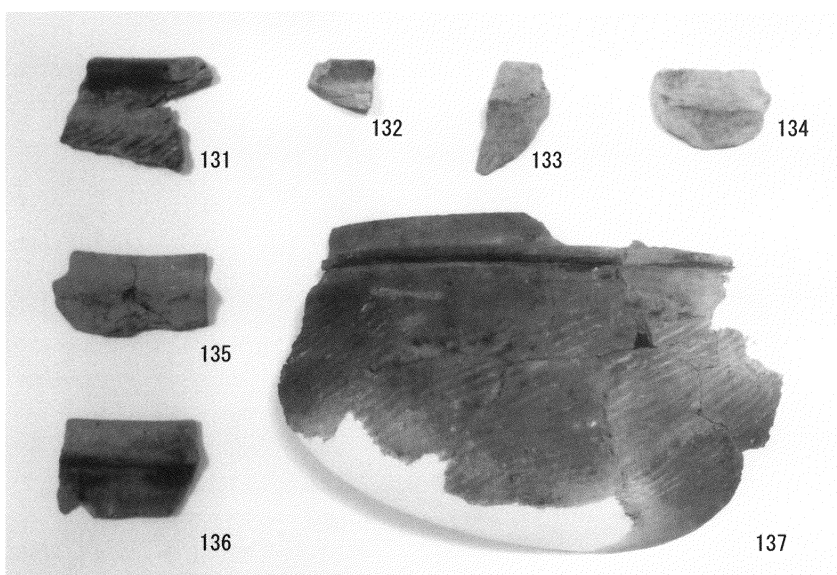
B地区 遺構出土遺物



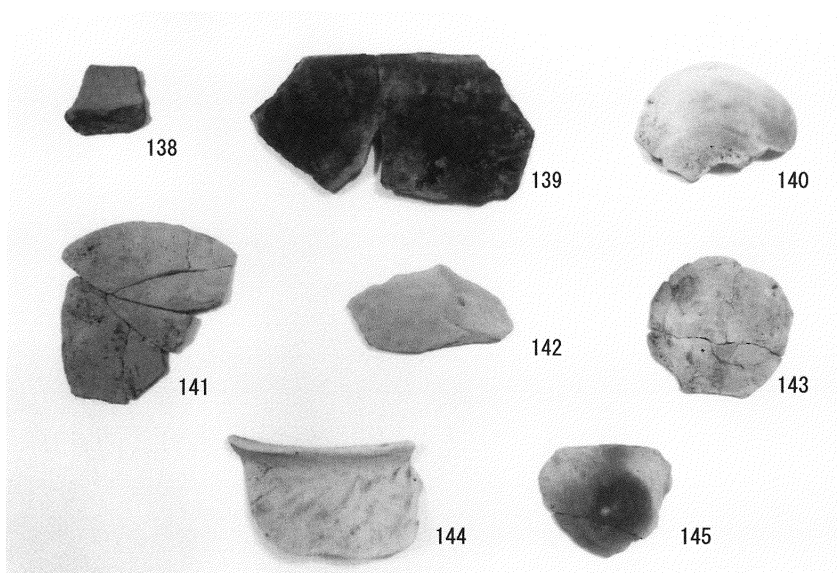
B地区 遺構出土遺物



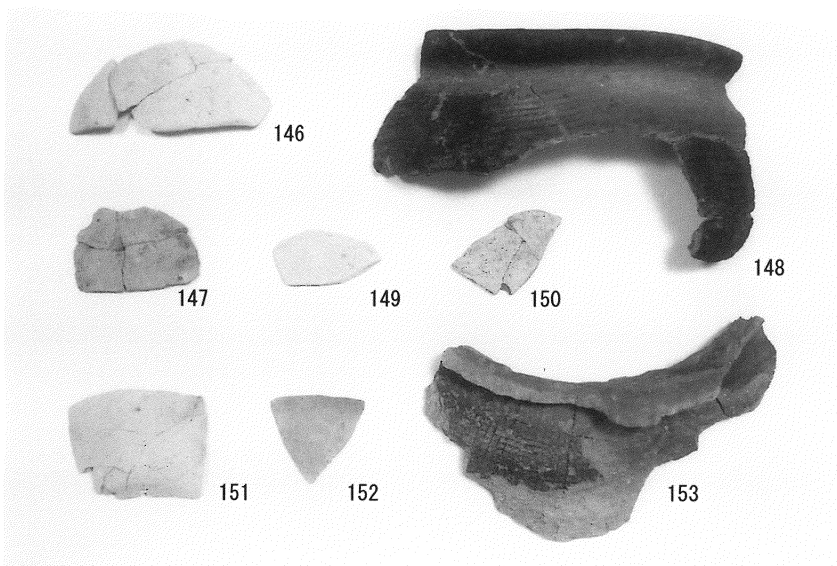
B地区 包含層出土遺物



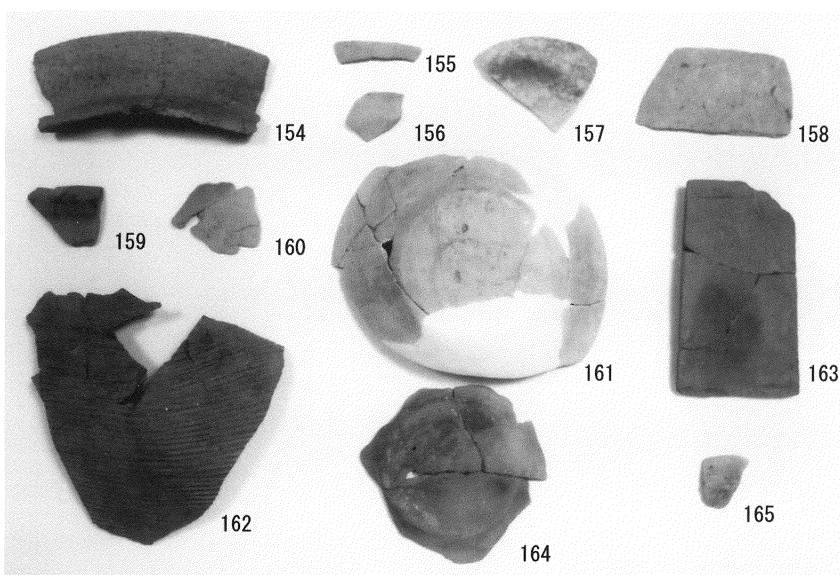
B地区 包含層出土遺物



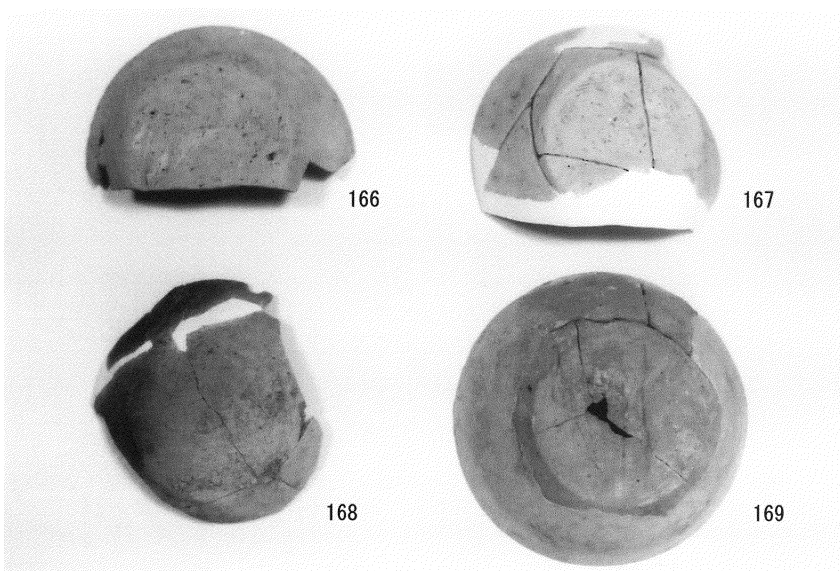
B地区 包含層出土遺物



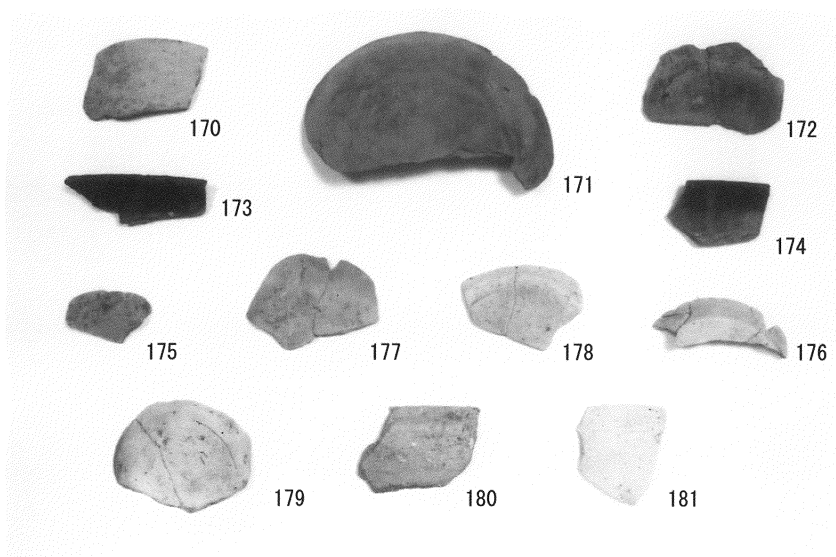
C地区 遺構出土遺物



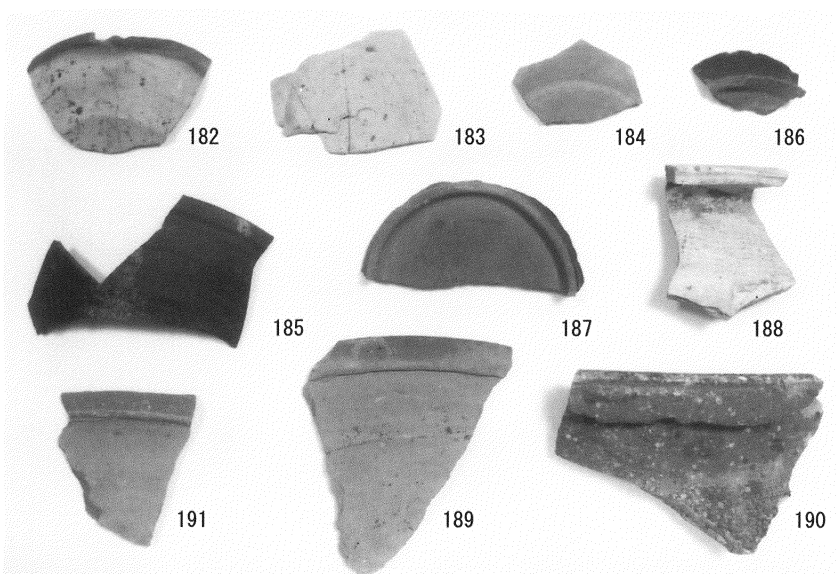
C地区 遺構出土遺物



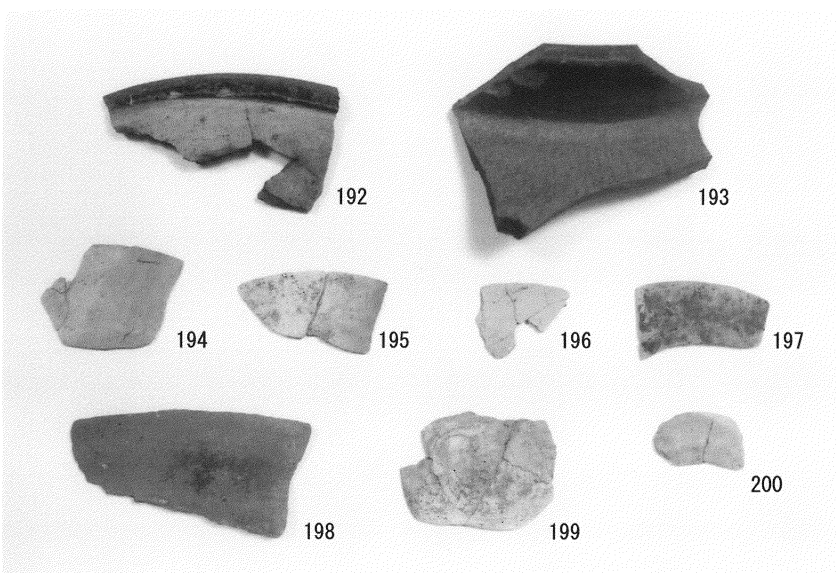
C地区 包含層出土遺物



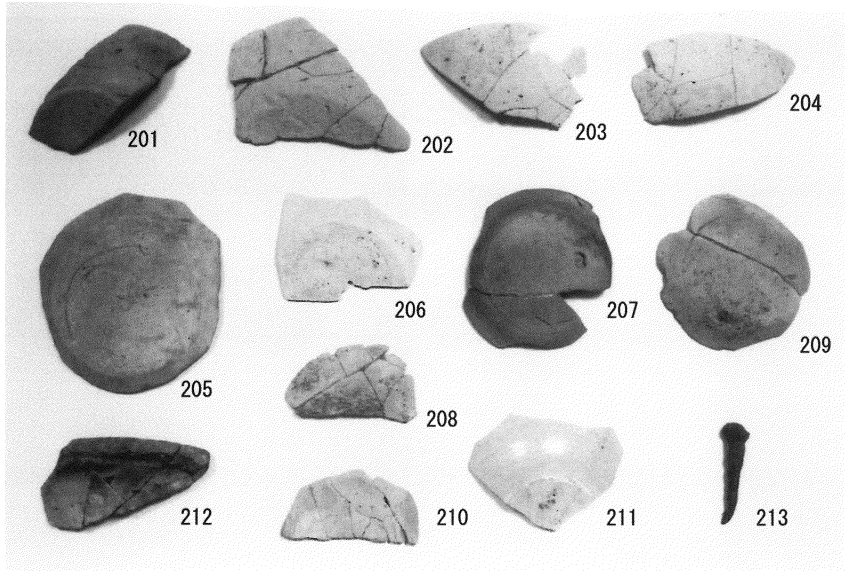
C地区 包含層出土遺物



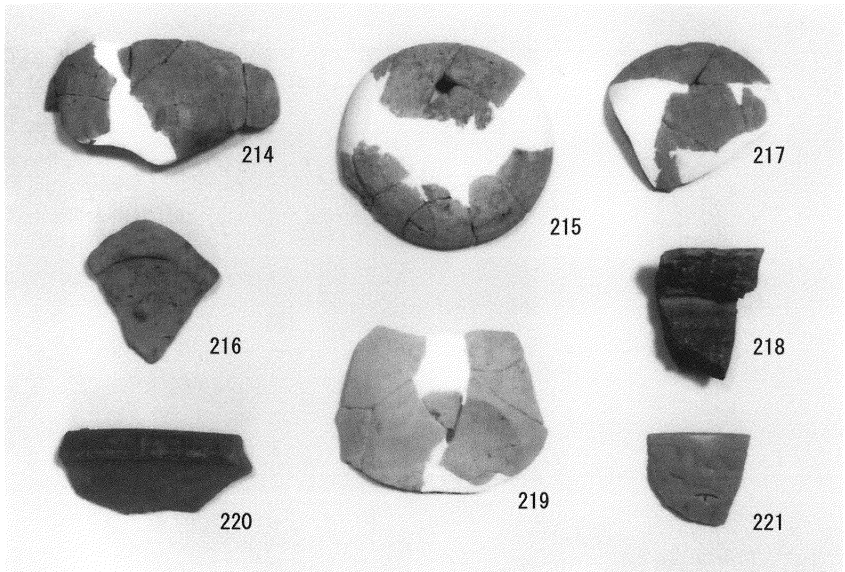
C地区 包含層出土遺物



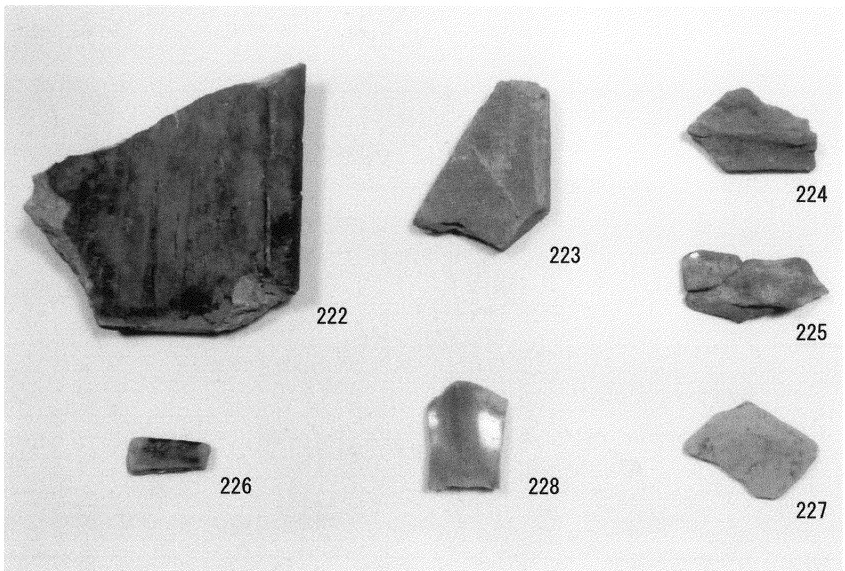
C地区 包含層出土遺物



D地区 遺構出土遺物



D地区 包含層出土遺物



D地区 包含層出土遺物
E地区 遺構包含層出土遺物

2016年3月31日発行

上久保遺跡

市道野田牛内線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

TEL 0799-42-3849

印刷 真野印刷株式会社

〒656-0435 兵庫県南あわじ市八木立石53

TEL 0799-42-0008